明治三十八年十二月二十三日(第三種郵便物認可)
明治三十九年五月三日發行(毎月一回八日發行)



寫真畫報臨時增刊第一巻第七編

凱旋觀兵式紀念帖



寫眞畫報臨時增刊 凱旋觀兵式紀念帖

明治三十九年五月三日發行

◎表紙「武勇の光」　織田東禹筆

◎口繪「皇威輝八紘」　尾竹國觀筆

●紀念寫眞版

◎貴顯御眞影（光澤紙三色刷）

◎皇太子殿下御眞影（光澤紙二色刷）

◎陸海軍九殿下（光澤紙二色刷）

◎日本武勇軍隊を見よ（二頁大）

◎枯骨横はるも忠魂死せず（二頁大）

◎滿洲軍總司令部と五大將

◎古個當日の奉天と五大將

◎第一軍寫眞

△皇軍鴨河を渉る　△花勾嶺の久邇宮殿下と黒木大將　△戰地の勅語奉讀式　△戰中電話を以て軍隊に命令す　△黒木軍の太子河徒渉

◎第二軍寫眞

△沙河渡渉と砲兵進軍　△首山堡砲擊　△沙河戰に於ける砲擊と觀測　△鐵道破壞と迂回進軍　△鐵條網と戰死者葬儀

◎第三軍寫眞

△二百三高地の觀測　△大山元帥旅順砲臺を巡視す　△破壞砲臺と旅順觀戰　△水雷を地雷に代用す　△白襷隊突貫の古戰場　△地雷搜索隊と敵砲挫折　△地雷爆發と水師營會見所　△旅順開城の紀念

◎第四軍寫眞

△大孤山上陸軍の前進準備　△野津軍の觀戰と穴居　△司令部遙かに砲擊を觀る　△砲兵今將に發射せんとす

◎鴨綠江軍寫眞

△追擊砲試驗と川村大將　△大行李前進と砲兵進軍

◎北韓軍寫眞

△北韓軍の上陸と前進　△陣中の閑日月

◎樺太軍寫眞

△樺太海岸砲擊と山中進軍　△敵軍の降伏使來る

◎戰地雜觀寫眞

△露探捕縛と支那婦人の信神　△丹後丸甲板の大山元帥　△御慰問使戰地に到着　△清國守備兵と露國捕虜　△騎兵追擊と我が戰死者

◎戰地招魂祭寫眞

△大招魂祭と薩摩踊　△滑稽踊と陣中演劇　△假裝行列と勇士の女裝

◎滿洲軍凱旋寫眞

△滿洲軍總司令部凱旋　△凱旋軍隊と凱旋門

●讀物

◎凱旋觀兵式

◎日露戰爭名將逸事談

△陸軍五殿下御逸事＝◎伏見宮殿下◎閑院宮殿下◎久邇宮殿下◎梨本宮殿下◎竹田宮殿下

△大將一口ばなし＝◎長谷川大將の一喝◎乃木大將百盃を傾く◎黒木大將と菓子◎大山大將のお好み◎奥大將の徹夜酒◎兒玉大將の萬能◎野津大將と愛馬◎川村大將と葡萄酒◎西大將の風流◎小川大將の風流

◎飛花撩亂　叱劔道人

◎觀兵式と招魂祭

△凱旋觀兵式△大觀兵式の準備△大觀兵式訓示△靖國神社合祀祭の準備◎觀兵式◎禮砲式△服裝と軍紀風紀との關係△勳章△從軍紀章

◎日本と露西亞　閃電庵主人

◎戰場活劇 日露兩雄决鬪奇談　春浪漁史

△露軍中第一の劍客△火花を散らす激鬪

◎日露戰爭驍勇武烈譚　慨世散史

△日本武士の典型△乃木大將の熱淚△名譽の聯隊長△嗚呼橘中佐△武運强き一勇士△烈火の如き氣慨△致命傷を負ふて誰何す△乃木少尉形見の名刀△淚をふるつて愛馬と別る△巨砲に跨つて死す△山本少將の戰死△圖らず愛弟の墓に會す△私は此處で死にます△地雷火探險の决死隊△死して生けるに似たり△武勇の三人砲兵△重傷を秘して戰ふ△使命を果さずんば死せず△福島中尉部下に遺言す△彈丸雨飛中に日記を書く△伍長敵將を組伏す△彈丸は表門から裏門へ△此劍で切腹するのみ△生意氣めイ△大いに笑へ！

◎日露戰爭美談と奇談

△黒木大將の剛膽△一郎左衛門なる名△晛合の的は一羽の雁△鳥目一等卒の剛情その他いろ〳〵

◎陣中の風流

△鷗外漁史の「箱入娘」△軍歌「征露日記」その他いろ〳〵

◎戰地滑稽談

△ブランデー軍萬歳！△露探を喰はんか△白馬の大將軍△此奴石頭だな△妙計を以て臭氣を拂ふ△變な爆發藥△開けて口惜しき玉手箱△天罰だ〳〵△駄目だ〳〵夏に限る

◎凱旋觀兵式盛觀

△空前の盛典！△御道筋の混雜△萬歲！萬歲！△盛觀！盛觀！△凱旋行軍△市中の雜鬧

◎記事每頁には日露戰爭參加將官六十餘名の肖像を連載す



皇威輝八紘

THE GLORY OF JAPAN.

Drawn by Mr. Odake.

尾竹國觀謹寫



皇威輝八紘

THE GLORY OF JAPAN.

Drawn by Mr. Odake.

貴顯御眞影

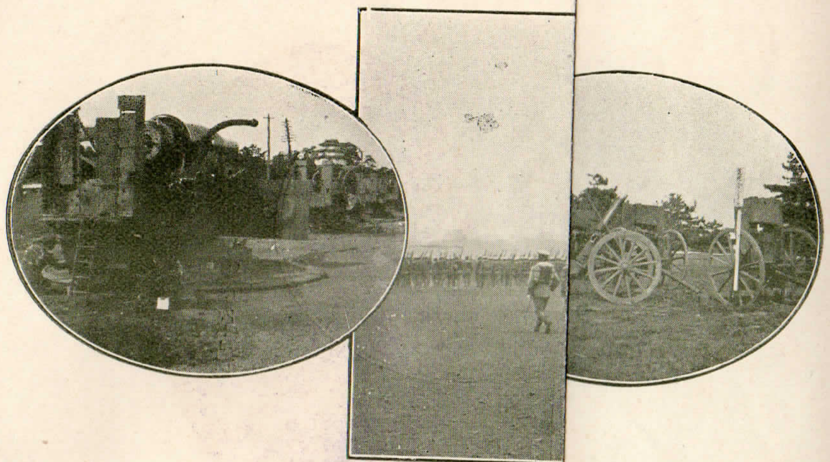
H. I. M. THE EMPEROR OF JAPAN.



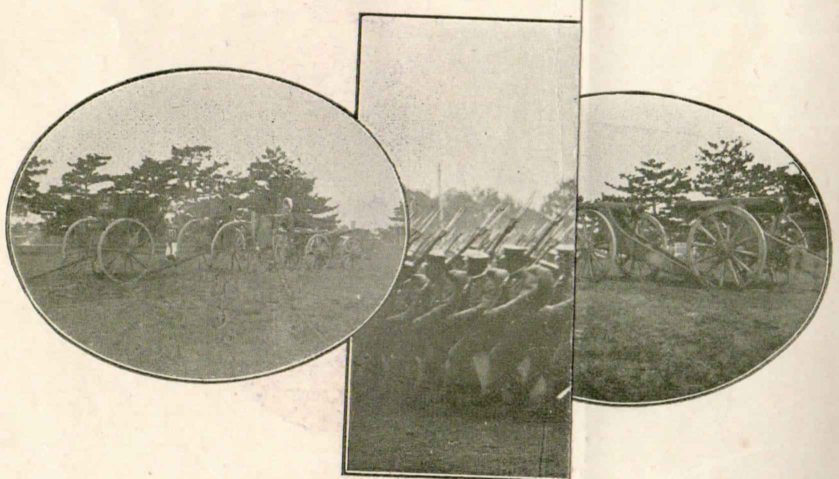
皇太子殿下御眞影

H. I. H. Crown Prince of Japan.









圖中にあるは宮城前陳列の戰利砲。他は我が武勇軍隊の青山練兵場に於ける雄風堂々たる活動なり。

陸海軍の九殿下

THE IMPERIAL HOUSEHOLD IN THE ARMY AND NAVY.

陸軍大將伏見宮殿下　海軍大將有栖川宮殿下　陸軍中將閑院宮殿下

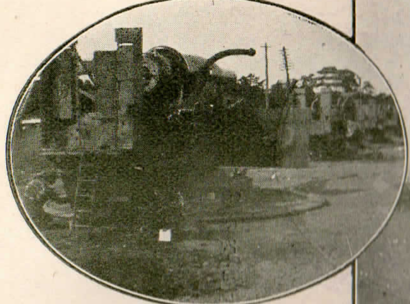
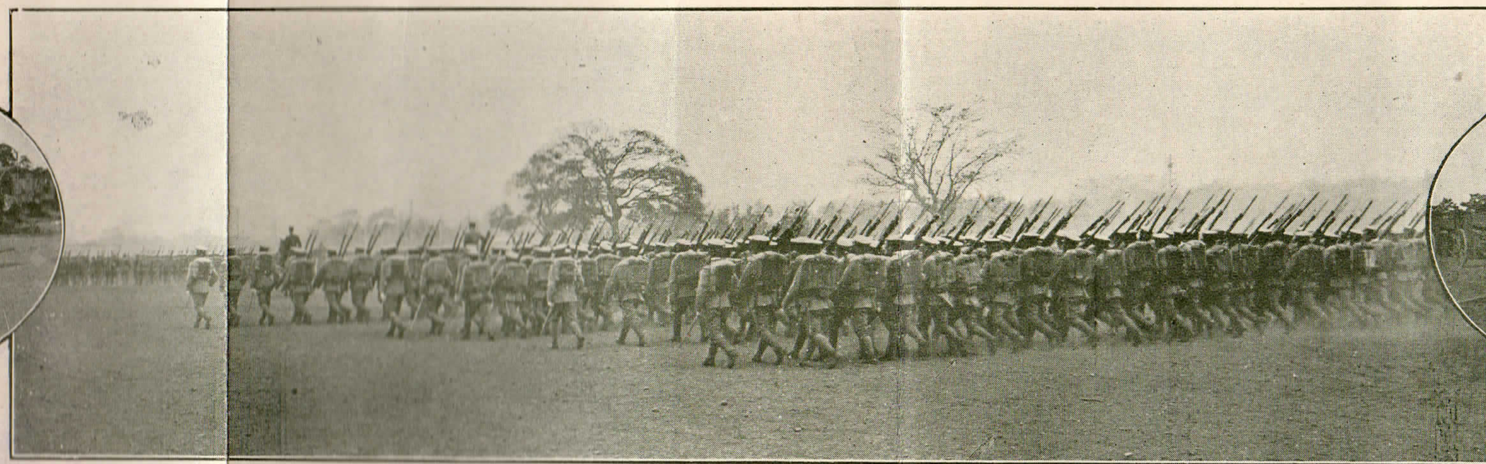
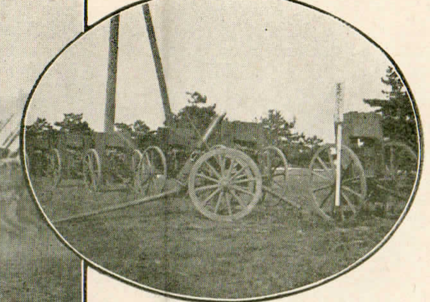


海軍大佐東伏見宮殿下　步兵少佐久邇宮殿下　步兵少佐梨本宮殿下

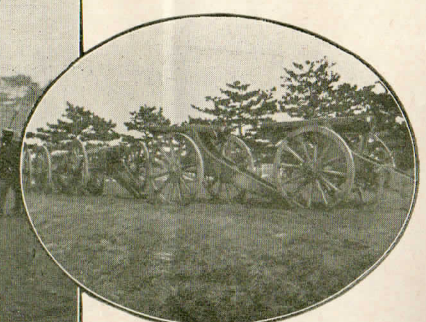
海軍少佐山階宮殿下　海軍少佐伏見宮若宮殿下　騎兵中尉竹田宮殿下

日本武勇軍隊の雄風を見よ

HOW BRAVE ARE THE JAPANESE SOLDIERS!



圖中にあるは宮城前陳列の戰利砲。他は我が武勇軍隊の青山練兵場に於ける雄風堂々たる活動なり。

枯骨横はるも忠魂死せず

THE WONDERFUL VICTORY WON BY OUR EMPIRE MUST BE ATTRIBUTED TO THE ROYAL SOLDIERS WHO SACRIFISED THEIR LIVES WITH JOYOUS HEARTS.



九段坂上靖國神社

招魂社内遊就館

蛤蟆塘古戰場に我が忠勇戰死者の枯骨横はる

帝國戰捷の光榮は、忠勇義烈の軍隊が、血を流し骨を枯らして得たる也、若し些かにても國威を傷くる者あらば、神人共に怒り、勇士の忠魂は地下に哭かん。

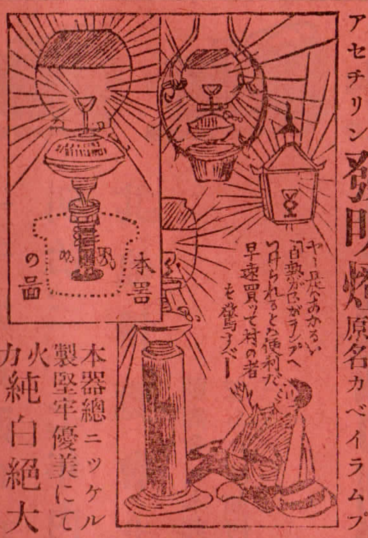
ブラニール

神經衰弱▲腦病不眠記臆減耗▲房事過度手淫諸害▲遺精夢精等生殖器病に卓効ある保證新劑也定價十日用壹圓▲卅日用二圓八十錢●六十日用五圓四十錢▲

東京日本橋新和泉町 長江藥舗

▲空前の利益 白熱の大敵 石油いらず アセチリン 洋燈界の大發展

發明燈 日本政府特許申請 原名カベイラムプ



本器總ニッケル製堅牢優美にて火力純白絶大

宛ら太陽の光輝に異らず停水の裝置て螺旋、座鋼、を具備し輕便なる事在來の各種洋燈に用得べく且つ安全なり交際上營業上使用し如何に顧客を悅ばしむる?價値は一見五圓以上と見何人も疑はざる所なり▲價上等ホヤ藥品等添へ一個二圓三十錢の所爲廣告の壹圓九拾五錢とす送料二千個限り十錢爲替高砂町局宛代金引替は『端書』にて至急申込あれ▲詳細カタローグに有郵券二錢で送呈す

日本一手發賣 東京日本橋新泉町六番 菱亞商會

●圖書目錄進呈

三錢切手封入申込あれ

博文館小賣係

肺病

私儀多年肺病にて九死の際偶々一奇法發明の爲め全治せる故世の同病者を救ひたき志願に付望の方は郵劵封入にて御照會あれ

東京府下大森入新井村 川名功次郎

生殖器病専門藥

男女生殖器異常諸症●萎縮●遺精●早漏●無力●局部衰弱●過度の大害●老衰●神經腦病又は婦人は子宮病諸症にて氣欝衰弱し神經不能●貧血●不姙娠にて數年惱み種々の藥劑又は諸名家の治療等百方手を盡すも効なく身體蒼白を來し鬱々として樂まざる人よ此藥を輕症は三週いかなる重症ても七週服用すれば根治強壯となること請合なり

本劑三週七週分には歐米諸大醫の萬試實驗せし病理、源由、組織、養生、療法等詳細説明の秘法書一册を呈す

●藥價一週七十錢三週二圓七週四圓五十錢送料六錢

發賣元 東京市馬喰町二丁目十番地 山崎愛國堂

肺病患者の福音

醫科大學藥學專攻 藥學得業士金澤巖著

著者肺病全快の經驗と最近の學說に基き親切叮嚀に根治の法を詳述せし物也●郵劵二錢封入申込者に無代施本

東京市下谷區上根岸町 衛生書院

久留島武彦君編

國民必携 陸軍一斑

全一册洋裝 正價貳拾五錢 郵稅六錢

著者は久しく職に陸軍にありて軍隊事務に經驗ある人にして本書は萬般の軍務を說述し鼇頭には獨逸軍制綱領及び陸軍禮式を明にし讀者の閲覽に供せり國家の基礎たるべき軍事これにて知るべく眞に刻下必讀の書なり此書の要は啻に軍人のみならず苟も義勇奉公の尙武心を有する日本國民たるもの亦必讀の書なり

三宅青軒君著

陸海軍人書簡文

全一册洋裝 正價貳拾錢 郵稅六錢

文筆ある者は武備ありと、同時に身を軍籍に置くもの、豈文事なくして可ならんや、況んや戰爭通信、平素の贈答、其書翰文の應用を要する事、頗る多きに於てをや、戰時平生兩樣の書翰文に就て作法を叙し、作例を述べ、實地活用の便に供すること極て懇切、而して之に加ふるに祝弔記傳公用文等の諸作例を示し鼇頭別に軍人心得なるものを添ふ、眞に軍人諸君が座右の寶庫、蓋し一日も缺く可からざるの書なり

發兌元 東京 博文館

博文館編輯局主幹 坪谷水哉君編纂

日露戰爭 凱旋みやげ

▲附錄‖滿韓戰局面全圖(縱一尺八寸 橫一尺三寸)

滿韓の野に於ける我軍、連戰連勝の光景を撮影したる寫眞は我軍の功績を萬古に傳ふべき最大紀念なり。而かも從來戰地の光景を全く一册の中に收めたる寫眞帖無し。是れ最も惜む可し本書は戰地全般の精巧なる寫眞と地圖とを編述し、且つ成し能ふ限り代價を廉にして以て將卒の功績を不朽に傳へんと欲す。收る所の寫眞は大約下の如し

◎高貴御肖像◎皇太子殿下◎從軍各宮殿下◎滿洲軍總司令官◎同總參謀長◎黑木、奥、乃木、野津、川村、長谷川各軍司令官◎各師團長◎旅順◎遼陽◎沙河◎黑溝臺◎南山◎金州◎得利寺◎大石橋◎鴨綠江◎摩天嶺◎烟臺◎撫順◎鐵嶺◎開原◎營口◎法庫門◎昌圖◎京城◎大連◎平壤◎浦◎仁川◎鎭南澳◎大孤山◎大鹽

全一册太陽判橫綴 寫眞百餘圖 正價參拾五錢 郵稅八錢

波蘭 シダコッツ氏著 日本 田原禎次郎君譯

光榮の日本

全一册洋裝大判 正價貳拾五錢 郵稅六錢

海軍機關大監 關重忠君撮影編纂

日露戰役 海軍寫眞 朝日の光

一等戰鬪艦朝日が、日露戰役開始以來、帝國艦隊の主力と爲り、毎次の海戰に赫々の偉勳を奏せるは、中外を通じて之を知らざる者無し。艦の機關長機關大監は本務の餘技として、最も寫眞術に長じ、其の大本營の囑託によりて撮影せられたるもの、實に海軍戰況寫眞の精髓たり。而して今は其開戰の初より旅順と、黃海、日本海等の海戰に至るまで、朝日艦が、勇戰大奮鬪の光景と觀艦式の壯觀と、總て數百種の撮影中より大監自ら粹を抜きて一百餘圖を集め、以て此の振古未曾有なる戰勝の名譽を不朽に傳へんとするもの乃ち此の「朝日の光」なり

全一册四六判二倍橫綴洋布上製 正價壹圓 郵稅拾四錢

(鮮明寫眞版百十餘枚)

東久世伯題字 土居香國君序 松永聽劍君編纂

樺太及勘察加

全一册洋裝大判三百六十頁 正價五拾錢 郵稅八錢

東京 博文館 本町

日露戰史

太陽判（四六二倍大）
本文二百餘頁寫眞版
廿四頁銅版戰局圖及
戰鬪地圖數多挿入
定價一冊卅錢郵稅三錢

第一卷

▲日露の危局と戰役初期の海戰

國府犀東君編

第壹編 總說
第一章 日露戰役の特色
第二章 日露戰役の啓示
第貳編 日露の危局
第一章 滿洲問題
第二章 日露交涉
第三章 交涉遷延と帝國機宜の行動
第四章 日露外交の斷絕
第參編 戰役初期の開戰
第一章 海上權掌握の方略
第二章 聯合艦隊の戰場進發
第三章 仁川の海戰
第四章 第一次旅順口攻擊
第五章 日露宣戰の布告
第六章 第一次旅順口閉塞
第七章 第二艦隊の浦港砲擊
第八章 三月十日の旅順激戰
第九章 第二次旅順口閉塞
第十章 旅順口港外の海戰
第十一章 陸兵掩護の行動
第十二章 浦港艦隊と第二次浦港砲擊
第十三章 第三次旅順口閉塞
第十四章 第二軍の上陸掩護
第十五章 掃海事業の險難
第十六章 敵港の封鎖
第十七章 金州の陸戰援助
第十八章 遼東半島封鎖の宣言

◉附錄 日露戰局全圖（竪二尺八寸橫二尺三寸）開戰前の日露軍艦一覽圖（寸法同前）

第二卷

▲第一軍初期の活動

國民新聞從軍記者 梅田又次郎君編

第壹編 上陸及前進
第一章 第二十三旅團の出發上陸及前進
第二章 平壤の占領
第三章 安州の占領
附 敵の襲擊
第四章 定州の戰鬪及占領
第五章 各師團の前進及配備
第貳編 鴨綠江の戰鬪
第一章 架橋工事の困難
第二章 河川偵察の困難
第三章 九里島の戰鬪及占領
第四章 鴨綠江の砲擊戰
第五章 九連城の占領
第六章 近衛師團戰鬪の經過
第七章 蛤蟆塘の激戰
第八章 山砲隊の殊動
第九章 衛生隊の勤勞及任務
第十章 鳳凰城の占領
第參編 各方面に於ける偵察
第一章 鳳凰城附近の小衝突
第二章 靉陽邊門の敵襲
第四章 第三師團前衛隊の四小戰鬪

◉附錄 第二師團鴨綠江渡河戰圖○近衛師團渡河戰圖○第十二師團蛤蟆塘大激戰圖

第五卷

▲大孤山陸軍及第四軍初期の活動

東京朝日新聞從軍記者 熊谷直亮君編

總論附 第四軍初期の經歷
第一章 大孤山獨立上陸軍
第十師團の出發の光景▲外數項 ▲南央澳上陸
第二章 上陸後の活動
上陸第一の血祭戰 ▲大孤山平野の占領
第三章 岫巖占戰領
岫巖攻擊の運動 ▲赤帽軍の協同動作 ▲外數項
第四章 岫巖北方の形勢
彼我兩軍の狀況 ▲新開嶺一連の占領 ▲外數項
第五章 分水嶺の攻擊
第六章 上陸軍の北進
第七章 第四軍の活動
第四軍司令部 ▲內地出發の光景 ▲外數項
第八章 第四軍司令の前進部
▲軍司令部 諜者密偵の募集雖の岫巖出發 ▲外數項
第九章 我軍の位置
第十章 析木城戰鬪
第十一章 大戰鬪後の矚目
第十二章 遼陽進擊の準備
補記 將軍傳記・塞上餘韻

▲口繪 大孤山上陸軍當時の第十師團の首腦◎敵中日探の大捕縛◎第四軍各地戰鬪寫眞等

第六卷

▲第一軍次期の活動

國民新聞從軍記者 梅田又次郎君編

第一編 第二師團の前進
第一章 摩天嶺第一回の敵襲
第二章 摩天嶺二回の敵襲
第三章 摩天嶺の激戰
第四章 石門嶺の敵襲
第二編 第十二師團の前進
第一章 小市附近の戰鬪
第二章 東家嶺の戰鬪
第三章 橋頭の激戰
第三編 近衛師團の前進
第一章 淺田枝隊と岫巖占領
第二章 南部大荒溝の戰鬪
第三章 里浦嶺の戰鬪
第四編 樣子嶺の激戰
第一章 近衛師團の戰鬪準備
第二章 右翼隊の戰鬪
第三章 中央及左翼隊の戰鬪
第四章 第二師團の戰鬪
第五章 日露文野の差
第五編 榆樹林子の激戰
第一章 第十二師團の戰鬪
第二章 木越旅團の戰鬪（右翼隊）
第三章 井上旅團の戰鬪（左翼隊）
第四章 岡崎旅團の戰鬪

附錄 補記
◉戰局地圖
●摩天嶺第二回敵襲戰鬪略圖
●橋頭の戰鬪略圖
●榆樹林子の戰鬪略圖

每月二回
五日廿日發行

發兌元 東京本町 博文館

第三卷

▲第二軍の前進

博文館從軍記者 田山花袋君編

第壹編 上陸
第一章 出發前後の狀況
第二章 鎭南浦集合
第三章 鹽大澳の上陸
第貳編 金州南山の戰
第一章 十三里臺の戰鬪
第二章 金州南山攻擊に於ける彼我兩軍の位置
第三章 廿五日の偵察戰
第四章 金州城の占領
第五章 砲戰
第六章 金州南山の步兵戰
第七章 追擊
第八章 大連占領
第參編 得利寺の戰
第二軍北進當時の狀況外七章
●四編 蓋平の前進
第一章 得利寺戰後の經營
第二章 熊岳城の占領
第三章 滿洲軍總司令部の特設
第四章 蓋平攻擊
第五章 蓋平平野に於ける軍の滯留
第五編 大石橋の戰及其以後
第一章 大石橋戰前の形勢
第二章 二十三日の戰
第三章 廿四日の大戰
第四章 追擊戰
第五章 戰後
第六章 營口占領
第七章 海城占領

◉附錄 戰鬪地圖○帝國陸軍公報○戰鬪雜話等

第四卷

▲海軍第一期作戰の成功

日露戰爭實記記者 平田骨仙君編

第一編 遼東半島の封鎖
第一章 總說
第二章 旅順口の强行偵察
第三章 大連灣の掃海 外三章
第二編 旅順艦隊の逸出
第一章 六月二十三日旅順港外の海戰
第二章 封鎖至嚴、敵艦隊の苦悶
第三章 八月十日黃海大海戰
第四章 遁竄露艦の處分
第三編 浦鹽艦隊擊壓
第一章 總說
第二章 封鎖宣言前の姿勢
第三章 支海灘の悲劇
第四章 韓海の陰雲
第五章 太平洋の敵艦隊
第六章 蔚山沖の大海戰
第四編 敵國東洋艦隊の全滅
第一章 大戰後彼我對抗の姿勢 外十一章

▲口繪 海軍御從軍の三殿下◎海軍陸戰重砲隊と司令黑井中佐◎八月十日の大海戰◎膠州灣竄入のツェザレウヰツチ其他の敗殘敵艦等數十面

第七卷

▲遼陽の包圍攻擊

博文館從軍記者 坪谷善四郎君編

第一編 總說
第一章 露軍の防禦配備
第二章 日本軍の攻擊準備
第二編 黑木軍の戰況
第一章 初期の戰鬪
第二章 側面攻擊
第三編 野津軍の勇戰
第一章 鞍山站及燔家爐の戰
第二章 野津軍の總攻擊
第三章 遼陽城下の戰鬪
第四編 奧軍の戰況
第一章 奧軍遼陽準備戰
第二章 大島師團の奮戰
第三章 大久保師團の戰鬪
第五章 遼陽郊外の激戰
第五編 結論

附錄 ▲遼陽戰に於ける兵力の對照 ▲日露陸軍の公報
補記 ◎海外戰評と影響
◉戰局地圖 ●遼陽戰に於ける各軍行進經過 ●遼陽附近戰鬪圖

▲口繪 黑木軍の各將校、北白川殿下と司令部幕僚、鳳凰城附近の戰利砲隊、從軍外國武官と內國記者外拾數葉

第八卷

▲第三軍初期の活動

東京日日新聞從軍記者 半井桃水君編

第一編 旅順前進陣地の戰鬪
第一章 南山占領後の經過
第二章 フィン山及歪頭山攻圍軍の前進 外八章
第二編 第一回總攻擊
第一章 右縱隊の動作
第二軍 中央縱隊の戰鬪
第三章 ◎縱隊の動作
第三編 部分攻擊
第四編 第二回旅順總攻擊
第一章 右縱隊方面
第二軍 中央縱隊方面
第三章 爾後の經過

附錄 松樹山方面外四項 ▲帝國陸軍公報 ▲旅順攻圍軍に於ける個人
補記 ◎軍陣雜記◎美譚逸話
●戰局地圖 ▲旅順金州附近略圖

▲口繪 第三軍の各將軍、旅順要塞の敵壘、旅順の激戰場松樹山砲臺破壞の一部、破壞せる旅順新聞社旅順用水の水源外拾數葉

黒木大將書簡　藤井少將序文

黒木軍通譯官　來原慶助君著

黒木軍百話

全一冊洋裝大判正價四拾錢郵稅六錢

▲口繪寫眞銅版八頁コロタイプ二頁

○行軍難（道路と天候、給養と運搬力）○水路と沿道の架橋○通信機關（其一郵便、其二電信）○陸戰劈頭の戰死者○豪傑を擊退す○江畔に一大工場を現出す　○先づ點定九里の二島を畧す　○敵前架橋（橋長二千百餘米突）○一發巨彈のお見舞（我重砲の威力）○山雲欲來風滿樓（總攻擊の前日）○正々堂々として江を渡る○蛤蟆塘の追擊戰（三面包圍攻擊）○赤裸で先登す○第一軍感狀の嚆矢○敵の敗戰理由（戰術上より觀たる）○敵將の敗戰報告○清國官憲の報告（露軍潰退に關する）○紀念碑を摺鉢山に建つ○阿總督の告示○黑木軍司令官の告示○沙漠を出でゝ泉地に入る○舌人笑話○彈丸竭き乘馬斃れて臣が事終んぬ○一兵卒敵の將校を生擒す梨花如雪○不染の股引半染となる外七十項

兒玉大將題辭　佐藤大尉校閱

杉本文太郎君著

戰鬪圖解

全一冊洋裝大判正價卅錢　郵稅六錢

軍隊は如何にして編制せられ各兵種の性能は如何にして發揮せられ充員召集は如何行軍は如何宿營は如何又戰鬪は如何にして開始せられ攻擊は如何にして擧行せられ追擊は如何防禦は如何戰場に於ける死傷者の處置、戰鬪後の處置其他行李輜重を初め兵器及び彈藥の補充、被服裝具の補充人馬の補充等本書は戰鬪全般に關する幾多の動作を圖解して些の遺憾あらしめず就中旅順の如き浦鹽の如き大要塞の組織並に攻擊法を說明網羅するに至りては先人未だ這般の著なし國民軍たる者豈に一本を購はざるべけんや

★發兌元★

博文館

陸軍々醫總監　森歐外君序　田山花袋君著

第二軍從征日記

全一冊洋裝大判　正價金六拾錢　郵稅拾貳錢

第二軍の滿洲に於ける功績は、實に赫々として日月の天地を貫くが如し。南山、得利寺、蓋平、大石橋、遼陽等其の進路の極めて遼遠たりしにも拘らず、其戰捷の活潑なる實に端睨すべからざるものありて存す。著者博文館從軍記者寫眞斑の一員として、宇品より其軍と共に乘船し嘗むべきの困難は共に嘗め、耐ゆべきの辛楚は共に耐へ、かくして、漸くに身を寓するを得たるは、天地間最壯美の大活劇。況んや著者はこの大活劇を觀るに一種の特色ある眼光を以てし、戰鬪を記し、砲烟を記し、殺戮を記するに於ても尋常紀文家の如く、乾燥殺伐なる文字を用ゐず、多樣にして多趣、恰も一篇の叙事詩を繙くの概あるに於てをや。

海軍主計中監　窪田重弌君著

日露戰役紀念　彈片

全一冊洋裝三六判　正價參拾五錢　郵稅六錢

窪田中監、身軍籍に在つて而も文藻に富む先に日進艦主計長として、砲烟彈雨の間に往來するや、公務の餘暇、筆を呵して戰況を記するもの、細大漏らさず、縱橫自在、尋常從軍記者輩の到底學び難き所。若し夫れ卷尾に附せる小說脚本、短編に至つては、悉く事實を材とし經歷を資とせるもの、又以て白面文士の遠く及ばざる所とす。嗚呼此の彈片一部啻に空前の大戰爭より生まれたる未曾有の好紀念たるのみならず、眞個戰爭文學中の萃の萃たるものならずして何ぞ。

陸軍少將　東條英教君題辭

陸軍少將　宍道省三君校閱

杉本文太郎君著

陸軍解說

全一冊洋裝大判　正價參拾錢　郵稅六錢

我帝國が強敵露西亞に對して干戈を執りしより連戰連捷歷史上殆んど他に類例なき偉功を修め遂に平和の曙光を見んとするに至らしめたる陸海軍は抑も如何に組織せらるゝかは一般に知悉せざるべからざるのみならず而も將來身を軍人に起さんと欲する者は一層の精通を要するは素より謂ふを待たず、本書收むる所の要目は、陸軍編制、軍隊、官衙、陸軍現役定限年齡、將校の分限、徵兵、服役、進級、補充、教育、檢閱、召集戒嚴及要塞地帶法、賞罰、陸軍々隊符號等を始め特に文部大臣に於て中學校同等以上と認められたる全國の諸學校名に亘りて巨細漏らさず周到着實極めて平易懇篤に說述したり請ふ一本を購ふて其誣言ならざるを知り賜へ。

矢吹中將題辭　宍道少佐校閱

杉本文太郎君著

陸軍諸兵種解說

全一冊洋裝大判正價卅五錢郵稅八錢

服役三ヶ年間に於ける步兵、騎兵、砲兵、工兵、輜重兵は將た何をか爲すものぞ本書は啻に是等の諸兵種のみならず砲兵輸卒、同助卒、輜重卒に亘りて其服役期限內に敎育せらるゝ最新の實科並に學科を網羅し文章平易而も側訓を附し筆及ばざる所一々圖畫を挿みて細大漏さず確實懇切を極む故に身兵役に關係ある者本書を熟讀せば入營後如何に苦痛を免るべきかは謂ふ迄もなく既に入營せし者も本書に據らば其進步發達の迅速なるを自得すると共に彼の歸休兵たるの先榮を得んと實に易々たるのみ我一般國民たる者亦豈一讀の要なしとせんや

東鄕海軍大將題辭

河原海軍少將序文

杉本文太郎君著

海軍解說

全一冊洋裝大判　正價參拾錢　郵稅六錢

本書收むる處、海軍編制、海軍々人の階級及職務、服役、進級服、其他軍艦職員の勤務一般操縱、海軍檢閱、公室及私室、海軍禮砲、海軍旗旒を始め、艦種の特質、海軍砲、攻擊、及防禦、水雷戰鬪準備、海軍の任務等に涉りて細大漏さず、就中海岸の防禦並に海岸要塞の攻守等を掲ぐるを見ては如何に他と其趣を異にやるを知らん、殊に著者海陸軍の編纂事業に從ふこと殆んど十年其道に明かなるを以ても尚ほ之を一々當路者に訂せり、苟も海軍に志ある者は勿論海國民たる者豈一本を座右に備へざるを得んや

陸軍步兵中佐　岡野敏彰君校閱

陸軍步兵大尉　小山永行君著述

陸軍々隊案內

全一冊洋袖珍三百四十頁　正價金參拾錢　郵稅四錢

▲石版美麗刷＝帝國々旗勳章新圖

▲寫眞版＝兵營教練實地演習圖　各科生活

博文館編輯局編纂

改正

徵兵規則大全

全一冊洋裝袖珍五百頁　正價參拾五錢　郵稅六錢

滿洲軍總司令部と五大將

THE HEAD QUARTER STAFF OF THE MANCHURIAN ARMIES AND FIVE GENERALS

奥第二軍司令官　兒玉總參謀長　大山總司令官　黒木第一軍司令官　野津第四軍司令官



滿洲軍總司令部に於ける大山大將



The upper reading from the right: General Nozu, Commander of the 4th Army; General Kurogi Commander of the 1st Army; Marshal Oyama, Commander-in-chief of the Manchurian Armies. General Kodama, chief of the staff of the Manchurian Armies; General Oku, Commander of the 2nd Army: the lower picture contains Marshal Oyama and his staff.

第一軍寫眞

皇軍靉河を渉る

THE FIRST ARMY CROSSING OVER THE AI-HO.

砲兵靉河を渉つて追撃す



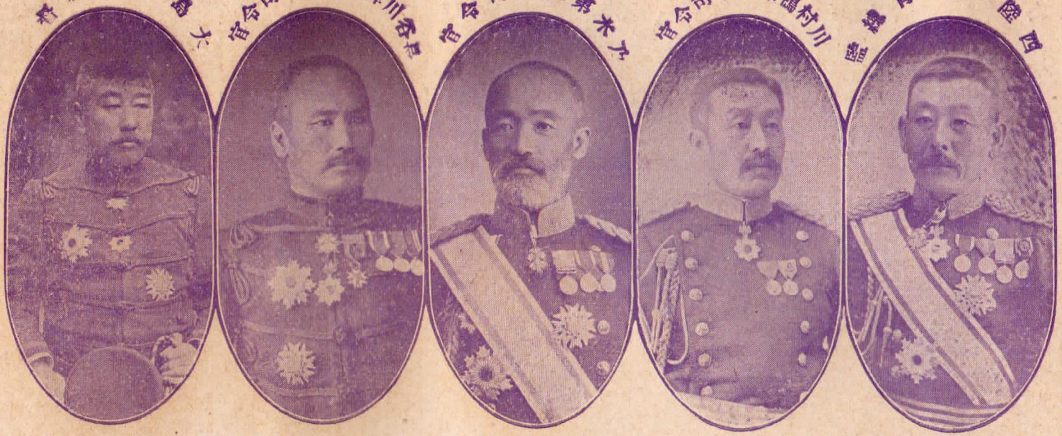
第一軍司令部靉河を渉る



In the upper the artillery corps of the Army crosses over the river: in the lower the Cavalry men are the scout of our Army.

占領當日の奉天と五大將

MUKDEN AND FIVE GENERALS.



占領當日の奉天の盛觀



The upper reading from the right: General Oshima, Governor-General of Kwantung; General Hasegawa, Commander-in-chief of the Garrison in Korea; General Nogi, Commander of the 3rd Army; General Kawamura, Commander of the Yalu Army; General Nishi, Inspector-General of the Instruction of the Army: the lower is the view of Mukden on the day at which the city fell into the hands of our army.

第一軍寫眞

戰闘中電話を以て命令を發す

THE ORDERS DESPATCHED BY MEANS OF TELEPHONE.

我軍昌圖に入る



花勾嶺中腹にて黒木軍司令部電話を以て命令を各隊に通す



The upper shows our army enter Chang-Tu; the lower shows the staff-officers of Kuroyi Army despatch orders by means of telephone.

第一軍寫眞

花勾嶺の久邇宮殿下と黒木大將

H. I. H. PRINCE KUNI AND GENERAL BARON KUROGI AT HUAKOU-LING.

花勾嶺中腹黒木軍展望所



久邇宮殿下　黒木大將　侯爵西鄕大尉



The upper shows the staff officers of the First Army viewing the battle from the side of the mountain; in the lower the central is General Kurogi his right is Captain Marquis Saigo and his left is H. I. H. Prince Kuni.

第一軍寫眞

黑木軍の太子河渡渉

KUROGI ARMY AT THE TAITZU-HO.

凱旋前奉天に於ける滿洲軍總司令部



上圖中央此方向きに立てるは黑木大將。卷煙草を燻し居るは澁谷少將なり。

今や一隊は軍歌を奏しつゝ太子河を渡りつゝあり



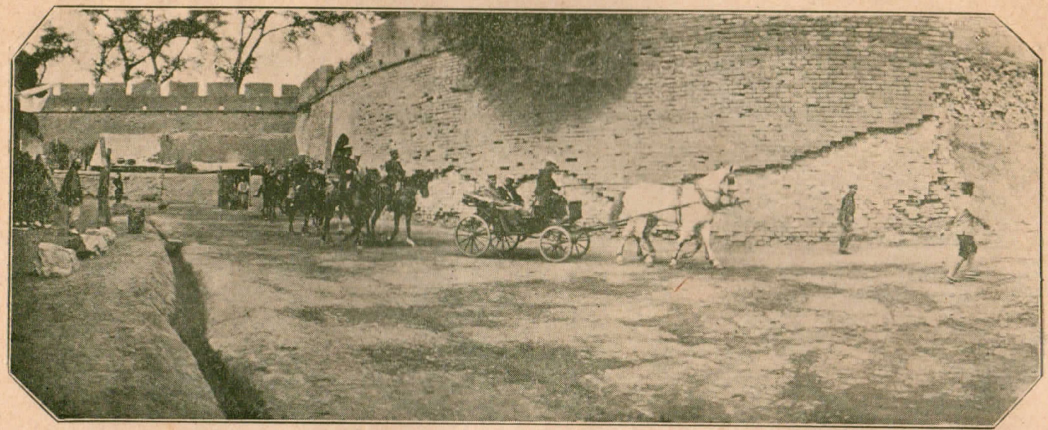
The upper shows the Head Quarter of the Manchurian Armies with General Kurogi, Commander of the First Army: the lower is the view of our soldiers crossing over the river.

第一軍寫眞

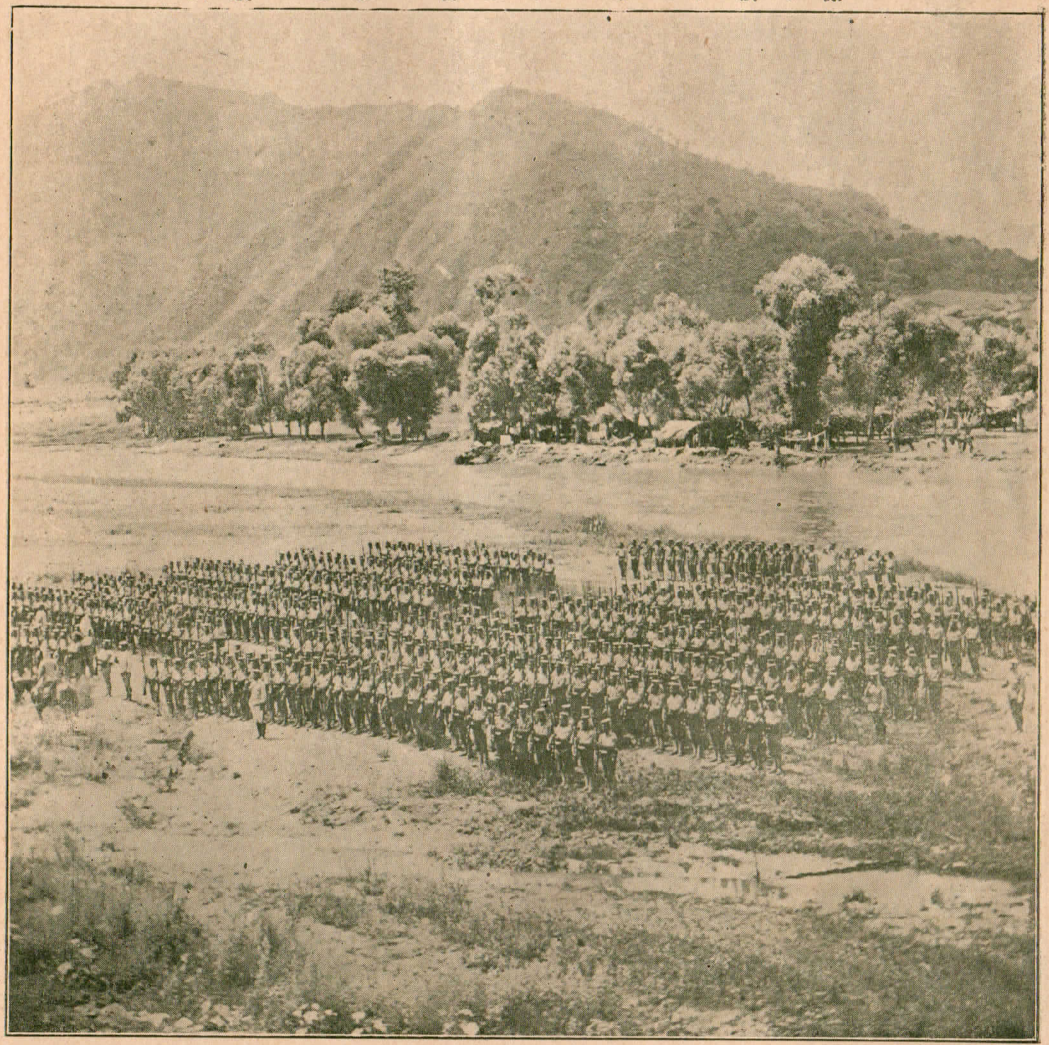
戰地に於ける勅語奉讀式

THE READING OF THE IMPERIAL ADDRESS.

大山元帥馬車に乗じて戰地を巡視す



樣子嶺にて第一軍某隊の勅語奉讀式



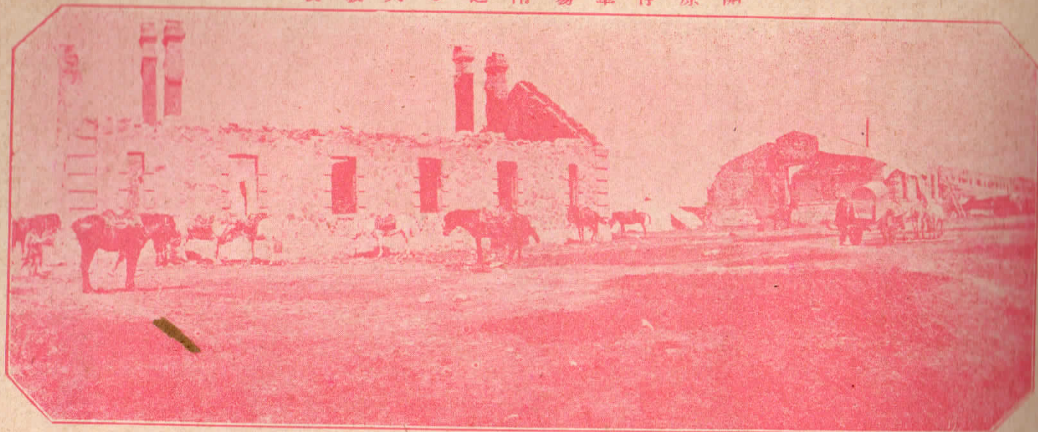
The upper shows Marshal Oyama inspect the lines in his carriage: the lower the ceremony reading the .mperial Address at a corps of the 1st. Army.

第二軍寫眞

首山堡砲撃

THE CANNONADE AT SHOUSHAN-PAO.

開原停車場附近の大破壊



砲撃數刻にして此方面の敵潰走す



The upper is the picture of Kaiyuan station destroyed by our fire: the lower shows the enemy flying before our fire.

第二軍寫眞

沙河渡渉と砲兵進軍

OUR ARMY CROSSING OVER THE SHA-HO.

支那人夫を雇ふて沙河を渉らしなむ.



奥軍砲兵十三臺に向ひ進軍途中の困難



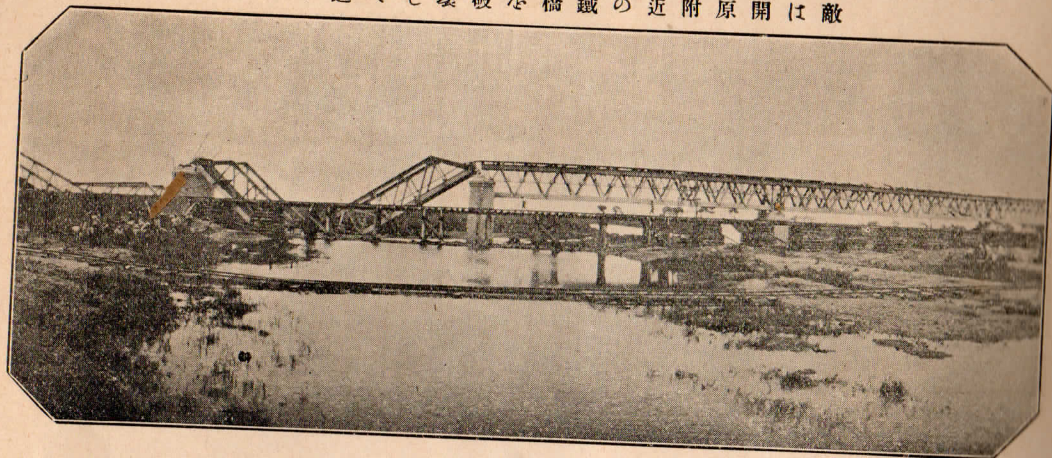
The upper shows Chinese coolies employed by our Army crossing over the river: the lower is the march of the artillery corps of 2nd. Army toward Shihsan-Tai.

第二軍寫眞

鐵橋破壞と迂廻進軍

THE DESTRUCTION OF IRON-BRIDGE AND THE TURNING MOVEMENT OF OUR ARMY.

敵は開原附近の鐵橋を破壞して逃げたり



第二軍左翼隊迂廻して敵の側面に向ふ



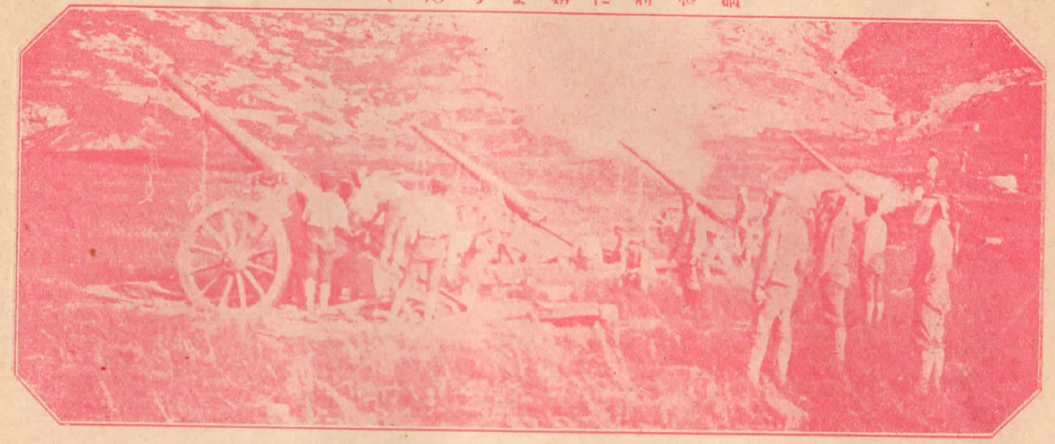
The upper is an iron-bridge near Kai-yuan Station destructed by the flying enemy: the lower shows the left wing of the Second Army marching toward the enemy's flank.

第二軍寫眞

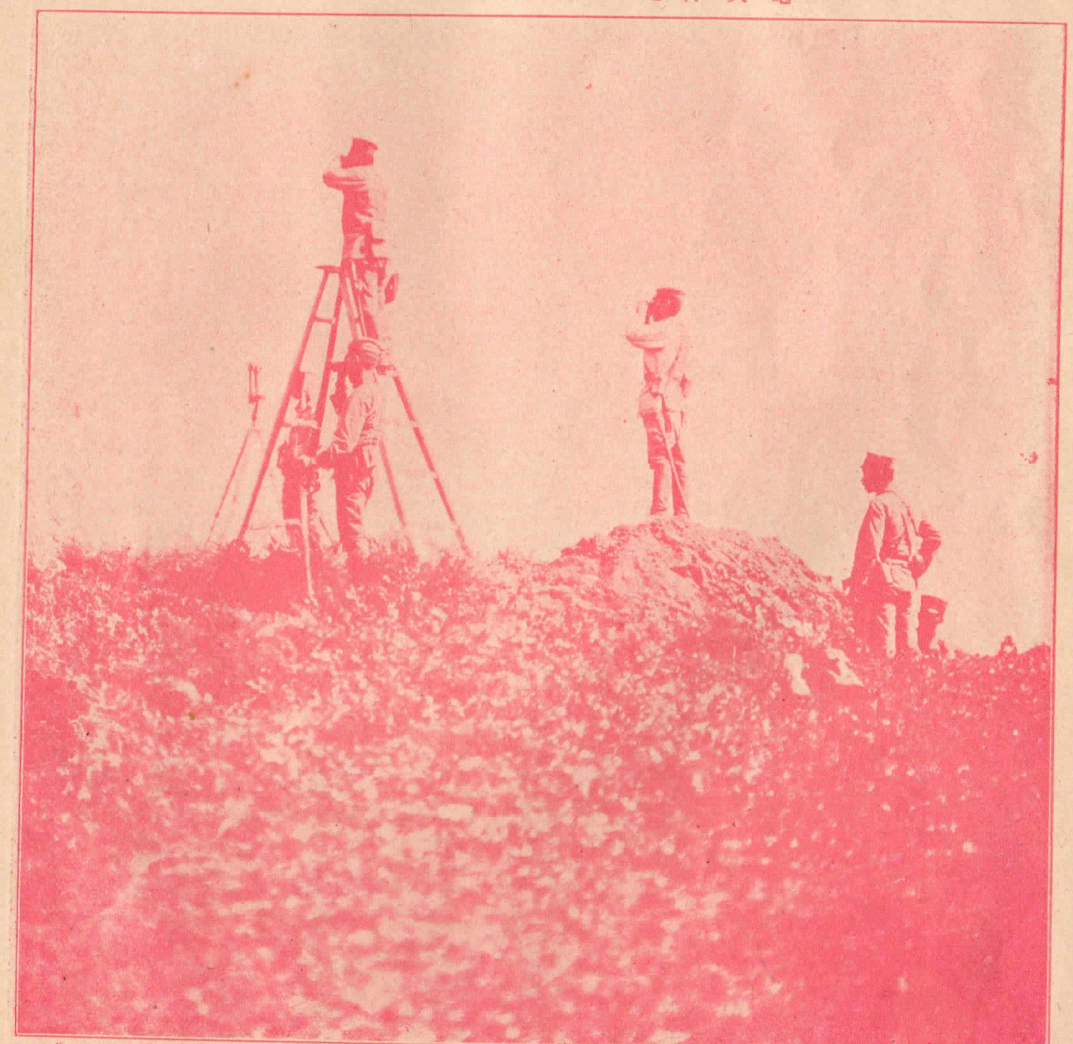
沙河戰に於ける砲撃と觀測

THE CANNONADE IN SHA-HO.

砲戰將に始まらんとす



砲兵陣地に於ける敵軍觀測



The upper shows our battery at the beginning of the battle: the lower the artillery men surveying the enemy.

第三軍寫眞

二百三高地の觀測

THE 203 METRE HIGH GROUND.

大山元帥旅順砲臺の巡觀に來る



敵側より見たる二百三高地にして遙かなる一帶の山脈は老鐵山也



The upper shows Marshal Oyama inspecting several battery of Port Arthur: the lower is the view of the famous 203 metre high ground.

第二軍寫眞

鐵條網と戰死者葬儀

THE WIRE ENTANGLEMENT AND THE FUNERAL OF THE KILLED.

一隊涙を飲んで桂中尉を葬らんとす



大石橋激戰當時太平嶺の鐵條網

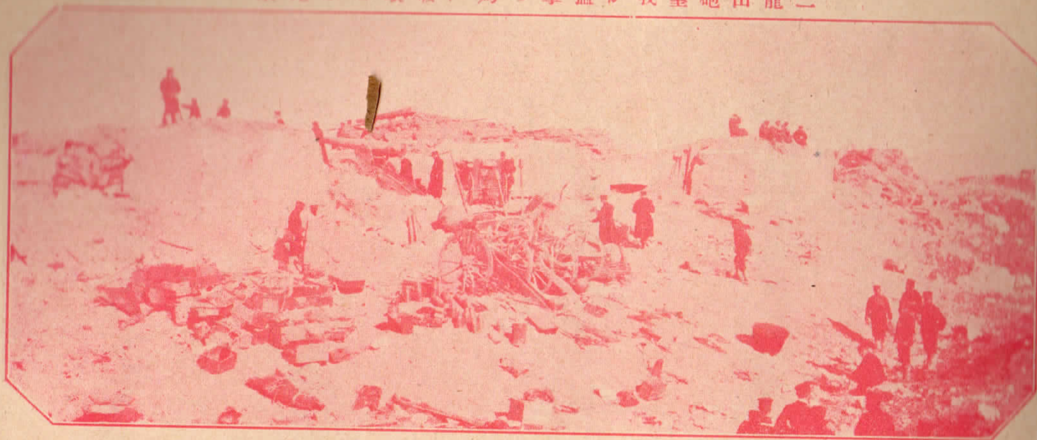


The upper is the view of the ceremony of burying Captain Katsura of the 2nd. Army: the lower the wire entanglenent at Taiping-Ling.

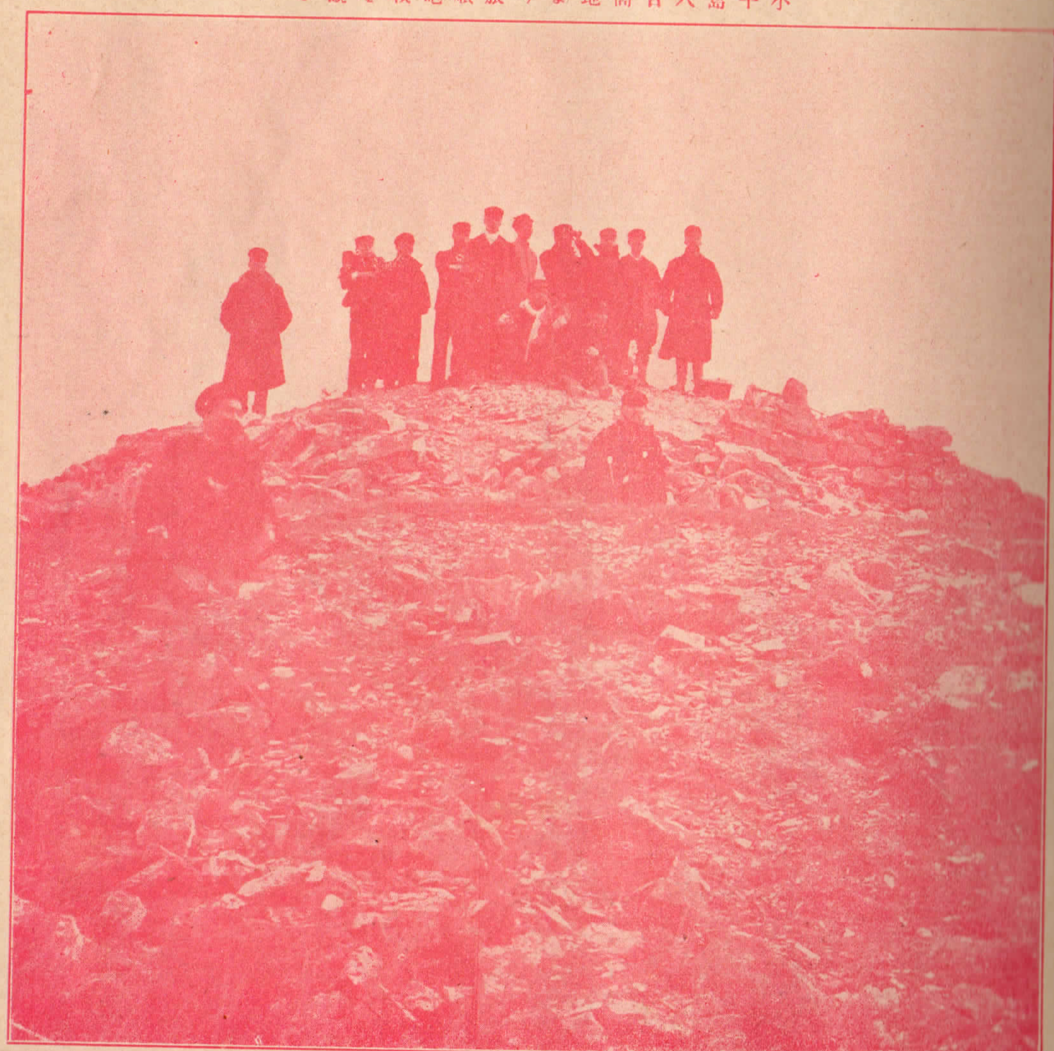
破壞砲臺と旅順觀戰

THE DESTROYED BATTERY AND THE VIEWING OF THE BATTLE SCENE.

二龍山砲臺我が猛擊の爲に破壞せる光景



小平島八百高地より旅順砲戰を觀る



The upper is the view of Erhlung-Shan battery destroyed by the fire of our artillerymen; the lower shows Japanese non-combattants viewing the battle scene from the top of Hsiaoping-Shan.

大山元帥旅順砲臺を巡視す

MARSHAL OYAMA INSPECTING THE FORTRESS OF PORT ARTHUR.

元帥第三軍將士の戰話を聽く



元帥巡視を終つて歸る



元帥[illegible]を杖いて市街を見る



二百三高地の土室と敵砲車の破壞

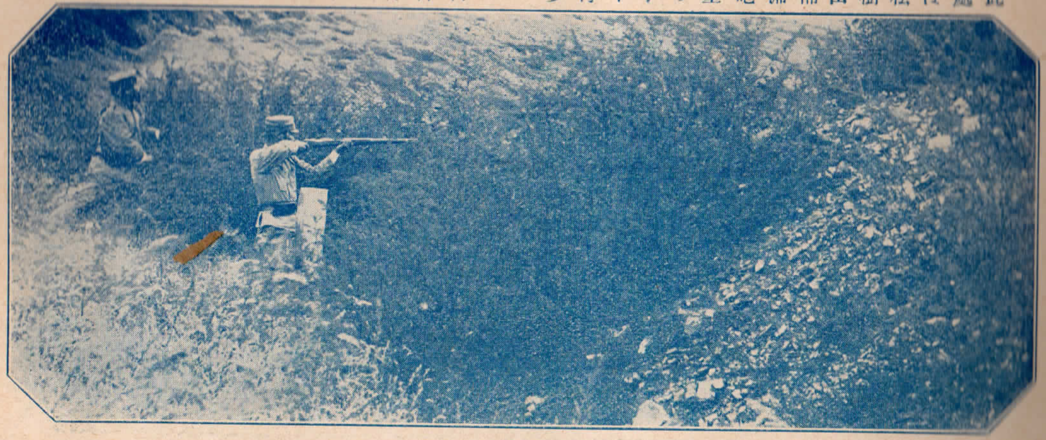


In the upp r the central shows Mar hal Oyama rcturnn'ng from his inspect'on, the left shows the Marshal viewing the city and the right presents the scene in which he listens to the talk of the Third Army officers: the lower is the view of 203 metre high ground.

白襷隊突貫の古戰塲

THE REMINISCENSE OF THE DESPERATE BATTLE AT PORT ARTHUR.

此處は松樹山補備砲臺の下中付少ゝが白襷隊を率ゐて突貫せし所也



占領後我兵二龍山堡壘の入口を守る



The upper presents the place situated at the foot of Sungshu-Shan battery where a body of soldiers girded up by white cords penetrated into the enemy's position under the command of Major-General Nakamura: the lower is the view of Erhlung battery occupied by our soldiers.

水雷を地雷に代用す

THE RUSSIANS USING TORPEDO IN PLACE OF FOUGASSE.

牛拉子山東方高地にて鐵條網を爆發破壞す

敵は布設水雷及び魚形水雷を地雷に代用して地下に埋めたるを我兵頻りに發掘爆發。



我兵發掘せる布設水雷を將に爆發せんとす

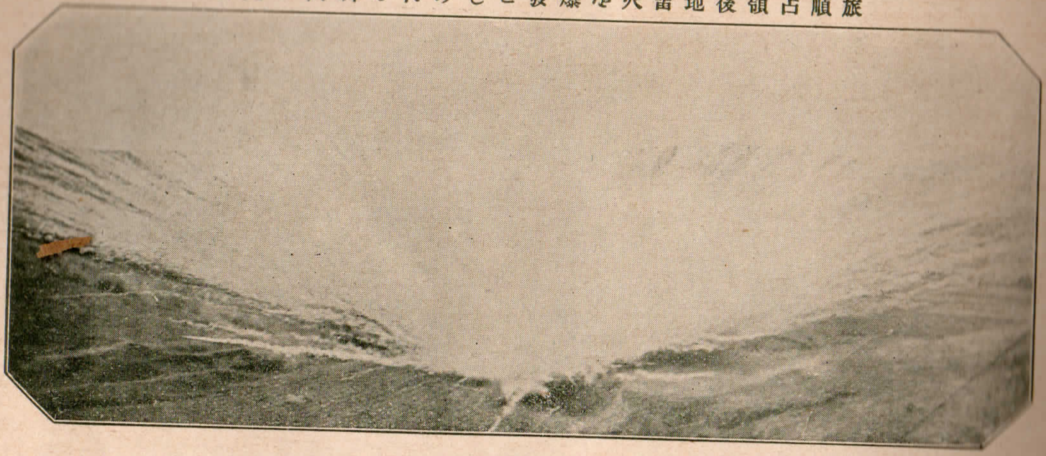


The upper shows our soldiers destroying the wire entanglement at a high ground at Port Arthur Fortress: the lower is the picture of torpedo and mine found by our soldiers.

地雷火爆發と水師營會見所

THE BURSTING OF FOUGASSE AND THE VIEW OF SHUISHIHYING.

旅順占領後地雷火を爆發せしめたる瞬間の光景



中央の騎馬將軍は談判委員長伊地知少將なり



下圖は開城談判を爲せし水師營會見所にして、此庭中はステッセルが馬を乘廻して乃木大將に示せし處なり。

Several fougasse at Port Arthur Fortress was burst by our Army after the capitulation. The upper shows one occasion. The lower is the view of a cottage at ShuishihYing where the reprensentatives of both the belligerent armies met together is negotiate the terms of the capitulation.

第三軍寫眞

地雷搜索隊と敵砲挫折

A BODY OF TROOPS DESPATCHED TO SERCH EARTH FOUGASSES.

是れ地雷搜索隊の勇士にて二龍山占領の時殊功ありし



松樹山砲臺爆發して敵砲挫折の慘狀



The upper shows the gallant soldiers commissioned to achieve this dangerous act at Port Arthur; the lower shows the destroyed cannon found at Sungshu-Shan battery.

第四軍寫眞

野津軍の陣地偵察

OUR SOLDIERS RECONNOITERING THE ENEMY'S POSITION.

向つて右より二に黒木大將三に野津大將あり



上圖は凱旋前奉天に於ける滿洲軍總司令部なり。

第四軍の勇士頻りに敵軍の陣地を偵察す



The upper presents the Head quarters of the Manchurian Armies at Mukden ; the lower the soldiers of the Fourth Army reconnoitering the enemy's position.

第三軍寫眞

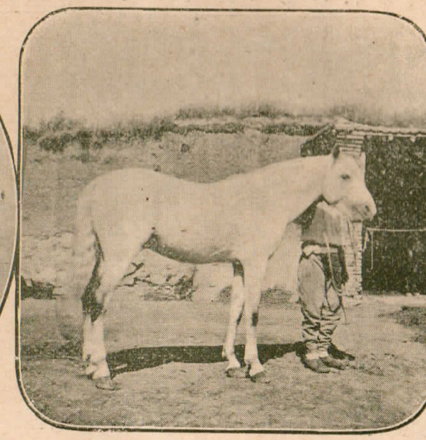
旅順開城の紀念

THE SOUVENIRS OF THE CAPITULATION OF PORT ARTHUR.

玉山の敵巨砲陣地遠望



スッテセルより乃木將に贈りし名馬



東雞冠山砲臺の穹窖内部



旅順開城談判後乃木大將スッテセル其他と撮影



In the upper the central is the picture of the horse which General Stossel gave to General Nogi, the right is the distant view of the enemy's position at Poyu-Shan, the left is the inside of the under ground gallery of Tung-Chikuan-Shan battery ; the lower shows General Nogi and General

鴨綠江軍寫眞

追擊砲試驗と川村大將

THE EXPERIMENT OF CANNONADE AT THE YALU ARMY.

中村工兵大佐立合にて今追擊砲の試驗を爲しつゝあり



下圖は鴨綠江軍の招魂祭宴會場に於ける三將軍なり。

坂井中將　川村大將　鮫島中將



The upper shows Colonel Nakamura of the engineering corps testing guns with a view to the pursuit of the enemy: in the lower the central is General Kawamura, Commander of the Army.

第四軍寫眞

斥候の活動と砲兵の發射

THE ACTIVITY OF SCOUTS AND THE FIRING OF CANNONS.

野津軍參謀の陣地偵察



斥候步兵の活動



進軍途中砲兵渡河



砲兵照準を定めて將に發射せんとす



In the upper the right shows the staff officers of the Nozu Army view the battle scene, the central the action of our scouts and the left our artillerymen cross over a river: the lower shows our artillerymen about to fire.

北韓軍寫眞

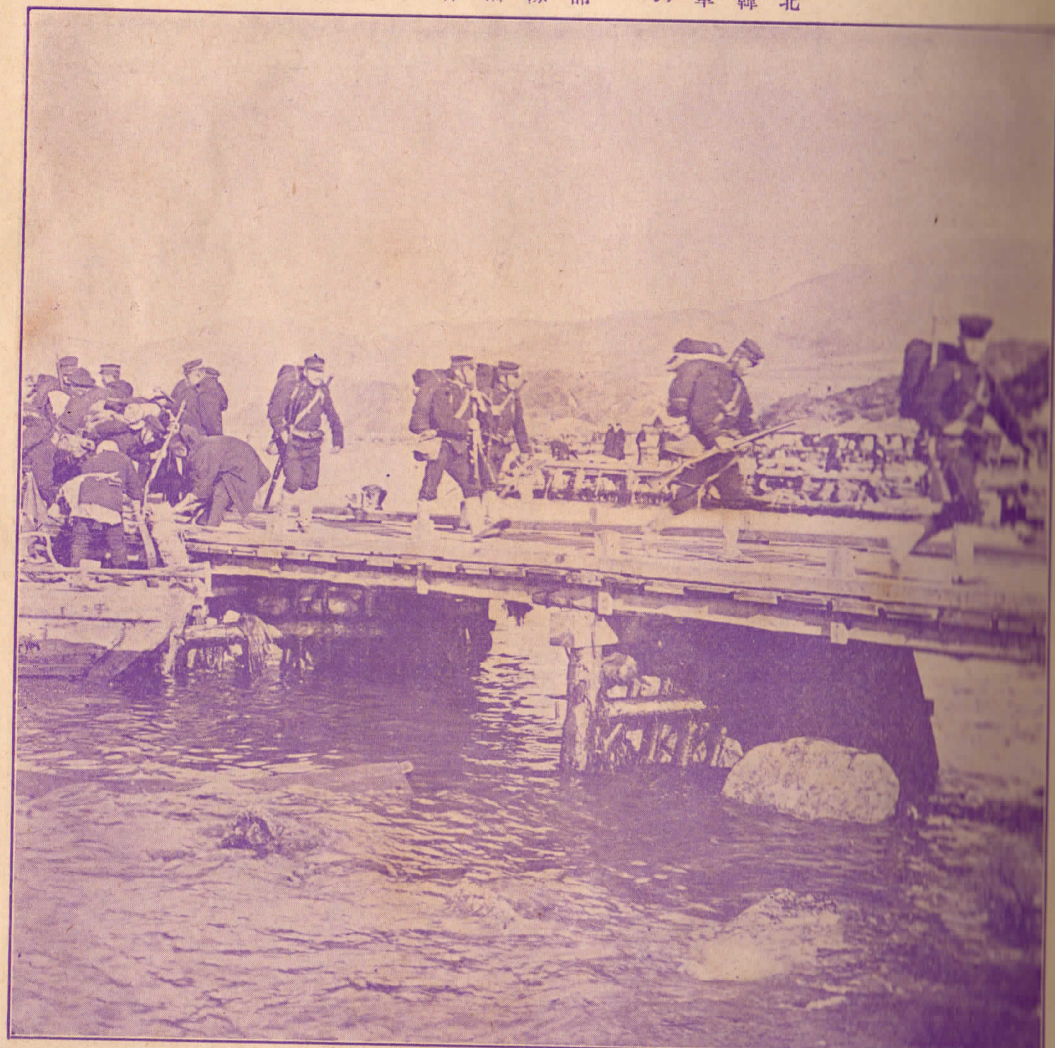
北韓軍の上陸と前進

THE LANDING OF THE NORTH KOREAN ARMY IN KOREA.

北韓軍清津に上陸して前進準備を爲す



北韓軍の一部隊清津に上陸す



The upper shows the landing of the army: the lower the advance of a part of the same army.

鴨綠江軍寫眞

大行李前進と砲兵進軍

THE MARCH OF THE TRANSPORT CORPS AND THE ADVANCE OF THE ARTILLERY IN THE YALU ARMY.

大行李頻りに前進す



砲兵平野を横切つて進軍す



The upper shows the advance of trains: the lower our artillery men marching across a plain.

樺太軍寫眞

樺太海岸砲撃と山中進軍

IN THE KARAFUTO ARMY.

アルコワ海岸へ上陸の際我艦隊の掩護



ヒヨリンスキー山中な補助輸卒隊の進軍



The upper shows Japanese squadron protecting the army during their landing at the coast of Alkowa; the lower the marching of our train corps along a mountainous path.

凱旋寫眞

陣中の閑日月

IN THE NORTH KOREAN ARMY.

韓國花嫁輿に乘つて行列す



浦乙壘鎮城趾



丸井支隊前哨舍營



北韓軍陣中の閑日月



In the upper the central is the view of an ancient castle, the left is the hut of our outposts, in the right a Korean marriage procession; the lower shows the soldiers of the army kill time fishing at a stream.

露探捕縛と支那婦人の信神

THE ARREST OF SPIES AND CHINESE WOMEN.

支那婦人信神の光景なり何を祈り居るにや



露探清人將に銃殺せられんとするに臨み立會の我軍人に告別す



The upper shows Chinese women at the act of worshipping their gods: the lower is the picture of a Chinese arrested by our army, who acted as the spy for the Russian Army.

樺太軍寫眞

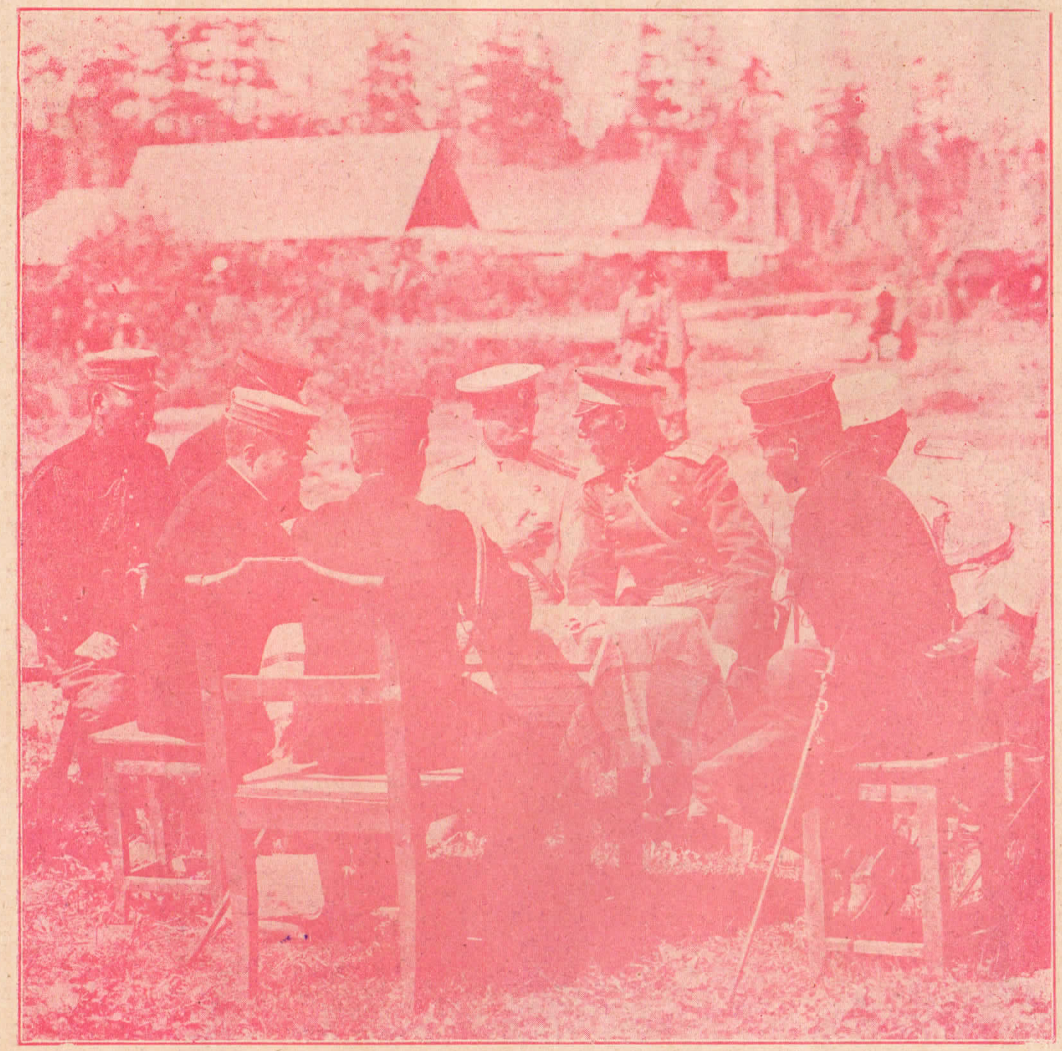
敵軍の降伏使來る

THE SURRENDER OF THE ENEMY AT SAGHALIEN ARMY.

樺太ハムダサにて彼我全權委員の會見



白衣の露將は敵軍の降伏使タラシエンコン大佐なり



The two pictures shows the representatives of both the belligerent armies negotiating the terms of surrender: in the lower the officer who dresses himself in a white uniform is the Russian Colonel, bearer of the flag of truce.

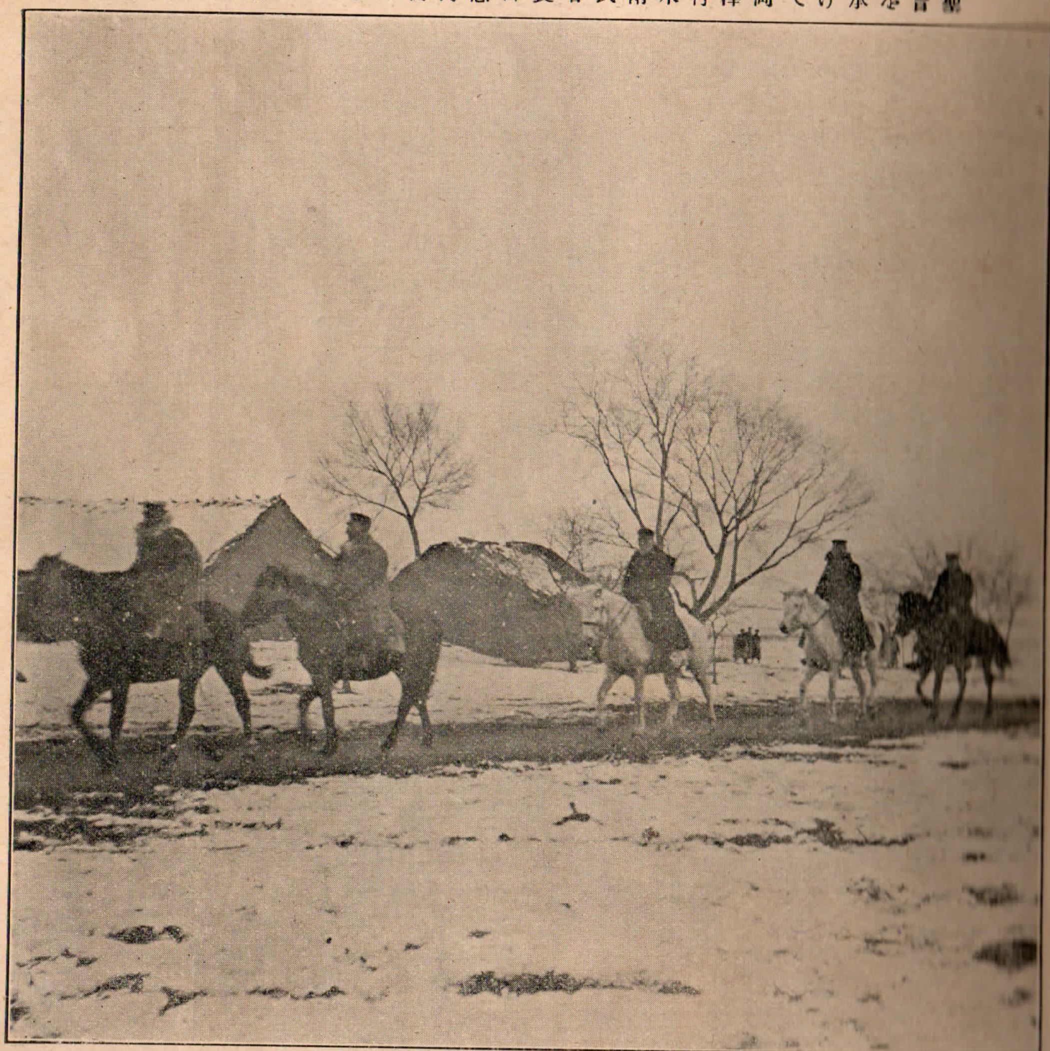
御慰問使戰地に到着

THE ARRIVAL OF THE IMPERIAL MESSENGER TO INQUIRE AFTER THE HEALTH OF THE ARMIES.

大山元帥凱旋の爲將に奉天より乘車せんとす



聖旨を承けて岡澤村木兩武官長御慰問使となつて戰地に到着



The upper shows Marshal Oyama at the act to board the train at Mukden Station for home; the lower shows General Okazawa, Chief aide-de-camp to H. M. the Emperor, the Major-General Muraki, Chief aide-de-camp to H. H. the Crown Prince, going to the front to inquire after the health of soldiers, specially commissioned by His Majesty and His Hi

丹後丸甲板の大山大將

MARSHAL OYAMA ON THE BOARD THE "*Tangomaru.*"

大山大將が悠然と海上を眺め居らるゝ姿を見よ



滿洲軍總司令部諸將の福陵見物



The upper shows the Marshal on the board the "*Tangomaru*" on his way to Manchuria; the lower shows the Head quarter officers of the Manchurian Armies worship at the Imperial Shrine of Mukden.

騎兵追撃と我が戰死者

THE CAVALRYMEN'S PURSUIT AND THE CORPSES OF JAPANESE SOLDIERS.

塔灣占領當時近衛騎兵の追撃



嗚呼作子溝に於ける我が戰死者



The upper shows our cavalrymen pursue the enemy at the time when our army occupied Tawan; the corpses in the lower picture are of those killed at the battle of Tsotzu-Kou.

清國守備兵と露國捕虜

THE CHINESE SOLDIERS AND RUSSIAN PRISONERS.

開原に於ける清國守備兵なり



九連城に於て捕虜せし露國將卒



The upper are the Chinese soldiers of the Kaiyuan-Garrison: the lower the Russian soldiers captured at Chiulien-Cheng.

戰地招魂祭

滑稽踊と陣中演劇

THE COMICAL DANCE AND THE THEATRICALS.

兵士美人に化ける



兵[illegible]の舞踊

滑稽假裝行列

餘興演劇義經辨慶五條の橋



Exhibited on the occasion of the fete held in honour of the killed.

戰地招魂祭

大招魂祭と薩摩踊

THE FETE HELD IN HONOUR OF THE KILLED.

第二軍司令部に於ける宴會後餘興の薩摩踊



瓢起屯に於ける招魂祭



The upper presents the Satsuma dance exhibited at the entertainment of the fete in the Head quarters of the 2nd. Army; the lower is the view of the fete at Piaochi-Tun.

凱旋寫眞

滿洲軍總司令部凱旋

THE TRIUMPHAL RETURN OF THE HEAD QUARTER STAFF OF THE MANCHURIAN ARMIES.



品川の凱旋門



京橋の凱旋門



日本橋の凱旋門

大山總司令官宮城に參內す、



The upper are the triumphal arches built at several part in the City to commemorate the triumphal return of our army; the lower shows the Head quarter staff of the Manchurian Armies proceed to the Imperial Palace.

戰地招魂祭

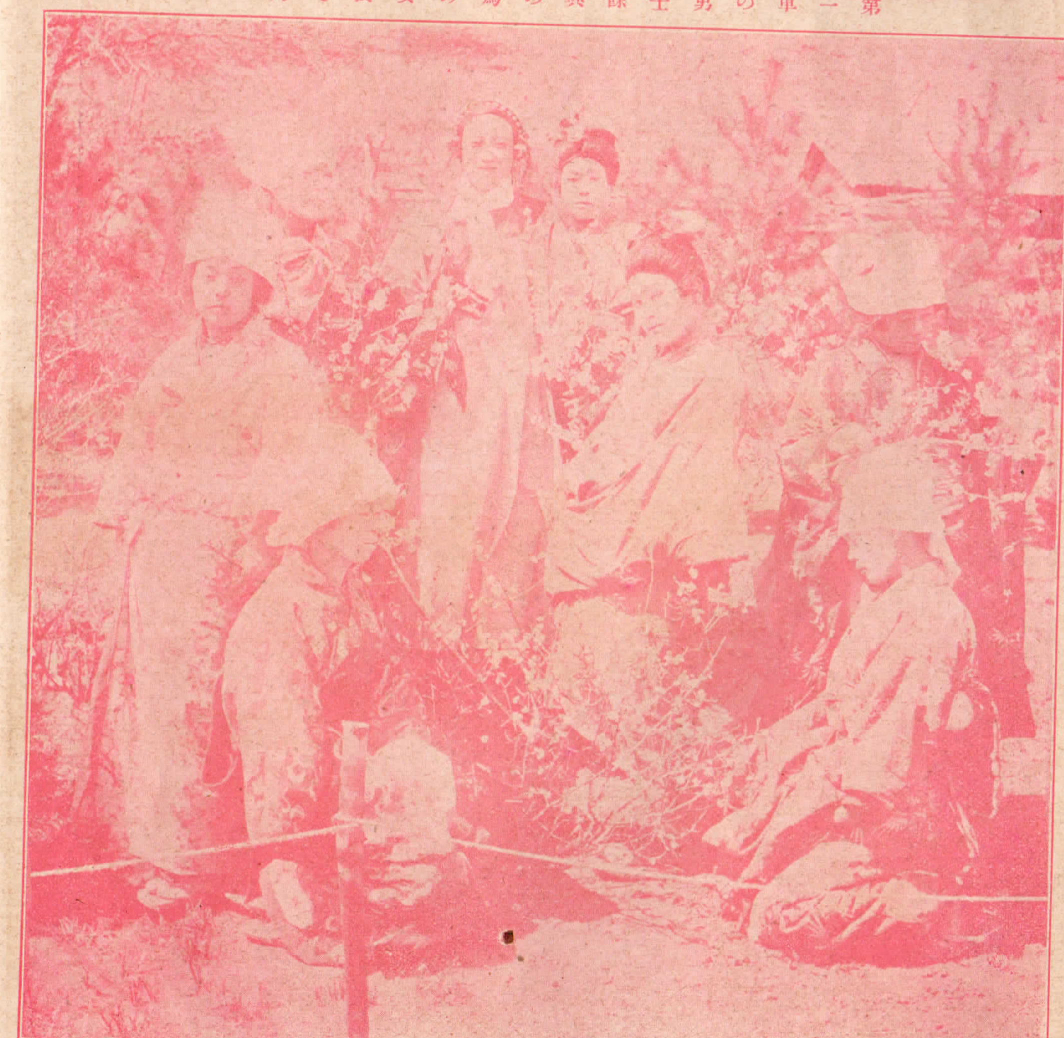
假裝行列と勇士の女裝

THE FETE HELD BY THE FIRST ARMY IN HONOUR OF THE MEMORY OF THE KILLED.

第一軍招魂祭の假裝行列



第一軍の勇士の餘興の爲め女裝を爲す

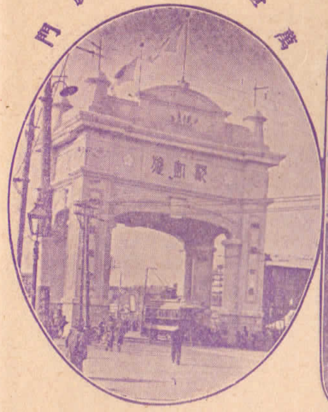


The upper shows the fancy dress procession exhibited as an entertainment of the fete; the lower shows the soldiers dressed themselves in the women's costumes.

凱旋軍隊と凱旋門

THE TRIUMPHAL ARMY AND TRIUMPHAL ARCHES.

萬世橋の凱旋門



上野公園の凱旋門



淺草雷門の凱旋門



凱旋軍隊參謀本部內大本營事務所に入る



The upper are the triumphal arches: the lower shows the returned troops enter the General Staff Office.

本邦地理詳說

女子高等師範學校教授 日本大學講師 野口保興君校閱並序

中村士德君 大久保千濤君 共著

▲着色地圖寫眞版數葉○精巧緻密木版二百四十餘個入▼

（五月上旬發行）

全一冊 洋裝菊判 紙數約七百頁 總クロース金文字入

發兌元 東京日本橋區本町 博文館

本邦地理書の上梓せらるゝ者汗牛充棟も啻々ならず然れども是れ多くは中等程度に用ひらるゝ教科書の類なるか又偶々參考に供すべきの書あるも未だ全きものあるを聞かず實に斯界の爲め遺憾とする處、玆に本館中村士德、大久保千濤兩君に囑するに此缺陷を補はれんことを以てす兩君快諾、執筆せらるゝ年餘稿成るに及んで今や本邦地理學界の泰斗野口保興先生又此擧あるを賛し懇篤なる修正を試みらる其責任を重ぜらるゝと現はれて其序中にあり曰く『之を一讀するに本邦地理詳說にして材料の豐富配列の秩序眞に其名に背かす方今社會の進步に伴ひ學界從て發達し著者の數日を逐ふて其多きを加へ就中地理書の如き決して少なしとせずされど或は繁に偏して冗漫に流れ然らずんば簡に失して明晰を缺くの嫌あるを免れず今本書を閱するに繁簡其宜しきを得且つ加ふるに斬新の材料に基き吾人生活上必須の點を摘載し以て日進月步の大勢に後れざらん事を期したるは余の最も歡迎して止まざる所なり』と以て內容の如何を知るべし。本書は普通教育の參考用たるは勿論中學教員の受驗用斯學獨習の讀物として必讀の良師友たるなり。請ふ其眞價は一讀の後に徵せられんことを。

近刊書類

文學訓

太陽記者 長谷川天溪君新著

全一冊袖珍美本 紙數三百六十頁 正價參拾錢外要郵稅

近刊

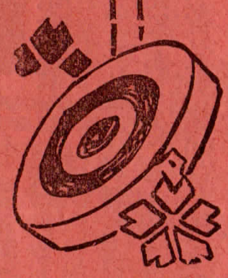
文學の眞義を究め、清新の文章を作らんと欲する諸子試みに本書を繙け。似而非文學の雲霧を拂ひ、如何にせば眞正なる文學の光彩を發揮し得べきかを簡潔明瞭に說述す。これ純正文學の說明也。文學者の心理的解剖也。而して文學鑑評の標準也。

發兌元 東京市 博文館



弓術新書

田邊太一君述 内山勗君編



全一冊 菊判美本 紙數約百五十頁 寫眞銅版及木版數個挿入 正價貳拾八錢 外要郵稅

田邊先生は斯道の達人なり、尚武の遊技を普及し體育法の一助たらしめん爲め本書を内外の兩篇に分ち、内篇は專ら現今の步射を詳說し、外篇は其因て來る所の根元を知らしむ、行文精熟讀者をして得難きの資料を領せしめたり、請ふ體育を重ずるの士は必ず一本を購求あれ

文學博士 高山林次郎君遺稿

文學博士姉崎正治君 文學士齋藤信策君共輯

樗牛全集第五卷 想華及消息

△口繪――樗牛先生墳墓の圖及樗牛先生原稿筆蹟(寫眞銅版)挿入

全一册洋裝 金縁金模樣 紙數六百六拾頁 正價壹圓五拾錢 小包送拾五錢

樗牛一代の論評及び研究の外、別に一天地を成せるもの是れ彼れが創作の想華と消息文となり樗牛の天眞を發輝するもの却て彼に非らずして此にあるもの又た多からん今や最終の卷に至つて此最も趣味多豐なる消息數百餘通を收めたり全集を讀了し來つて讀者又た此別乾坤を見る豈妙ならずや

▼既刊發賣▲

發兌元 東京日本橋區本町 博文館

本書要項

◉瀧口入道(歷史小說)

◉感想=吾妹の墓▲戀情論▲故鄕論▲雪中梅▲今樣三首(敦盛、忠度、小督)▲淮亭郎の悲哀▲傷心錄▲わがそでの記▲厚積薄發▲冷鐵のひゞき▲送年の辭▲秋色▲歲暮▲思ひ出の記外八項

◉雜篇=鳥海山紀行▲序詞▲夏季の學生▲海の文藝▲清見潟日記▲鎌倉の話▲鄕里の弟を戒むる書▲猶多放言▲人と愛情▲疑問

◉消息=仙臺より國元實父へ▲病院より姉崎博士へ▲大磯より笹川臨風氏へ▲鎌倉より井上博士へ▲大磯より登張竹風へ▲其他消息百餘通

◉外篇=倫理教科書(社會總論、皇室に對する本務)▲世界文明史(文明史とは何ぞや、羅馬帝國と基督教)▲論理學▲近世美學

樗牛全集第一卷 美學及美術史 全

第一部美學上の研究

第二部日本美術史

●總論●奈良朝以前の美術●天平時代●平安時代

樗牛全集第二卷 文藝及史傳 上編

本編收むる所の主なるものは樗林子評論、運命と悲劇歷史的精神、桐一葉と牧の方、社會小說論、英雄論、理想的人物の表現、文明批評家としての文學者其他

樗牛全集第三卷 文藝及史傳 下編

▲釋迦▲平相國、平家雜感、▲清盛骨相考▲菅公傳、菅公年表、▲史傳雜纂、南歐美術論、ナポレオン三世外八項▲文藝評論補遺三十一種

樗牛全集第四卷 時勢及思索 全

▲第一期(論理問題研究の時代)▲第二期(國家主義の時代)歷史と人種外八拾餘目▲第三期(信仰覺醒の時代)雜篇(學說と人格、人々自ら悟らざるべからず外五十餘目

●正價各卷壹圓五拾錢宛●小包送料 壹卷參卷各拾五錢貳卷四卷各廿錢宛

高山文學 ●時代管見 全一册紙皮上綴 小判五二〇頁 正價參拾錢 郵稅六錢

●世界文明史 全一册洋裝 大判三七六頁 特製定價五拾五錢 郵稅拾錢

博士遺著 ●文藝評論 全一册紙皮上綴 小判[illegible]頁 正價參拾錢 郵稅六錢

●近世美學 全一册洋裝 大判[illegible]頁 並製正價四拾錢 郵稅八錢

女學世界[illegible] 糸左近君著

四季應用 通俗治療法 附養生秘訣

全一册洋裝 四六判美本 紙數四百餘頁

醫者は病人に取つて命の親なり、救ひの神なり。其の病魔を退治して起死回生の効を奏し、垂死の病人を回復して三千世界に一つしかなき玉の緒を取り止むるに至つては佛、菩薩の功德よりも大なるものあり、世に神醫仁術の稱ある所以なるべし、さりながら、世間に神醫と稱するものは雨夜の星よりも尠くして難病危病に惱む人は恒河の砂よりも多し、この限りなき病人患者をして限りある神醫の方劑を仰がしめんこと、無理の注文といふべし、況んや山間僻地に到つては一度の診察を請ひ、一服の藥を飲むすら容易の事にあらず、病人は手を空ふして病魔の橫行するに任すのみ、是に於てか世に醫道の智識を必要とする所以なり著者糸左近氏は仁術に造詣深く、諸病の蘊奧を究めて洩らすなし、今其尤も普通なるもの七十餘種を網羅して備さに治療の方針を說く、蓋し車輿を要せずして千里の遠きに趣き謝儀を求めずして萬病の適藥を授く其の功德の大なる昔への耆婆、扁鵲にも讓らずといふべし。

目次

▲第一 消食器病 (一)口內炎(二)鵞口瘡(三)食傷(四)中毒性胃炎(五)急性胃加答兒(六)慢性胃加答兒(七)俗に胃病(消化不良)(八)胃痛(癪)(九)消化不良(一〇)胃擴張(一一)胃出血(一二)胃癌(一三)胃潰張(一四)腸加答兒(一五)便秘(一六)縧蟲

▲第二 呼吸器病 (一)感冒(二)インフルエンザ(流行感冒)(三)百日咳(四)咽頭閉塞(五)肋膜炎(六)胸水(七)格魯布(實布的里の條に述ぶ)

▲第三 泌尿生殖器病 (一)遺尿(二)生殖器閉塞(三)陰門瘙痒(四)子宮內膜炎(五)子宮實質炎(六)子宮轉位(七)子宮脫出(八)卵巢囊腫(九)姙婦嘔吐(一〇)難産(一一)分娩失神(一二)産褥熱(一三)乳汁分泌欠乏症(一四)産婦攝生法

▲第四 神經系病 (一)歇私的里(二)精神病(三)アルコール中毒(四)脚氣

▲第五 傳染病 (一)僂摩質斯(二)癜風(三)黑痣(四)面皰(五)雀斑及び母斑(六)無毛症(七)白髮症附赤毛及び縮毛(八)皹裂(九)凍傷(一〇)火傷(一一)耳漏

▲第七 花柳病 (一)痳疾(二)軟下疳(三)梅毒

東京 博文館 本町

[illegible]

醫學新書 人體解剖學

洋裝大判佾皮總クロース上製美本▲每編精巧解剖密圖數多挿入

全三册

上卷=正價參圓 郵稅拾五錢 既成

中卷=正價參圓 郵稅拾五錢 既成

下卷=近日發行

我國人體解剖學を講ずるの書二三先輩の著あるも概ね十數年前の刊行に係るを以て現時の趨勢に應ずる能はざるは刀圭社會の遺憾とする所なり編者玆に見る所ありて本書を公にす而して本書は主としてゲーゲンバウル氏の分類に從ひ分ちて八編となし第一編人體形素發育及び組織第二編骨格系第三編筋系統軀幹筋及四肢筋(以上、上卷)第四編腸管系及び呼吸器第五編泌尿生殖輸尿管系第六編脈管系(以上、中卷)第七編神經系統第八編外皮系統とせり而して學名術語は必ず羅甸若くは獨語を併記し主として新名稱に據れり且つ精密要圖は殆ど每節に挿入せり

發兌元 東京本町 博文館

文學士 久保天隨君著

日本歴史寶鑑

◉五月上旬發行◉

全一冊

菊判洋裝上製
製本堅牢
紙數約千餘頁

著者の博洽該實、殊に史學に精通し、獨創の所見に富むこと、世皆すでに之を知る。本書は、主として日本歴史の參考に供せむが爲に、縝密なる注意を以て纂述せしものにして、はじめに綱目を擧げ、次に個條的に之を細述し、鉅細悉く羅し、幽顯すべて捜り、筆を太古に起して、最近日露戰役に及び、治亂盛衰の外、人文史上の諸種現象、一として包括せざるなく、材料精確、引證該博、秩序整然として、筆力犀利。加ふるに、數種の索引を附して、撿出に便にしたれば、その使用如何によりては、又完全なる一個の歴史辭書たるべし。中等教育に關係ある者は、固より論なく、苟くも國民たるものは、何人と雖も、一本を座右に備ふべく、眞に寶鑑の名に負かざる要册といふべきなり。

東京博文館本町

主筆 農學士 石阪橋樹君

農業世界

▼毎月一回十日發行 ●第壹卷第貳號五月十日發行● [illegible]

第壹卷 第貳號目次

▼菊判 毎號本文二百四十頁
口繪 光澤寫眞版四頁 普通寫眞版四頁 彩色石版畫二頁

◉

●定價 一冊 金貳拾錢
△四冊 前金七拾五錢
△十六冊 金貳圓八拾錢
郵稅貳錢宛
△八冊金壹圓四拾五錢
◉外に要郵稅

發兌元 東京市日本橋區本町三丁目 博文館

寫眞畫報臨時増刊

凱旋觀兵式紀念帖

凱旋觀兵式

國光八紘に輝き、威武四海を壓す、眞に是れ日本建國以來未曾有の盛時たり、我が國民たる者、永く此日を忘るべからず。

此日凱旋觀兵式の盛典を擧げらる、龍顏殊に麗はしく、忠勇の軍隊を閲したまふ、威武赫々として、國運更に一大發展の時機に達せんこと、期して竢つべし、國民は永く此日を忘るべからざず。

凱旋觀兵式の盛典は一日を以て了ると雖も、此盛典を見るに至りし所以のもの、豈一朝一夕の事ならんや、その原因たる、抑も空前の戰捷にあるなり、空前の戰捷は陛下の稜威に基き、軍隊の勇烈と、擧國一致の忠誠とに因て得たる也、國民は永く此日を忘るべからず、又此典を忘るべからざる也。

本館今茲に「凱旋觀兵式紀念帖」を出すもの、元より此盛典を後世に傳へ、空前の戰捷を得るに至りし原因を、永く後昆に知らしめんと欲するの微意に外ならず、故に寫眞に於ても、記事に於ても、唯一日の盛觀を示すに止まらず、更に其原因に遡り、忠魂武魄の發動を明かにせんと欲す、即ち本書は日本光榮史の片影也、眇たる小册子、もとより不備を免れずと雖も、國家に志あるの人士、本書を繙いて、ます／＼自ら勵み、又之を後世子孫に傳へて、帝國の生命なる日本魂を培養するの一助ともならば、本書發行の微旨乃ち足る。

日露戰爭 名將逸事談

◎陸軍五殿下御逸事

◎伏見宮殿下　金枝玉葉の御身をもつて、或時の如き不潔なる支那民家の事とて、南京虫の間々尊體を犯し奉らんとするより、御附の人々は痛く氣を揉んで居ると、殿下は微笑を含ませられ、『戰地の事である、南京虫の襲擊位ゐは意とするに足らぬ。』と仰せられた相だ、聞くもなか〳〵に畏れ多い事では無いか。

◎閑院宮殿下　戰地へ向け御渡航の途中である、一日御食後運動の爲にと、甲板の上に御出でになつたが、水夫等が熱心に甲板掃除に從事して居るのを御覽になると、ツカ〳〵と其傍に御進みになり『其方達毎日御苦勞な事だ、ちと煙草でも吸ふて息んだらよからう。』と仰せられ、御手づから煙草を水夫等にお與へになつた時には、水夫等は餘りの有難さに、一人も顏を上げ得る者はなかつた相である。


山縣元帥

◎久邇宮殿下　まことに磊落なる御方にて、陣中にあつても士卒と同じ樣な生活を遊ばされる事も屢であつた、九連城から鳳凰城に向て御進軍中の事である、雨中何の蓋ひも無い處で御行厨を開かせられたに、只さへ糠臭い飯の上に、雨は遠慮なく降り込むので、下士卒と雖も一寸手を出し兼ねる程であつたが、殿下は少しも嫌な顏を爲し給はず、傍の者に打向はれ『あゝ好い茶漬が出來た。』と笑ひながら、いと氣輕に召上られたと云ふ事である。

◎梨本宮殿下　殿下は第二軍司令部附として、至る處の戰爭に御殊勳のあつた御方である、今から十年程以前の事だ、當時殿下は未だ士官候補生にて、廣島の兵營に在せられたが、其頃日清戰爭は始まつて、大元帥陛下は大纛を廣島に進ませられたので、御着輦の當日、殿下は御出迎にと停車場に御出になり、靜かに歩んでプラットホームの方にお進みになると、其邊に立番して居つた巡査は、殿下の御顏を存せぬので普通の下士官と思ひ、大喝一聲、

『コラ〳〵其處へ入つてはならん。』と叱喝したけれど殿下は御自分の事とは思召されず、其まゝお入りにならうとするにぞ、巡査は走り寄て、いきなり御肩に手を掛て引戻さうとする、其處へ驅つて來たのは一人の警部で、此樣を見るより巡査を突退け、『殿下であらせらるゝぞ、無禮をするな。』と叱り付け、恭しく殿下に向つて『この巡査は新參者の事とて、殿下とは存じ申さず、何とも申樣なき御無禮を致しました、直ちに相當の處分に及びます故、どうか今日の處は御許しを願ひまする。』と、恐る〳〵御詫びを申上げると、殿下は含笑ませ給ひ『イヤ其樣な心配には及ばん、此巡査は職務を盡したのだから、却つて賞めて遣はすべきである。』と仰せられた相である。

◎竹田宮殿下　殿下は前に北白川宮恒久王殿下と呼ばせられた御方である、御父君の英武なる御氣質を受けて、此度の戰爭にも尊き御振舞ひ多き中にも、進軍中負傷兵に御出會ひになれば、親しく馬を下つて手を取らぬばかりに慰められ、又た戰死者の墓に向つても、丁寧に敬禮を爲さるゝ等、見る人々御謙德の程に、感涙を流さぬ者はなかつたとの事である。

◎大將一口ばなし

◎長谷川大將の一喝　鴨綠江總攻擊前だ、大將は近衛師團司令部を義州に置かうとすると、傍に在りし一副官の云ふに、『義州は敵砲の集中する處ですから、司令部を置くのは危險ではありますまいか。』と、聞くより長谷川大將は大喝一聲した、『馬鹿を云ふな、敵彈の來るのは當然では無いか。』


小川大將

◎乃木大將百盃を傾く　乃木大將はなかなかの酒豪である、凱旋後知己朋友百餘名を紅葉館に招かれた時は、來客は多少遠慮して大將に盃を差さぬので、大將は宴中いきなり立上り、盃を持つて片つ端より來客を逆襲し、『サア頂かう。』と、見る間に百餘盃を傾けて、泰然自若として居られたには、來客一人として舌を卷かぬ者はなかつた相だ。

◎黑木大將と菓子　黑木大將も亦た上戸黨の頭領で、一晩でも二晩でも、對手さへあれば平氣で飲み明される相だ處が近頃ボツ〳〵洋菓子などを摘まれるので、或人は妙な

顏をして、

『閣下がお菓子を召上るとは意外ですな。』と云ふと、大將はカラ〱笑ひながら、

『イヤ、蠻カラも此頃は大分進歩したのさ。』

◎大山大將のお好み　大山大將は葡萄酒と梅干と銃獵とが一番お好きな相ぢや、曾て名古屋地方に出獵して、終日一羽の雉子も得ず、頗る手持無沙汰に唯ある村端に來かゝると、一軒の百姓家があつて、その屋敷内の大木には數羽の鳩が留つて居るので、見るより大將は、

『占たり。』と、其屋敷内に驅込まんとすると、門前には一人の梅干婆さんが大根を洗つて居つたが、元より大將とは知らず其前に立塞がり、眼を三角にし口を尖らして、

『お前樣何んだつて默つて己が所へ入つていくだ、大きな身體して鐵砲なんか擔ぎ廻るより、家さ歸つて百姓でもしたらよかつぺい。』と叱咤されたので、之れには流石の大將も、頭を掻いて閉口されたとの事である。

◎奧大將の徹夜酒　豪傑で酒を飲まぬ人は極めて少ない大將も亦た頗る付の大酒家である、その酒の飲み振りは黑木大將や東郷大將によく似て居て、チビリ〱黨の方である、部下と酒を飲む時など、盃を手にして面白き話に時の經つを知らず、時々部下から

『閣下、もう夜半の三時です。』と云はれる事もある、然し大將は敢て驚かず、

『何構はん、夜の明ける迄で飲むさ。』

又た大將はトルコ煙草と談話と銃獵とが最も好きで、談話にかけては、陸軍部内隨一の快辨家と云はれて居る。



寺内中將

◎兒玉大將の萬能　大將は何んでも出來る人である、戰略の事は云ふ迄もなく、歌でも、書でも、畵でも、鑑定でも、何んでも御座れだ、お好きは、碁、將棊、玉突、テニス、洋酒、燒鳥で、他にもつとお好きなものもあるらしが、其は天機洩すべからずである、然し家に居られる時は、朦六頭巾を被り被布を纏ふて、まるで田舍俳諧師の樣な風をして居られる事もある相な。

◎野津大將と愛馬　大將は極めて謹嚴な武將で、陸軍部内屈指の名望家である、最も馬を好まれて、毎朝起きると直ぐに出掛けられる處は馬小屋で、愛馬の鼻頭を撫でゝ、何うだ變りは無いかと云はれると、馬もよく大將に馴染んで、大將の足音を聽くと早や嬉し相に嘶いて居る程である

斯かる有樣なので、馬さへ機嫌がよければ大將も機嫌よく馬に少しでも故障があると、大將も終日苦い顏をして居られる相な、大將は兒玉大將とは反對で、悍馬に乘る事を唯一の樂みとして居る他は、殆んど道樂と云ふものは無い相ぢや。

◎川村大將と葡萄酒　大將は威あつて猛からぬ好武人である、深く士卒を愛せられ、柝木城攻擊の時など、葡萄酒の罎を携えて戰線に立たれ、負傷兵の後送されて來る者があれば、自ら葡萄酒を其兵に與へ、

『氣を確かにして早く癒るんだぞ。』と、斯く親切を盡されるので、部下は皆大將を慈母の樣に思つて居る相だ。

◎西大將の風流　西大將は水菓子が大好きで、なか〱風流なお方である、隱し藝には、長唄、獨々逸、義太夫等あり、又た文才に富んで、時に觸れ和歌などを讀まれる事もあると云ふ。

◎小川大將の剛情　小川大將は日本第一流の戰術家で、陸軍部内屈指の剛情者である、曾て陸軍大學校にて、獨逸有名の戰術家メッケル氏の講和を聽いて居つた時、大將とメッケル氏との間に端なくも一大議論が起つた、それは何かと云ふに、大將は野戰の場合には野砲が利益であると云ふに、メッケル氏は山砲が利益であると云ひ、双方自說を主張して下らず、何時迄で經つても果しが無いので、短氣の大將は大喝一聲、

『最う議論は無益だ、然らば貴下は今直ちに歸國して、貴下の誇りとする獨逸山砲隊を連れ來れ、余は日本野砲隊を以て粉虀して見せむ。』と怒鳴つたので、之れには流石のメツケル氏も閉口したとの事だ。



淺田中將

◎大島大將の狂歌　大島大將は頗る磊落な將軍である、南山攻擊の時だ、雨と飛び來る彈丸の間に立ち、悠々笑ひながら左の如き狂歌を詠まれた。

滿洲を盜み喰ひせし報にて
とても遼陽かなはざりけり

大將の威風堂々たる英姿を見た人は、此樣な狂歌など作られるとは意外だらう、けれど大將はなか〱風流人で、獨々逸もやれば、義太夫も唸られる、少壯時代は有名な美少年だ、美人連に大騒ぎをされた事も屢ばあるが、頗る付き堅造で、女なんかはと鼻で笑つて居られる、今は天下に名高き勇猛の大將、お好きは天ぷらに燒鳥に鰻めし、酒は云ふ迄もない、豪傑中の豪傑である。

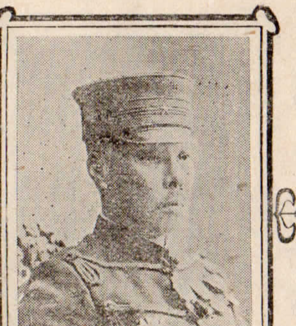
飛花亂撩

叱劍道人

⊙觀兵の字は、左傳に「觀二ル兵ヲ于周疆一ニ。」とあるのが初めださうである。即ち周の國疆で觀兵式を擧行したので、一種の示威運動、武威を輝かしたのである。その後和漢の歷史には、觀兵の事は見えぬやうである。

⊙我邦で天子が兵を閲し給ふといふ事は、無論維新以後の事で、初めは飾隊式と稱へた、その後觀兵式と改められたのである。最初は日比谷の原、それも今の公園の一部分が練兵場であつたのが、軍隊の增加するに從つて、狹くなつたので、青山練兵場を設けられた。今はそれすら漸く狹隘を告ぐるに至つたといふ事である。

⊙今回の大觀兵式には、韓國は義和宮を特使とし、帝室を代表して參列せしめらる、宮の恐悅想ふべし。



飯田中將

⊙數日前に一通の郵書が屆いた、其宛名を見ると、住名は三年ばかり以前に、僕が一時轉地して居た所である。裏には伊勢國內宮長峯、神宮恭敬會大本部とある。封を切る迄もない。恭敬どころか、神宮の名を冒して愚民を欺く不敬漢であることは知了された。併し念のため開封して見ると戰勝奉祝皇太神宮大々御神樂奉奏加名簿といふ馬鹿に長い名の帳簿が一冊あつて、矢張伊勢內宮神宮恭敬會大本部とある。大本部など書く丈で、無知無識の徒の仕事であることが分る。然るに彰仁親王の題字があるのは、是も愚民を欺く一手段で、何れ模刻したものか何かに相違ない、又この加名簿には親王の題字の次に主旨書といふ者が一枚戰勝奉祝大々御神樂規定要項といふ者があり、最多額の拾圓寄附すれば名譽贊助員になり、最少額の參拾錢は贊助員になるのであるが、寄附者に送るといふ品物の中に、有栖川熾仁親王御震筆といふのがある。御震筆とは何の事か、天子には宸筆といふが親王には謂はぬ。殊に震筆では何の事か分らぬ。その次に寄附金額、住所、姓名を書き込むべき罫引の紙が二枚ついて居る。是れに人を勸誘して金額氏名を書いて遣ると、其の多少に隨つて、或は名譽會員とか、特別會員とか正會員になられるさうだ、有難いことだ。併し僕

は頗る御迷惑だ。それで面白くもない事を長々と書き立てたのは、讀者に對して恐縮であるが、斯ういふ徒は恭敬會大本部のみでない。伊勢ばかりでも十種もあるそうだ、勿論神宮に何等の關係もないのである。其後東京朝日新聞を見ると果して會でも何でもない、一個人が遣つて居る事が分つた。斯う云ふ徒を筆誅するのも、社會改良の一端であると思ふ。

⊙僕は每日電車で往復するが、乘る度に不愉快を感ずるのは車掌よりも多く乘客である。乘客の數が車掌より多いからでもあるまい、入口に立つて居て、車掌が聲を嗄して『前がすいて居りますから、どうぞ少々お進みを願ひます』と數回繰返しても、まるでカナ聾の樣である。斯る徒は腰を掛けると、二人分以上も座席を横領して、矢張車掌の嘆願を耳にも掛けぬ、併し美人が來れば一番に席を讓るだらう。斯る徒は決して下等社會の人にはないので、八字髯或は洋服といふ扮裝で、少くも普通教育は受けて居る筈の人物だ。それからばアさんにも折々手こずる事がある。席のないのは一目瞭然として居るものを、腰を曲げて這込むや否や『何處か掛けられないかしら』と大聲で獨言、所謂壁



西島中將

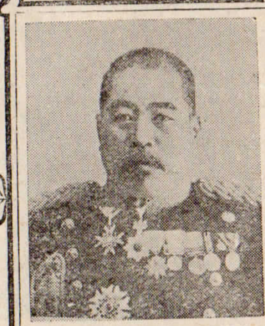
[illegible]も、それで[illegible]付ける者がない人、[illegible]い二人の膝の上に半分づゝ腰をかける。これは無論裏店住居の婆さんたちで、斯うなると穢ならしいから、如何なる豪傑も先づ立つて席を與へる。つまり持兇器强盗のやうなものだ、是程でなくても、我が權利だといふ風で、僅の隙に割込む婦人が少なくない。又被布を着たお婆さんの中には、一寸の隙もない所を、少々御免とか、何とか言つて、手を出して居る人もある。穢ない腰を持つて來る婆さんと、五十歩百歩である。但し多く四十以下の婦人に限るのである。

⊙併し車掌にも往々不埒なのがある。過日の二六新聞に車掌何某と署名して投書があつたが、其肯綮を得て居る所を見ると、眞實車掌らしい。且新參の人でもないらしい。其乘客の不德義を論じた所は、大概首肯されるのであるが、只一條不埒な事を謂つて居る。それは前から下る客は、運轉手が一々手袋を脱いで切符を受取る、その如何に冷いかを察しないのであるといつて、乘客の不德義の一つに數へて居る。斯ういふ心得で居るから、畢竟乘客に無禮をする事になるのだ。又一度は電車鐵道の車中で實見した事であるが、慥に中等以上の家に育ツたと見える令孃が、囘數

券を出して切つて貰はうとすると、端の處が三角形に斷れて居る、すると車掌は『是は一度使ッたのでせう』と冷然として謂つた。令孃の顏は見る〳〵紅くなつて、『今朝切つた切符に仍いて斷れたのです。』と言ひながら更に別の切符を切らせた。何たる無禮な奴であらう。回數券を一度ゴマカして幾らの利益になるか、稀に其樣な事があるとしても、其樣な事をする人か、しない人か位は誰でも分る。稠人中で少女を侮辱したので、相手が男であツたら喧嘩になつたかも知れぬ。其時滿車の乘客は一齊に憤懣の色が見はれたのである。是等は惡車掌中にも多くはあるまい。

⊙上野若くは新橋から乘る人が、多く見るのは、電車に乘込むと、先づ腰掛臺に毛布を疊んで敷いて、大きな靴を脇を置いて下駄を脱いで座り込む。ところが經營半ばにして、車掌から注意されて、靴を膝の上に載せる。長い間汽車に乘つて來て、初めて電車に乘つたのであらう。併し東京の紳士のやうに强情なのは、一人もない。

⊙河野大竹小川の諸士が無罪放免になつたのは、奇らしくも何ともないので、最初捕縛したのが、實に奇怪であるのだ。羅織して罪を成すといふのは、昔法律の備はらない世界には、往々あつた事であるが、東洋の文明國と誇つて居る日本の、而も帝都の眞中に此事のあつたのは、遺憾千萬の事である。麹町署長を咎むるは抑も末で、署長は單に奧宮檢事正の命を拜したのである。併し檢事正とても、自ら喜んで僞證をさせたり、無罪と知りつゝ名士を拘引したのではあるまい。前内閣の意を受けて、其爪牙となつた迄であらう。されば、ツマラヌ人騷がせをした罪は、全く前内閣にあるのだ。



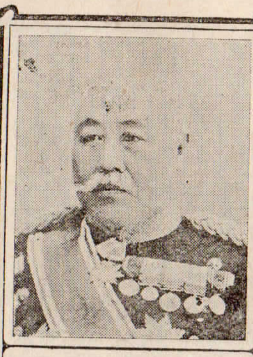
松永中將

⊙棺を覆ふて論始めて定まる。況して其事件の落着も見ぬ中に、彼是論評するのは、輕卒の誚を免かれぬ。最初上村艦隊が浦潮を取逃した時、口を極めて上村將軍を讒誣した人々が、一たび蔚山沖の大捷を聞くと忽ち將軍を謳歌した。其後ポーツマウスの談判が旨く行かなかつたので、口を揃へて小村大使を罵倒した連中が、今になると『アレハ小村が惡いのではない。金子が惡いのだ。』『勿論さうサ』とは雷同社界の常態である。

⊙遊戲にも其社會に依て自から區別がある。「ボートレース」「ベースボール」などは書生的遊戲で、銃獵、寫眞などは紳士的遊戲、碁、將棊などは隱居的遊戲、「フアンシボー

ル」（行軍を練る側隊行列は別なり）「ラグビー」などは、先づ貴族的遊戲である。香、茶、活花、盆栽などは淑女的遊戲、園遊會は富豪的遊戲（もし遊戲と謂ひ得べくんば）、釣は閑人的遊戲、鞠、羽子、双六などは少女的遊戲、歌骨牌は男女老幼を通じて社會一般に行はれて居るし、紙鳶は男兒に限つて居る、遊戲の種類は實に樣々であるが、遊戲として取るべきは成るべく衞生に害のない、寧ろ益のあるのと、多數の人が一所に樂しめるのが上乘である。其處に行くと西洋の遊戲は大抵多勢の人で遊ぶやうになつて居るが、日本固有の遊戲は一人もしくは二人で樂むのが多い。只歌骨牌ばかりは、多勢で遊べるが、從來は惡い弊で、必す日が暮れて始めることになつて居た。それも夜半位で止めれば好いが、大概徹夜する習慣である。翌日になると睡氣と疲勞か一時に出るから溜らない、健康に益のあるべき遊戲も是では非常の害となるのであるが、近來漸く晝間やる風が多くなつて來たのは、一進歩と謂はねばならぬ。

⊙小兒の遊戲として、鬼ごッこも惡くはない。併し學校の運動場か、公園のやうな車の來ない所でなければならぬ。然るに往還で羽子をついたり、鬼ごッこをしたりする風習が、まだ改まらないか、少兒の注意が足らぬのと、一は舊習に因襲して、さまで危險といふ事に氣が付かぬのである。馬車も人力車も自轉車も電車もなかつた時代には、往還で遊んで居ても、危險はなかつたであらうが、今日の往還は殆んど車聲が絕えないといふ有樣であるから、少兒を遊ばせることは實に危險である、その代り昔しなかつた所の公園といふものが幾らもあるから、最寄々々の公園で遊ばせる習慣を付けねばならぬ。公園は危險のない上に、空氣が好いといふ一利益がある。併し淺草公園は公園の資格がないので、近近改良されるさうであるが。今の所ではまだ下等の飲食店も澤山殘つて居るし、六區の如きは實に一大魔窟である。其上常に雜踏して居るから、空氣も極めて不潔であつて、東京唯一の不潔不攝生的公園であるのだ。



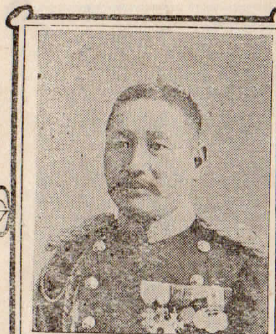
塚本中將

⊙それから根津を洲崎に追遣つた當局者は、今の芳原を何處か適當の所に追遣らねばならぬ。それを機として大革新を實行せねばならぬ、名は新芳原であるが、その新は約二百年前の新であるから、今の社會には適當せぬ。娼妓廢止が出來れば結構であるが、それは一部の論者の夢で、人間に情慾のあり、且人士の品性の高まらぬ以上は、右を防げ

ば左に出るといふ風で、娼妓のない土地では、安藝者や酌婦が其任に當る。淺草公園を改革して、銘酒屋碁會所安待合の類を、ブチ壞して仕舞つたら、其次は芳原放逐ど來るのが順序である。元來舊習を嚴守して、少しも刷新といふことを知らぬのは、芳原の特色であるから、善くはならぬで、弊が增すばかりである。彼等の改良々々といふのは、たゞいろ〳〵にして、儲かる手段を講ずるに過ぎない。

⊙東亞同文會は、曩に會頭の近衞公を喪ひ頃日又副會頭の長岡子を失つた。恐らくは之に代るべき人物はあるまい。一世の儀表たる資格を備へて、而も支那人の信服を得た人でなければならぬ。併し斯樣いふ人物は一朝一夕に出ないのであるから、後繼者を求めることは容易でない、殊に長岡子爵は、漢學の素養があり、且支那の紳士と交際する最良具たる所の詩にも長じて居られたから、一層の便利があつたのだ。

⊙長岡子爵の葬儀に付て感じたのは、貴婦人の服裝である。曾て田舍紳士の葬儀を見たが、會葬の貴婦人(?)は紅白粉を附けぬといふばかり、晴を競うて無垢(白に非ず)を着て居たが、何れも紋織で、色は水淺黃もあれば、朱鷺色もある。純白なのは殆んどない。つまり白無垢を着る主意を知らないのだ。而も何れも急に拵へたものらしい、といふのは、聞いて見ると、此土地初めての盛裝であるとの事だ。ところが長岡子爵の葬儀では、眞の貴婦人が大分行かれたが、大部分は白襟紋付で、白を衣られた少數の方は、裲襠を着て居られた。例の田舍紳士の葬儀に、水淺黃や朱鷺色の衣物を着て、同色の帶を無遠慮にデコ〳〵に締めて居た事を思ひ出して、異樣の感が起つて、但し長岡子の時は、侍婢と見える婦人たちは、何れも眞の白無垢であつた。



木越中將

⊙臺灣、伊太利、北米の大地震は、何れも酸鼻の極であるが、臺灣は我が領土であるから、同胞は率先して、救恤の道を講じなければならぬ。早速救恤に着手せねばならぬのだ。併し米國も我東北三縣の凶歉に、十餘萬金を寄附して居り、日露戰爭中には、遙々と海を越て、特志看護婦も來た。此際桑港の大震に付ては、之に酬ゆる所がなければならぬ。赤十字社で、看護婦を選拔して、病院船を送るといふ計畫も、結構であるが、居るに家なく、食ふに糧なき全市の人士を救ふには、大いに方法を考へねばならぬ。併し巧遲は拙速に如かずである。

⊙過日の前田家の婚禮は、貴族の婚禮の模範と謂はれて居る。併し善く應用したらば、中等以上の家の婚儀の參考になるかも知れぬ。元より詳しい事は知れぬが。加州家の古例に依て、更に小笠原流に則つたものださうで、前田利爲侯は從五位であらせらるゝから、一體なら緋の直垂を服さるべきであるが、侯爵といへば、三位以上の格でもあり、旁で宮内省に伺はれた所が、前田家の古例もあり、且古例もある以上は、無論三位以上の禮服で差支はあるまいとの事に、黑を服させられたさうで、新夫人は寫眞で黑く見えるが、裲襠は緋、袴は鰕色の少し薄いやうな色であつたとの事、當日儀式の席上には、媒酌の德川公爵並に同夫人、前田侯並に同新夫人の外には、侯の刀持が直垂で侍して居た丈であるから、同家の重臣すら詳しい事は知らぬとの事である。式が終ると德川公及び夫人は直ちに服變られ、前田侯及び夫人は、その儘の服裝にて、邸内の祖先利家公の廟に參拜されたさうで、是れは獨り前田家ばかりでなく、越前、熊本その他舊大諸侯は大概同樣で、新夫人が裲襠袴も同樣である。又新夫人が愛嬌の守といふものを持行かれるのも、舊華族一般の慣例である。新夫人の袴は緋が通例で、別の色のもあるが、昔は繪にある通り非常に長かつたのであるが、今は殆んと衣服と同じ丈である。是は宮内省の女官も同樣である。



大久保中將

⊙曾て雲海子爵の所で、鎭國將軍郁朗の詩を見た。函嶺から雪の富士山を見た詩で、七言古詩であつたが、始めて滿洲貴族の詩の旨いのに驚いた。而も纖巧な處は少しもないので、如何にも雪の富士を詠ずるに足る筆力であると思つた。子爵の命で、支那諸名流の詩箋を整理した時であつたが、其時一通を寫して置かなかつたのは、今に遺憾に思ふ所であるが、實は子爵が斯う早く薨ぜられやうとは思はなかつたからで、その上諸名流の詩を編纂して印刷するとの事であつたから、後で見られると思つて居たのだ。元來詩は本場だけあつて、一種日本人に出來ぬ所がある、今度來朝された蒙古のトルハト王葆眞殿下の七律一首、亦朗々誦すべきものである。左に紹介する。

萬里滄溟一棹孤。西風吹送到₂方壺₁。故鄉兒女成₂春夢₁。
舉世功名在₂海隅₁。鐘鼎簪纓易₂短服₁。風流神采銷₂長途₁。
他年回₂向長安₁日。能否彼吾勝₂此吾₁。
抱負あり、感慨あり、神采躍然たる作である。

日本と露西亞

閃電庵主人

△悪狼猛ること甚しければ、獅子遂に之れを搏つ、露國は悪狼である、日本は獅子である、彼は貪慾飽く事を知らず其極遂に日本に撃たれ、今日の悲運を招し様になつたのは全く自業自得と云はねばならぬ。

△日本と露國とは、何うも昔から仲が悪かつた、處へ日清戰爭後、彼は三國干涉の謀主となつて、日本が當然に得べきの權利を侵害した爲め、我が國民は其時より、眞に遺恨骨髓に徹するの感をしたのである

△彼の干涉は確かに不法である、暴慢無禮である、然し日本は世界平和の爲に、涙を飮んで我慢して居つたのだ、スルト身の程を知らぬ露國はます〳〵増長し、一旦日本に還附せしめた遼東半島を、向ふ二十五個年間と云ふ約定で清國から借受けた。

△悪狼は他の物も自分の物も差別が付かぬ、一旦借りたが最後、何んで默つて返すものか、二十五個年間の借受けは、即ち永久の借受けを意味するのである、之れ取も直さず占領だ、戰爭もせずに占領するとは、サテ〳〵露國はウマイ事を考へたものだ。



故松村中將

△何故其樣な慾の深い事をするかと云ふに、之れ露國の是である、ピートル大帝は世界平呑の大計を立て、露人
其大計を實行せんと企てゝ居るのである、即ち侵畧は露
の國是である。

△侵畧必ずしも悪くは無い、若し日本
如き武侠帝國が、世界の將來を思ふてド
ドシ地球上に翼を伸ばし、他日世界を統
する樣になれば、武侠の光は天地に輝い
戰爭も止み、この地球上は忽ち化して一
天國となるかも知れぬ、日本國民は少く
も、之れ位ゐの理想を抱いて居らねばなるまい。

△然し露國如きに世界を平呑されては堪らぬ、彼の侵略
盗賊的である、彼は唯だ自國の慾望を滿たさんが爲に、
略を逞うするのである、而して自國をすら治むる事の出
來ぬ露國が、過つて世界を平呑する樣になつたら何うで
らうか、この地球上は全く地獄となつて仕舞ふのだ。

△我等この世界に生れた以上は、何うしても此地球上を地

獄とする譯には行かぬ、露國の盗賊的侵略は、飽迄で防害せねばならぬ、之れ正當防禦である。

△處が露國は其樣な事には頓着せぬ、何んでも盗める丈け盗んで遣れと、明治三十三年の北清事件を好機會として、事件落着後列國が撤兵したに拘らず、彼のみはなか〳〵撤兵せぬ、イヤ撤兵せぬばかりか、ます〳〵大兵を滿洲に送つて來る、遼東半島の旅順口は、彼の一大牙城となつた。

△實に怪しからん次第である、今迄で日本は虫を殺して默つて居つたが、最う斯うなつては默つて居られぬ、世界平和の爲め、東洋保安の爲め、是非撤兵して貰はねばならぬと、言を穩かにして掛合つた事も二度三度では無い。

△けれど暴慢無禮なる露國は、ヘン日本如き小國何を云ふかと、木で鼻くゝるが如き挨拶も毎々だ、たま〳〵理詰めに會つて、それでは仕方が無い、撤兵しやうと約束しても、一向撤兵する樣子が無い、彼は飽迄で日本を馬鹿にして、自國の慾望を遂げやうとするのである。

△或る外國人曰く、日露戰爭が最う半年も前に起らなかつたのが不思議であると如何にも不思議な程だ、之れを思ふと、日本は隨分忍耐の強い國だ、然し忍耐ばかりでは無い、



山中中將

當時日本人中には、頗る露國を恐れて居つた人もあつた
しいかつた。

△成程地圖を披いて見ると、露國は歐羅巴より亞細亞に
つて、日本に五十四倍する大國である、然し大國と雖も
日本武勇男兒は何恐れんや、明劍一たび鞘を離るれば電
の如く、遂に彼に大打擊を加へる樣になつたのである。

△强暴國は豈に露西亞一國のみならんや、苟も東洋侵略
野心を抱き、我に無禮を加ふるものあれば
其何國たるを問はず、我は之れを粉韲せ
ばならぬ、之れ日本の國是である、日本
兒は永く此覺悟を持て居らねばならぬ。

△今回の凱旋觀兵式は、實に空前の盛典
ある、余輩は何んの幸福か此盛時に會し
限りなく深き愉快を感ずるのである、然
深き愉快を感ずると同時に、余輩は此盛時を見るに至り
原因、即ち數萬の忠勇義烈なる我が同胞が、滿洲の野に
を流し骨を枯し、以て帝國の光榮を購ひし事を、何時迄
も忘れる事は出來ぬ。嗚呼驍勇武烈なる大日本帝國！
國者が血汐を流して得たる無限の光榮！　余輩はます〳
勵んで、帝國々運を九天の高きに上げねばならぬ、是れ
本國民の義務である。

觀兵式と招魂祭

◎凱旋觀兵式

回顧すれば明治三十七年二月十日、宣戰の大詔が煥發せられた以來、日露兩國の間に千古未曾有の大戰役は演ぜられた、海には大小六七十隻の大艦隊が、支那海、黄海、日本海、オコック海から太平洋に亘つて奮戰し、陸には戰線の貔貅約七十萬、滿洲、北韓から樺太の累線凡そ百六十里に渉つての激闘し、二十個月と云ふ長日月と、二十億の軍費を費しだる世界未曾有の大戰に於て我は常に連戰連捷し、帝國の光榮と威武とを宇內に赫灼たらしめ、全世界を震駭せしめた此壯烈なる戰役終りて、先海軍の全部が凱旋を終るや、昨年十月二十三日には大觀艦式あり、更に今回滿洲の陸軍全部が悉く凱旋を結了したに就き、此の陸軍凱旋觀兵式の壯擧ある帝國の爲に深く賀すべき事である。

◎大觀兵式の準備

此の偉大なる陸軍大觀兵式の計畫は本年二月初旬から企でられ、數萬の人が參集するのだから、隨つて諸般の準備も亦大したものである、二月二日先づ委員會の組織が決定せられ、大山元帥は委員長に擧げられ、本鄕、宇佐川、井口、福島、松川、村田、大澤の各少將、大島、林、松石の各大佐は同委員を命ぜられた、翌三日午前十時より第一回の大觀兵式準備會を參謀本部樓上の會議室に開かれ、大山元帥を始め石本陸軍次官、外松主計總監、福島、井口、宇佐川の各少將等參集して、初めて陸軍大觀兵式計畫に關し凝議され、愈四月三十日を以て青山練兵場に擧行せらるゝ事となり、陸軍凱旋觀兵式なる名稱のもとに、東京衞戍の各師團は勿論、全國各師團よりは一個聯隊毎に一個中隊宛の代表軍隊に、軍旗を捧持して參列せしめ、尚ほ臺灣、樺太、滿洲の各守備軍及韓國駐剳軍よりも代表軍隊を參列せしむるに就き、參加軍隊の人數は約五萬に及ぶので、四月二十八九日頃から東京以外の各地に駐屯する諸隊は續續入京して、四月三十日には殘らず青山練兵場へ繰出しての大觀兵式を行ふのである、當日の諸兵指揮官、參謀長、參謀は左の如くに決定せられた。



立見中將

大觀兵式諸兵指揮官　元帥陸軍大將　侯爵　大山巖
大觀兵式諸兵參謀長　陸軍大將　子爵　兒玉源太郎
大觀兵式諸兵參謀　陸軍少將　井口省吾
同　同　福島安正
同　同　松川敏胤
同　陸軍砲兵大佐　大島健一
同　同　步兵大佐　松石安治
同　同　騎兵中佐　田中義一
同　同　步兵中佐　尾野實信
同　同　步兵中佐　小池安之

又今回の大觀兵式に際し、戰利砲を宮城二重橋前に陳列し、天覽に供する筈だが、此の戰利砲は重に戰利艦に附屬したもので、敵砲壘に据付けられたるものは廿四珊カノン砲のみである。

今回の陸軍凱旋觀兵式に就ては、參列軍隊及陪觀者を併せて、總員無慮十萬人と云ふ空前の盛典であるから、夫々不時に應ずるの準備が必要であると云ふので、準備委員會の決議に基づき、陸軍省にては凱旋觀兵式に際し、傷病者救護及傳染病豫防規定を發表せられ、當日の觀兵式に參列する軍隊及び一般の陪觀者にも適用する事となつたのである、而して此の衞生準備委員としては、三浦陸軍一等軍醫正、千田陸軍三等軍醫正、田村陸軍一等軍醫等が命せられたのである、又大觀兵式當日に於ける現場係の衞生委員としては、內村陸軍一等軍醫主任となり、外十三名は臨時衞生委員を命せられ、周到なる衞生上の準備は整頓されたのである。

陸軍被服廠では戰後の事業を擴張して、各師團の被服調修理の事に當つて居る處へ、今回の陸軍凱旋觀兵式に參列する部隊は、總て改良服を着用する事となつたので、之が調製の爲めに一般に多忙を極めて居つたが、尚ほ同被服廠が戰時支拂ひたる總金額は約一億三千萬圓の多きに達したとの事である、今回の大觀兵式に參列する軍隊全部の改良服新調の其費用も仲々多い事であらう。



大島中將

日露戰役に從事したる陸軍將校及同相當官にして、疾病傷若くは凱旋後除隊となり、後備役に編入せられたる在鄕軍人にして、陸軍凱旋觀兵式陪觀を希望するものに對しては、觀兵式委員より各地の新聞紙上に四月五日を以て左の如く告示せられた。

一、明治三十七八年戰役に從事せる在鄕陸軍將校同相當官（但し退役者にして後備役に服したる者を含む）にして東京に在る者及自費を以て地方より上京せる者は凱旋觀兵式に參列するを得但し四月十日迄に各自に從軍職名、東京に於ける居所及官氏名を記し凱旋觀兵式委員長に屆告すべし

二、服裝は茶褐色制服の軍裝とす但し背囊及脚袢を除き靴は黑色とす

明治三十七八年戰役　陸軍凱旋觀兵式委員

◎大觀兵式訓示

大觀兵式御擧行に付寺內陸軍大臣より四月十六日付を以て左の通り訓示を發せられた。

今回擧行せらるゝ所の凱旋觀兵式は我國曠古の大戰役に關し一昨年來、盡

瘁せる全軍の將卒を親しく觀閲し給ふ所の盛典にして未曾有の戰捷を博し皇威を中外に宣揚し國光を八紘に發輝したる我陸軍が振旅して凱を闕下に奏するの壯擧なり故に斯盛典に列する者は各自其動作を愼重にし軍容を嚴肅ならしめ上は　陛下の寵眷に答へ下は國民の信賴に副ひ以て毫末の遺感なきを期すべし

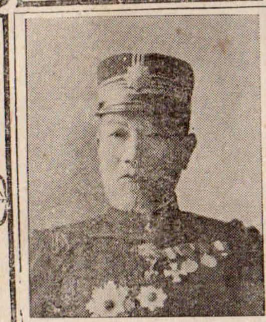
惟ふに本戰役の偉績は　陛下の御稜威に賴り軍隊の忠實勇武に基くものなりと雖も而も亦内顧の憂なからしめたる國民の後援は與つて大に力あるものとす即ち戰勝の榮譽は國民全般の偕に荷ふべき所にして軍隊の專有すべきに非らざるなり故に軍人は其功に誇るの言語を愼むは勿論國民の歎待に狃れて倨傲の風習に陷るが如きは特に戒めざるべからず各自須らく此意を體認し深く自ら抑制し謙讓人に接し常に高潔の美德を修めて國民の儀表たるを勉め必ず既得の榮譽を失墜すべからず

今回の盛典には成るべく直接戰場に立ちし軍隊を招致し以て全軍を代表せしめらるゝの聖旨なるが故に參列將軍の毀譽褒貶は單り其一身の榮辱に止まらず延て全軍に關するものなるを以て各部團隊長は宜しく部下を戒飭し以て上述の主旨を貫徹せしめ必ず陳虞なきことを期すべし

右訓示す

◎靖國神社合祀祭の準備

日露戰役に戰傷病死したる我忠勇なる松村師團長、東郷海軍中將以下十數萬人の忠魂を慰する爲め、五月一日より同五日迄五日間の臨時大勅祭御執行に就ては、大勅祭の委員長には野津大將命ぜられ、陸海軍兩省よりは數十名の將校其委員となり、五月十日頃より徐々と準備に着手せられたのである、此の大勅祭には大元帥陛下　皇后陛下、皇太子殿下　皇太子妃殿下の行幸啓をも仰ぎ奉り、全國及韓國、滿洲、樺太、臺灣等より數萬の軍隊參拜すべく、又此の大祭に合祀せらるゝ忠死者は、昨年五月合祀祭に加入せられざりし人々で、其數二萬二千五百六十七人である、之を各府縣に區別すれば即ち左の如くである。



大迫中將

北海道	五三五人	東京	七二八人
京都	三一九人	大阪	三三〇人
神奈川	三四二人	兵庫	九八一人
長崎	八四人	新潟	一二五八人
埼玉	四七七人	群馬	四三三人
千葉	六九九人	茨城	四八九人
栃木	三三四人	福井	八六九人
石川	八三五人	富山	八五九人
鳥取	一八一人	島根	四四七人
岡山	七二七人	廣島	一〇九二人
山口	八六四人	和歌山	四九人
德島	五三三人	香川	五六三人
愛媛	一一六八人	高知	一一一一人
奈良	一四二人	三重	一一二九人
愛知	一六五三人	靜岡	六一八人
山梨	二一二人	滋賀	七四四人
岐阜	一〇九六人	長野	六六六人

此の大勅祭には合祀者の遺族に參拜案内狀を發達せられ、尚ほ委員より左の如く告示されたのである。

來る五月靖國神社合祀者遺族に告ぐ。

◉大祭日割は五月一日夜招魂式、同二日より五日迄臨時大祭とす

◉合祀者は戰死若くは戰傷後死歿の軍人軍屬とす、但昨年五月合祀者を除く

◉合祀人名は三月廿七日より四月五日までの官報に告示す。

◉合祀者遺族へは大祭委員より參拜案内狀を其本籍地又は寄留地へ向け發送せしも、事故の爲め四月十五日までに不着の者は、速に陸軍省内臨時大祭委員へ申出でらるべし。

◉遺族にして轉居等の手續をなさずして本籍地又は寄留を離れたる者は、其旨至急前住地の市町村役場へ通知すべし。

◉參拜遺族には全國汽車汽船賃金割引あり。

◉參拜遺族注意書中山陽鐵道會の賃金四割引は五割引に訂正す。

靖國神社臨時大祭委員

又た大祭の際各遺族に對し特別の御思召を以て離宮其他の拜觀を許さるゝ旨御沙汰があつたのである。

靖國神社臨時大祭に餘興として準備せられたるものは、陸軍省大祭委員の設備に係る打揚花火、及大仕掛花火あり、之は凡て近衛歩兵第一聯隊の土手を利用して打ち上る事とし、一般下町邊より眺めらるゝ樣に打上るのである。又角力は東西の力士出場し五月三日より五日まで三日間、劍舞は日比野雷風例の如く五月二日より五日まで四日間、能樂は五月二日より六日まで五日間在京有志能樂師總代として牛込より觀世清廉、麴町より金剛鈴之助、芝區より木下敬賢出場する事に決定せり、其他大神樂等も例年の通り行はるゝ筈、裝飾は海軍の旗を以て大鳥居を飾り、境内には海軍の鹵獲したる戰利品を陣列し、馬場の四隅には陸軍兵器本廠出品の軍刀小銃を以てピラミッド形の塔を建つる事となつたが其高さは境内に近き二つは七尺、他の二つは九尺夜間は之にイルミチーションを點ずる仕掛けで實に空前の美觀である。



鮫島中將

◎觀兵式

觀兵式とは天長節、陸軍始、其他臨時の儀式及條例規則等に依り、軍隊を集合し、整飾して觀閲に供する事を云ふのである、觀兵式を分て二とす乃ち左の如くである。

(甲)閲兵式

(乙)分列式

觀兵式は兩陛下及左に列記する方に對し觀行はるゝので、之を行ふには今回の凱旋觀兵式の如く、條例規則等に於て明文あるか又は特に命令を發せられた場合に限られて居る。

太皇太后、皇太后陛下、皇太子、皇太子妃、皇太孫、皇太孫妃殿下、其他の皇族並に外國の皇帝、皇后陛下及皇族。

陸軍大臣、參謀總長、總督及陸軍大將。

軍隊の長たる將官但し旅團長の職を奉ずる大佐も之に準ず。(但所屬軍隊に限る)

觀兵式に出場する者は總て正裝するものである、査閲の爲め觀兵式に列するものゝ服裝は、觀閲者が之を制定する事となつて居る、觀兵式を擧行せらるゝに當りて諸兵の隊

制及其他の方法等は、臨時其指揮官の定むる所に從ふ可きものである、又觀兵式に出場する諸兵の指揮は今回の觀兵式の如く、特に指揮官を定むるにあらざる限りは、其團隊長之を司るものである、然し此團隊長が親から觀閲者であつた場合には次級の者が其指揮をするが例である。天長節、陸軍始其他、兩陛下に對し觀兵式を舉行せらるゝ場合に限りて、該地所在の諸將校を悉皆出場させるのである、然し今回の觀兵式の如く、全國の後備役に編入せられたる在郷者を參列せしむる事は之が始めである。

閲兵式とは諸兵が制定されたる隊列を正しく整頓して觀閲者が之を巡閲さるゝものである、觀閲者に對する諸兵の敬禮は兩陛下に對しては歩兵、要塞砲兵、工兵に在つては銃に劍を裝し捧銃を行ひ、騎兵に在つては捧刀（鎗を携ふ時は立鎗）し、野戰砲兵に在つては砲手も總て捧刀す、輜重兵に在つては捧刀をなし、總て曹長も亦捧刀し、將校は皆刀を以て敬禮し、軍旗亦敬禮を行ひ、軍樂隊及各隊の喇叭手は其隊列より凡三十歩の所にて「君カ代」の吹奏を始め凡十五歩過ぎ去らせ玉ふ時に止むのである。

陸軍大臣、參謀總長、總督、將官に對しては同じく隊列を整頓し、騎兵、野戰砲兵、輜重兵に在つては肩刀、歩兵、工兵に在つては銃に劍を裝し其儘姿勢を正し、「頭右（左）」の令にて皆一齊に頭を少しく受禮者の方に向け、其眼に注目し總て其隊長は刀を以て敬禮を行ひ、喇叭は左の如き區分に從ひ其隊列より凡十五歩の所に來りし時「海行カバ」を吹奏するのである。

陸軍大臣、參謀總長、總督、陸軍大將、　三回

陸軍中將、　二回

陸軍少將、　一回

旅團長の職を奉する大佐の觀閲者たる場合は、少將と同一の敬禮を行ふものである。



井上中將

分列式とは各隊とも中隊毎に横隊となり、軍樂又は喇叭に歩調を合せ一直横線の速歩行進にて歩調を正し敬禮點に至りて指揮官は捧刀を行ひ、觀閲者に注目の敬禮をなし各隊其位置に達したる時「頭右（左）」の令に依り頭を一齊に少しく受禮者の方に向け注目の敬禮を行ふものである。

◎禮砲式

禮砲式とは砲臺及砲兵隊屯在の地に於て、祝禮の爲め發砲する事を云ふので、之を行ふのは紀元節、天長節其他臨時の祝日に當り祝意を表する爲め、又は　兩陛下及左に列記する方に對して行ふものである。

太皇太后、皇太后陛下、皇太子、皇太子妃、皇太孫、皇太孫妃殿下其他の皇族並に外國の皇帝、皇后陛下、皇族

陸軍大臣、參謀總長、總督及將官

禮砲式の發放數には區別あるので乃ち左の如くであるが、然し官に對する發放數と職に對する發放數と相等しからぬ時には、其重きに從つて之を行ふものである。

紀元節、天長節及臨時祝日には　百零一發

兩陛下に對しては　百零一發

太皇太后、皇太后陛下、皇太子、皇太子妃、皇太孫、皇太孫妃殿下其他の皇族に對しては　二十一發

師團長に對しては　十三發

禮砲式を行ふ場合は左に列記するの外、條例規則等に於て明文あるか、又は特に命令を發せられたる時に限るのである。

紀元節、天長節、

兩陛下、太皇太后、皇太后陛下、皇太子、皇太子妃、皇太孫、皇太孫妃殿下其他の皇族が砲臺又は砲兵隊屯在の地に、行幸、行啓若くは通御あらせられ其地に着御及發御の時

陸軍大臣、參謀總長、總督及陸軍大將が公務に依て砲臺又は砲兵隊屯在の地に至る時及轉職して其地を發する時

師團長初めて管内砲臺又は砲兵隊屯在の地に趣き其地を發つ時

禮砲式は晝間に限り行ふもので夜間には決して行ふものではない、而して紀元節、天長節其他臨時の祝日に於てするものは、特に命令を發せられざる限りは當日正午に之を行ふものである、又一他に數個の砲臺又は砲兵隊ある場合に於ては其中の一砲臺又は一隊を限り發砲をするものである。



原口中將

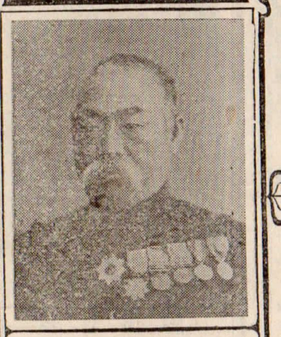
◎服裝と軍紀風紀との關係

一體服裝は軍人の容儀に係はる而已ではない、各兵の服裝如何に依り其隊の軍紀及風紀上の秩序如何を直ちに看取する事が出來る、唯有だ形上の技藝にのみ熟練しても立派な軍隊とは云はれない、軍紀とは軍隊の存立に就て最も必要な有形無形の法則である、假令ば一家に一家の家法あると同一般で、軍人の當に負擔す可き義務と云つても差支がない、乃ち軍事規則に從順して能く上官の命令に服從するのが軍紀である、故に命令の克く實行さるゝ軍隊は、必ず一般兵卒の服裝が備一して正しきものである、次に風紀とは軍人の態度並に軍隊の面目を保たしむる所の法則である、所謂風儀の事である、品格ある人は自ら他の尊敬を受くると云ふ樣な譯で、軍人たるものは容儀を最も嚴正にし能く上下の分を整ひ、自ら秩序整然たる可きの必要は是れ亦た軍紀と共に軍隊の最も重きを措く所以である、其の軍人の容儀や品格の備はる所は第一服裝の如何に非常な大關係を以て居る、此軍紀風紀を完備した軍隊は國の內外に對して其威信を保つ事が出來るのだ、風紀正しき軍隊は隨つて軍紀が張る、軍紀か張れば風紀も亦從つて正しくなる、風紀の正しくない軍隊は之に反して軍紀が弛む、軍紀が弛めば風紀が紊るゝのは是れ理の當然である、此の如く軍隊が軍

紀弛み風紀紊れて來ると、一番早く有形上に現はるゝのは服裝の上にである、故に日々の演習と雖も兵舍前に整列したる各兵の服裝を一々點檢して其不統一な所を訂正せしめ異狀なきを認めた後に演習を開始するのが例である、其他日曜、祭日及公用等の外出者に就ては營門の風紀衞兵が一々注意して脚絆の鈕一ッ不足ても通行を許さぬ位である況して今回の祝典たる觀兵式の如きは軍人が一生の光榮一代の晴れの場所とも云ふ可きであるから、各隊とも注意に注意を加へ各々其隊の名譽を毀損せぬ樣に努めるのである。

◎大元帥陛下の御服制と佩用の勳章

誠に畏れ多い事であるが大元帥陛下の御服制に就ては、世人が往々誤解して居る、陛下或る軍隊の如きは新兵掛の敎官が、大元帥陛下の御袖章の條數を大將の條數に一條を加へて八條になつて居るなど、出鱈目を敎へて居る樣な實に甚敷誤解がある、斯の如き事は自分勝手な想像から割出して大元帥陛下の御服制を擬定するもので、誠に畏れ多い次第で、甚だ以て不都合千萬と云はざるを得ない、軍人に限らず苟も軍國の臣民たる者が大元帥陛下の御服裝さへも知らぬとあつては、誠に恥入つた次第であるのに、況してや現に屯營內に起居する現役にして、然も新兵敎育の重任に當る者が


土屋中將

正確に御服制を知らぬとは實に殘念至極の至りである、陛下の御服制は大將の服制と先づ同じ事であると記臆して居つても宜しい、只其異なる點は、御肩章上の兩側に昇り龍と降り龍との各二個宛が附着して居つて、御鈕が菊の御紋章である事である、陛下の御胸間に帶せ玉ふ御勳章は左の如くである、

大勳位菊花章頸飾
同上副章、大勳位菊花章
勳一等旭日桐花大綬章
同上副章、旭日桐花章
勳八等白色桐葉章
勳八等瑞寶章

大勳位菊花章は頸飾に附着し喉下に佩び、其副章を左肋に佩ぶのである、勳一等旭日大綬章は大綬を以て右肩より左脇に垂れ、其副章を左肋に佩ぶものである、陛下の御胸間に勳章中の最下級なる勳八等白色桐葉章及同瑞寶章を帶せ玉ふを見れば何人も意外の感を惹起するであらう、是を見ても、陛下の微臣等が些末の武功に迄でも大御心を加へ玉ふ御聖德の程が明かなので記し奉るも誠に畏れ多い事である、

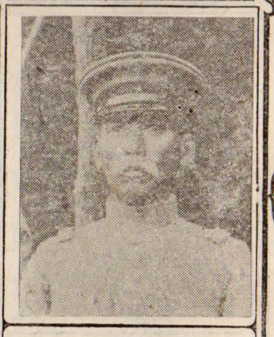
◎被服の手入と軍裝の準備

總て被服裝具の不潔なのは第一各兵の健康を害するの原因となるは勿論であるが、又其保存期限に大關係を及ぼすの

である、故に平生被服は叮嚀に疊みて、背囊や帽と共に棚の上に正しく整頓し、靴、雜具袋、脚絆、革帶等は棚の下に正しく掛けて置く、又襦袢、袴下、枕覆、敷布其他の衣類は、時々洗濯を施し毎土曜日の午後清潔檢査を行ふのである、絨衣袴並に第二種帽は刷毛もて能く塵埃を拂ひ、鈕は眞鍮磨もあ磨きあげ曇りのない樣に光らして着用するのである、凡て被服の小破綻は各兵卒が自ら修理を加へ其の甚敷大なるものは給養係の下士に修理を申立て縫工の手で修理する事となつて居る、是等は平生の事であるが、是れ迄の觀兵式其他祝典儀式等の場合には正裝であるから、平生棚上に整頓してある品は用ひぬので、事なき時には聯大隊の被服倉庫內に納められてある第一裝服や第一種帽其他の裝具を、被服員から渡され各中隊の給養係下士は之を受領して各兵に交附すると云ふ順序で仲々大繁忙を極めるのである、今回の凱旋觀兵式には前に述べた通り一般改良服着用と云ふ事であるから一般軍裝である。

◎正裝と軍裝

軍人の一般正裝を着用す可き場合は新年、三大節（新年宴會、紀元節、天長節）歲暮參賀、天機伺其他廉ありて拜謁の爲め參內するとき、陸軍始、靖國神社大祭、觀兵式又は儀仗の爲め出場するとき、任官、叙位、叙勳、條例規則


沖原中將

等に於て明文ある場合、一般大禮服着用の場合、自家の賀儀葬祭（下士以下に在ては親族の賀儀葬祭にも亦之を用ゆ）等である、又軍裝を着用する場合は戰時出征、非常出兵、戒嚴令、軍隊諸勤務、衞戍勤務、週番勤務（將校に限る）陸海軍聯合大演習、機動演習、廉ある外野演習等であるが本年四月十三日陸達第三十號を以て陸軍服裝規則中左の通り改正されたのである、第四條に左の一項を加ふ。

觀兵式又は儀仗服務の時又は軍隊靖國神社參拜の時にも軍裝着用せしむる事を得、

將校が正裝の着裝は第一種帽に前立を裝し正衣袴を着し、肩章を着け、正衣の上に刀を佩び、飾帶を締め、刀には正緒を附し、白色の下襟、同手套を用ひ、黑塗の靴を穿つのである、此の服裝では如何なる場合と雖も、騎兵科將校は長靴を穿ち、其他は總て短靴を穿つ事と規定されて居る、但し野戰砲兵及輜重兵隊附將校の隊伍に列する場合は短袴、長靴を穿つ事となつて居る、下士以下の正裝は第一種帽に前立を裝し、絨衣袴を着し、白色の下襟を用ゆ、此の服裝は各兵種に因つて自然區別がある乃ち左記の如くである。

一、憲兵の下士及上等兵は刀を佩ひ、半長靴を袴上に穿ち、警察勤務に服する者は銃を拳携帶するのである、

二、憲兵を除く外は何れの兵種を問はず、曹長は皆刀を佩ひ、歩兵、要塞砲兵、工兵では短靴を穿ち、脚袢を袴の下に着し、騎兵では長靴を穿ち、野戰砲兵及輜重兵では半長靴を袴の上に穿つのである、

三、步兵、要塞砲兵、工兵の軍曹、伍長及兵卒は革帶を締め、銃劍を帶び、短靴を穿ち、脚袢を袴の下に着す、而して隊伍に列する者は背囊を負ひ、彈藥盒を附着し、銃を携持す、但し背囊には外套を蹄鐵狀に附着す、又步兵、要塞砲兵、工兵（携帶器具を携帶する者に限る）は其携帶器具を束裝するのである、

四、騎兵の軍曹、伍長及兵卒は刀を佩ひ、長靴を穿つ、隊伍に列する者は鎗又は騎銃を携持す、又騎銃を携持する者は彈藥盒を附着するのである、

五、野戰砲兵の軍曹、伍長及兵卒は砲兵刀を佩ひ、半長靴を袴の上に穿つ、隊伍に列するとき徒步の者は背囊を負ひ（場合に因りては背囊及外套を前車に附着する事あるべし）外套を蹄鐵狀に附着するは步兵と異なる事がない、

六、輜重兵の軍曹、伍長及兵卒は刀（輸卒は徒步刀）を佩ひ、半長靴を袴の上に（輸卒は脚袢を袴の下に着し）穿つゝ而して兵卒の隊伍に列する者は彈藥盒を附着し、騎銃を携持す（輸卒は背囊を負ひ、外套を附着する事步兵と同一である）

七、衞生部、經理部及軍樂部の下士兵卒は總て徒步刀を佩ひ、短靴を穿ち、脚袢を袴の下に着用するのである、

將校が軍裝の着裝は第一種帽を着するのが正則であるが、時宜に因つては第二種帽を用ゆる事が出來る、軍衣袴を着し（本年四月十三日陸達第三十號を以て陸軍服裝規則中改正せられ將官同相當官にして佐官以下の各級將校と會同する場合に於ては通常禮裝及軍裝に限り茶褐色制服を用ゆるものである）、刀（劍）を佩び、刀緒（劍緒）を附し、白色の手套、同色の下襟を用ひ、乘馬本分の者は必ず短袴長靴を穿ち、其他の者は短靴を穿ち、脚絆を着用す、而して乘馬本分にあらざる隊附の尉官は背囊を負ふのが法である、但し週番及衞戍巡察等の如きは時宜に因り脚絆を着せず、背囊を負はざるも妨げない事となつて居る、背囊を負ふ者は之に雨覆又は夏外套を附着するが、之を負はぬ者は雨覆又は夏外套を巻き左肩より右脇に掛けるが法である但し時宜に因り之を背囊に附着せず、又肩に掛けなくとも宜いのだ、下士及兵卒の軍裝では正裝の着裝で左に掲ぐるものを取捨するのが異なつて居る、


坂井中將

一、帽に前立を裝せず、又時宜に因りては第二種帽を用ゆる事が出來る、
二、水筒を携帶する、
三、步兵、工兵、要塞砲兵に在つては雜囊を携帶する、
四、徒步で隊外の者は總て背囊を負ふのである、
五、背囊を負ふ者は之に飯盒及豫備靴を附着す、又時宜に因りては毛布を附着する事もある、
六、脚袢を着する者は之を袴の上にするのである、

如何に炎暑の際と雖も正裝の時には夏衣を着用する事が出來ぬ、然し軍裝の場合は六月一日より九月の盡日迄に限り時宜に因つて夏衣を着用する事が出來る、但し夏衣は着用する時は必ず夏袴を用ゆべきものである、又夏袴は炎暑の際に着用するもので、何れの服裝でも袴に代用する事が出來る、外套は何れの服裝を論せず、雨雪天の時か又は防寒用として室外で着用するもので、軍裝では觀兵式や其他儀式の場所並に上官の居室は着用する事が出來

ぬ、雨覆は外套の上に眞用するが普通であるが、時宜に依りては雨覆のみを着用しても差支ない事になつて居る、顧紐は正裝、軍裝を問はず、隊伍に列する時は必ず用ゐなければならぬ、其他の場合は各自の便宜に從つて宜いのである、日覆は炎暑の際軍裝にして第二種帽を着する時に用ゆるのであるが第一種帽の時には用ひぬ、勳章並に從軍記章は何れの服裝でも佩用して差支へ無いが、只大勳位、勳一等及功一級で菊花大綬章、旭日大綬章、勳一等瑞寶章又は功一級章等は正裝の時に佩用するものであるが、軍裝の時には其副章ばかり佩用すべきものである。

◎勳章

我邦で勳章の規定が始つたのは明治八年二月である、天皇陛下の思召にて功績並に功勞ある者に賜はんが爲めに制定されたものである、此は勳等に應ずる勳章で其此の詔勅は左記の如くである、

朕惟フニ、凡ソ國家ニ功ヲ立テ績ヲ顯ス者、宜ク之ヲ褒賞シ以テ之ニ酬ユベシ、依テ勳等勳章ノ典ヲ定メ、人々ヲシテ寵異表彰スル所アルヲ知ラシメントス、汝有司其斯旨ヲ體セヨ

勳等勳章

勳等ハ勳積及功勞アル者ヲ賞スル爲ニ設クル所ノ階級ニシテ、位階ト異ナル故ニ、各種ノ勳章ヲ佩用セシム

勳等ヲ分ツテ八級トナス


上田中將

茲に初めて我帝國の陸海軍人は其の勳積と功勞とに依て、其の勳等に應ずる勳章を拜授して、各自其胸間に最も名譽ある光輝を加ふる事となつたのである、而して此の勳位に叙せらる可き旨は、第一勳勞、第二勳功、第三殊勳此の三種の何れかに依る事で、勳勞と稱するのは全く平時のものであつて、勳功と云ふのは平時戰を問はない、勇烈忠義の所業に依り又は軍人の模範となり、其の美名を賞賛せらるる者、内外を論せず四回の戰役に從事する者、又は滿三年以上戰地に在る者、要衝の敵に當り先登して功を立てたる者、敵數人を殪して其の功昭明なる者、對敵中痍創を被り勳位に叙すべき理由ある者等である、又殊勳と稱するは敵の隊旗を奪ひたる者、長官の危急を極し其功を立てたる者、敵將を殪し或は捕獲せし者、敵中を通過して使命を全ふせし者、勇敢忠烈の所爲に依り全軍の利益を得る者等である、而して明治二十三年迄で勳章は旭日章、瑞寶章、寶冠章（婦人の勳勞ある者に賜ふ）の三種のみであつた然るに明治二十三年二月十一日紀元節に際して下は更に金鵄勳章の制を新に定めさせ玉ひ、武功拔群のに授けらるゝ事となつた、其時の詔勅は左記の如くである、

朕惟ルニ
神武天皇皇業ヲ恢弘シ、繼承シテ朕ニ及ベリ、今ヤ

ニ登極紀元ヲ算スレバ二千五百五十年ニ達セリ朕此ノ期ニ際シ
天皇戡定ノ故事ニ徴シ、金鵄勲章ヲ創設シ、將來武功抜群ノ者ニ授與シ、永ク
天皇ノ威烈ヲ光ニシ、以テ其忠勇ヲ奬勵セントス、汝衆庶此旨ヲ體セヨ

誠に大御心の程は畏しとも畏い事で、我々草莽の微臣等が斯く申も恐れ多い事であるが、此が爲めに我が軍人等は如何に勇んで軍務に服するであらう、決して自己の胸間に金鵄勲章を飾らんとする虚榮心から勇むのでは無く、斯く迄も我々微臣等が些少の武功に大御心を加へ玉ふかと其深き御聖德の程に更に百層倍の忠精を抽んでゝ以て限り無き御聖恩の萬分の一にも酬い奉らんと勇むので、實に此金鵄勲章の御制定は日清、日露の兩戰役に至大なる無形の勢力を與へたに違がない、而して金鵄勲章叙賜條例中重要なる個所を擧ぐれば左の如くである、


三好中將

第一條　金鵄勲章を武功抜群なる者に叙賜す
第二條　將言の初叙は功三級とし、武功を累ぬるに從ひ逐次進級せしむ
第三條　佐官の初叙は功四級とし、尉官の初叙は功五級とす、武功を累ぬるに從ひ逐次進級せしめ、佐官は功二級、尉官は功三級に至るを得、
第四條　准士官下士及兵卒の初叙は功七級とす、武功を累ぬに從ひ逐次進級せしめ、准士官下士は功五級、兵卒は功六級に至るを得、
第五條　陸軍見習士官は尉官に準じて擬叙す
第六條　將校相當官及軍屬は將校若くは下士に準じて叙賜す
第七條　戰役間武功常に卓越して優賞すべしと論定したる者、又は重要の任に方り武功抜群なる者は初叙の例に依らず一等上級に叙賜する事あるべし

金鵄勲章の佩用方は左の如くである、
功一級章　は大綬を以て左肩より右脇に垂れ、其副章たる功二級を左肋に佩ぶのである、
功二級章　は右肋に佩び、其副章たる功三級章を中綬もて喉下に佩ぶのである、
功三級章　は中綬を以て喉下に佩ぶのである、
功四級章　並に以下各級章は小綬を以て左肋に佩ぶのである、

尚ほ其年金額は左の如しである、

功一級	千五百圓
功二級	千圓
功三級	七百圓
功四級	五百圓
功五級	三百圓
功六級	二百圓
功七級	百圓

年金受領者死歿した場合には、仍ほ一年間だけ其遺族に[illegible]るのである。

旭日章、瑞寶章は何れも勲一等より勲八等に分たれて居る、其佩用方は左の如くである。

大勲位菊花章は頸飾を以て喉下に佩び、其副章を左肋に佩ぶ、大綬章を以て佩びる時は、右肩より左肩へ垂れ、其副章は左肋に佩ぶ、菊花章を賜はつた者は亦旭日桐花大綬章、瑞寶一等章をも併せ佩びる事が出來る、

勲一等旭日桐花章
勲一等旭日章
勲一等瑞寶章　｝大綬を以て右肩より左脇に垂れ、其副章を左肋に佩ぶ
勲二等旭日章は右肋に佩び、其副章を中綬にて喉下に佩ぶ、
勲二等瑞寶章は左肋に佩ぶ、
勲三等旭日章
勲三等瑞寶章　｝は中綬を以て喉下に佩ぶ、
勲四等以下各章は其旭日章と瑞寶章と將た桐葉章とを問はず、皆小綬を以て左肋に佩ぶものである、

勲章には更に各種の略綬がある、大概曲尺徑五六分以下の大さで、其綬と同色の小形記章である、通常禮服着の時左襟見返鈕孔に掛て佩びるもので、二個以上の勲章を有する者は、各其の綬と同色に編製して數個合併のものを製して佩びる事が出來るものである、勲章は左の場合には還納せなければならぬ、勲等上進し同種の上級勲章を受たる時、其下級の勲章は賞勲局に還納す、左記の如き者ありたる時は勲章並に年金を褫奪されるものである、

重罪輕罪の刑に處せられたる者
其の所犯の情狀に依りては輕禁錮以下の刑に處せられたる者
賭博犯の處分を受けたる者
懲戒令及免黜條例に依り免官せられたる者
素行修まらず帶勲者たるの面目を汚す者


安藤中將

若し以上の者が外國勲章を持て居る時には、其佩用免許狀を沒收するものである。

明治三十七八年戰役に於ける武功に就ては賞勲局に於て目下夫々審査中であるが、仄かに承はり及ぶところに依れば天皇陛下には先頃武職にあらせ給ふ、某殿下が御參內あらせたる折柄一昨年當今の戰況御追懷の御物語りより、一般癈兵及戰死病歿軍人、軍屬、遺族扶助に關する實況の御下聞に及ばせられ、更に海陸軍下士卒の武功に對する恩賞の如きは多數の者に對して、一時に之を行はんとせば、自然の結果として其調査に多くの時日を要し或は僅か一二名の爲め數百千名への行賞を遲延せしむるが如きこと無きに非らざるが故に、假令十名百名宛に對してなりとも調査の結了する隨つて、幾回にも分割して順次に行賞し以て一日も早く彼等を滿足せしむるこそ肝要なれ、當局諸官亦勿論此の方針に依りて調査を進め居る事なる可し云云の御諚さへありしやにて、之を傳へ承はれる者は孰れも一兵卒の身上にまで大御心を注がせ給ふ御聖恩の有り難きに感泣せざるはなしと云ふ事である、

戰場活劇

日露兩雄決鬪奇談

春浪漁史

上　露軍中第一の劍客

近頃露國の一新聞は『兩雄決鬪奇譚』と題し、日露戰爭中餘り知られなかつた、一場の不思議なる活劇を公にした。時は旅順口が未だ陷落せず、一隊の露兵が必死と二龍山砲壘を守つて居つた頃の事だ、乃木軍は日夜に押寄せて來る、露軍は力を盡して、幾度之れを擊滅したかも知れぬが、死を恐れざる日本兵は、擊てども射れども少しも屈せず、二龍山陷落の日の如き、激鬪四十八時間後の、日本兵は遂に砲壘直下に蟻集し、露兵の瞰射を事ともせず、味方の死骸を踏越え／＼、遂に萬歲を唱へて砲壘を占領した。露兵も隨分勇敢に戰つたが、殘兵少くなつたので、今は早や之れ迄なりと、露軍中第一の劍客と云はるゝ、ウォルバス大佐自ら殿軍となり、隊を亂さず、徐々として退却を始めた。



中村中將

スルト此時、砲壘を占領せし日本軍の中より、明々晃々たる日本刀を振りかざし、疾風の如く追ふて來た一人の大尉がある、一聲高く、

『其處に見ゆるは、音に名高きウォルバス大佐に非ずや、我は日本軍の渡邊大尉なり、イザ尋常に一刀勝負を決せずや。』と叫ぶ、其健氣なる振舞に、ウォルバス大佐も踏止まり、部下の兵士に向ひ、

『勝負中は決して渡邊大尉に鐵砲を向けてはならぬ。』と命じ、右手に提げたる血刀を振りかざして、

『渡邊大尉、然らば尋常に勝負を決せん。』と、二人は他を交へず、一上一下と斬結ぶこと六十餘合、何時勝負の決すべしとも見えなかつた折から、忽ち日本軍の方より數聲の喇叭鳴つて、兵を收むべき命令が下つたので、渡邊大尉は一歩身を引いて刀を青眼に構え『ウォルバス大佐、僕には退却の命令が下つた、遺憾ながら勝負は後日に讓らん。』と云へば、大佐も刀を引いて、

『よろしい、然らば勝負は後日に――。』と、二人は凝乎と顏を見合はせて、其儘左右に別れたのである。

下　火花を散らす激鬪

露軍第一の劍客ウォルバス大佐は、斯くて自分の本陣へ引揚げ、頻りに渡邊大尉の武勇を賞讃して居ると、それから一週間ほど經た或朝の事だ、一名の日本兵は休戰旗を掲げて露軍の陣地に來り、日本軍旅團長よりの書面を露軍旅團長に渡した、露軍旅團長は何事かと披いて見ると、中には次の如き事が書いてあつた。

『日本軍の渡邊大尉は、過日貴軍のウォルバス大佐と立合つたが、未だ勝負の決せざる内に物別れとなつた、渡邊大尉は如何にも之れを遺憾と存ずるにより、明日正午場所を定めて、二人眞劍勝負をしたく思ふが何うだと』云ふのである。

露軍旅團長は驚きながらも、ウォルバス大佐を呼んで、此書面を示めすと、大佐は躍上つて喜び、

『愉快々々、我は露軍中第一と云はるゝ劍客なり、此決鬪の來りしを幸ひ、明日は彼の日本武士を眞二つに斬倒し、我が露軍の士氣を鼓舞して呉れん。』と、早速決鬪條件を定めて快諾した。



藤井少將

その決鬪條件は、日は明日の正午、場所は敵味方の中間に横はれる小丘の上、爾して決鬪の始まつてから終る迄の間は、此小丘附近を一時休戰地と認める事、斯く相談一決して、さて愈よ翌日の正午になると、休戰旗は先づ日本軍の占領せる壘上に飜へり、續いて露軍の陣地にも飜へり、渡邊大尉とウォルバス大佐とは、各々立會人を引連れて、約束の決鬪場に來着した。二人は丘上に相會すると、微笑を含んで握手を爲し、互に英語で一應の挨拶を終つた後、双方上衣を脱ぎ帽子を取つて、身仕度を整へ、

『渡邊大尉！』

『ウォルバス大佐！』

と、互に呼び交してツカ／＼と進み寄り、夏猶ほ寒き軍刀スラリと拔いて身構えた樣は、龍虎雲を起し、風を呼んで鬪ふが如く、見る者思はず片唾を飲んだのである。

折から遙か彼方二百三高地方面では、日本軍が又た／＼猛烈なる攻撃を始めたと覺しく、砲聲殷々として天地を震はす、渡邊大尉は之れを聽いて莞爾と笑ひ、

『ウォルバス大佐！　然らば御免！』と云ふより早く、電

光石火の如く斬掛れば、ウォルバス大佐は、『心得たり。』と、ハッシ！と鍔元で受留めた時には、紫電の如き火花がパッと散つた。

劍と劍とガッシと合つたまゝ睨合ふこと少時、如何なる隙を見出したか、ウォルバス大佐は『オッ！』と喚き、劍を引くより早く斬付る、渡邊大尉は飛鳥の如く身を躲はしたが、其遑もなく少しく肩に傷を負ひ、鮮血サッと迸る、得たり賢しと、それより大佐は鬼神の荒るゝが如く、右より突き、左より突き、正面より斬込み、側面より拂ひ、息をも吐かせず攻立る、流石は露軍中第一の劍客と云はるゝ程あつて、大尉は屢ば危き塲合に迫つたが、彼は少しも焦燥らず、少しも驚かず勝負を最後の一擊に決せんとするものゝ如く、平然として防禦の地位に立つて居ると、其内に果然大佐は疲れて來た、見るより大尉は時こそ來れりと、勇躍一番、攻守忽ち一變して、斬るかと見れば突掀り、突くかと見れば斬下し、猛然雷の如く叫ぶと見る間に、名刀一閃、大佐は遂に心臓を貫かれて斃れた。

日本武士渡邊大尉は、露軍中第一の劍客ウォルバス大佐に勝つたのである、然し大尉は少しも誇る色が無い、靜かに血刀押拭ひ、地上に斃れたる大佐の死骸に目禮して、悠々と本陣に引揚げたのである。（終）



井口少將

△陣中雜感　　内藤陸軍少將作

ものうきは蝎に床虫のみに蠅
風のほこりに雨のどろ道
悲しきはいさをも人にますらをの
たけき屍を茶毘となす時
うれしきは國のおとづれ遞送に
敵の陣地を拔きし萬歳
心地よきは樹陰の晝寢夜半の涼
瓶風呂なれどたまの入浴
たのしきは涼しき月き夕庭に
下手や上手の遊藝のひま

△旅順の夕ぐれ（替歌）　　多田騎兵大尉作

『夕ぐれに眺め見わたす旅順口。月に風情の柳樹屯。帆かけたジャンクが見えるぞへ。ソレ驢馬が嘶く銃が鳴る、旅順に戰があるわいな。』

日露戰爭　驍勇武烈譚

慨世散史

◎日本武士の典型

乃木大將は眞に日本武士の典型である、青史に傳へて、萬世不滅の好鑑とすべき事も澤山あるが、中にも左に記す逸話の如き、武士の心を知る人なら、之れを聞いて泣かずには居られぬ。

大將は出征の命令を受け、その途中廣島に滯在して居ると、忽ち飛電は來つて、長男勝典氏が南山にて戰死した報に接した、けれど大將は色をも動かさず、

『軍人が戰死するのは當然では無いか。』と雄風凛々、旅順攻圍軍を率ゐて遼東半島に渡られた。

勝典氏の戰死後、大將の愛兒は次男の保典氏たゞ一人である、當時保典氏は大將と同じく攻圍軍中にあり、第一師團長伏見宮殿下の麾下に屬して一方の小隊長であつたが、殿下には勝典氏の戰死を聞かれ、一人殘れる保典氏にも萬一の事があつては、乃木大將の心の中如何ばかりと思召され、仁慈の御心を以て保典氏をば、第一師團の衞兵長に轉補せられた。



一戸少將

保典氏は殿下の優渥ある思召をば深く感泣したのである、けれど比較的安全なる地位に在つて、遙かに大砲小銃の音のみを聽いて居るのは煩悶しくてならぬ、何うか劍を提て戰線に立つ事の出來る樣にと祈つて居る内、彼の鬼將軍と云はれた松村中將が伏見宮殿下に代り、第一師團長に榮轉せられたので、保典氏は毎日の樣に松村中將に迫り、『何うか早く戰線に出して下さい、後方勤務ばかりやつて居ると、手も足も腐つて仕舞ふ樣です。』と、手を合はさぬばかりにして願ふので、磊落なる松村中將は微笑を浮べ、『それでは戰線に出して遣らう、しつかり働いて見るさ。』と、遂に保典氏をば、後備第一旅團の副官に轉補されたのである。

其頃は恰度、音に名高き二〇三高地攻擊の最中だ、保典氏の屬せし第一旅團司令部の如きは、敵堡に最も近き高地斜面の掩蓋内にあつて、危險も甚しければ、寒氣も實に堪

え難い、餘り寒氣の激しいので、一日保典氏は從卒を父なる乃木大將の陣中に送り、

『何うか毛皮を一枚頂戴致したいものです。』と願つた。スルト大將は默念と考へて居られたが、使者に來りし從卒に向ひ、

『歸つて爾う云ふが宜い、寒氣は士官も兵卒も同じ事だ、一同毛皮を着る事の出來る樣になつたら、云つてよこさずとも此父から送つて遣る、自分の身を思ふと同じく、兵卒の事も思つて遣らねばならぬ。』と。

使者は歸つて此事を復命すると、保典氏は首を垂れて、

『嗚呼俺は誤つて居つた。』と、深く父君の言に感佩された相である。

乃木大將とて其愛兒の爲に、何んで一枚の毛皮を惜まうや、眞に與へたきは山々であらうが、之れを與へぬのは與へるにも勝る慈愛である、日本武士の精神は、常に此樣な場合に現はれるのだ。

然るにそれから數日經て、保典氏は遂に名譽の戰死を遂げられた。

この報告は第一師團司令部から、軍司令部の白井參謀の許



大迫少將

に届いた、白井參謀は此悲むべき出來事を、乃木大將に語らねばならぬ辛い役目に當つたのである、其處で思切つて大將の前に出たが、その顏を見ると、何うしても此悲報を傳へる勇氣が出ぬ、詮方なく他の報告を先にして居ると、折から洋燈の油は殘り少なになつて、火は今にも消えさうに見える、大將は從卒を呼んで、洋燈に油を注いで來いと命じた、從卒は洋燈を持つて室を出で、迹は眞暗となつたので、白井參謀は此間にと聲を潛め、

『閣下、御次男乃木少尉には、本日名譽の戰死を遂げられました。』と告げた、如何に武勇の大將と雖も、此報告を耳にしては、必ず驚かれるであらうと思ひ設けて居つたのだ、然るに大將は敢て驚いた樣子も無い、暗中聲あり、たゞ一言、

『ウン、爾か。』と云はれたのみである。

白井參謀は却つて胸迫り、默念として首を垂れて居ると、其内に從卒は再び洋燈を携えて來たので、ひそかに眼を上げて大將の顏を見るに、雄風凜々たる姿は平時の如く、眼にも唇にも些かの憂色もなく、輝く洋燈の下に凝乎と地圖を見詰めて、

『白井參謀、二〇三高地は未だ落ちぬかなア。』と云はれた

時には、餘りの壯烈に打たれて、白井參謀は思はず兩眼に涙を浮べた相である。

◎乃木大將の熱涙

乃木大將の驍勇武烈は前に述べた通りだ、然し大將は決して涙の無い人では無い、その愛兒の戰死してから數十日經て、二〇三高地は遂に我手に落ち、直ちに應急工事を施して、渡邊大佐が之れを守つて居る、大佐は此激戰に後頭部に負傷したが少しも屈せず繃帶を纏ふて風雪の中に立ち、頻りに部下を勵まして對戰準備をして居つた、折柄乃木大將が巡視して來たので、大佐は恭しく出で迎へると、大將は滿面に喜色を湛えて大佐の手を執り、

『どうも御苦勞だつた。』と謝意を表されたが、話はそれから夫れへと進んで、大佐は彈丸に破壞されたる砲壘を見廻はし、

『閣下、この砲壘を取る爲には、隨分立派な兵士を澤山殺しました。』と語りかけると、大將は俄かに聲を曇らし、

『嗚呼もう其事は云ふて呉れるな、云ふて呉れるな、俺は胸が裂ける樣だ。』と、砲壘の一角に眼を外されたが、その兩眼には熱涙が浮んで居つたのである、實に大將は世にも稀なる武強漢であるが、同時に熱情の人である、自分の爲には泣かぬが、友の爲には泣く、一家の爲には泣かぬが、一國の爲には泣く、之れぞ眞に日本武士の典型と云ふものであらう。



上原少將

◎名譽の聯隊旗

今回の凱旋大觀兵式に、全國各軍隊より集まりし一百餘旒の聯隊旗、いづれも驍勇名譽の歴史を有して居るが、中にも最も悲壯武烈の歴史を有して居るのは、大島第九師團長の指揮に屬して、旅順背面攻擊の難局に當りし、歩兵第七聯隊の聯隊旗であらう。

この聯隊旗は初め大内大佐を聯隊長として、旅順蟠龍山の攻陷より二龍山の攻擊に移り、激鬪血戰數十回、其間に三人の聯隊長は名譽の戰死を遂げ、大隊長、中隊長も交る交戰死戰傷して、中隊長以上にて、今日迄で殘れる者は僅かに二名のみ、二龍山攻擊中の或時の如き、三日三夜の間敵砲火の中に包まれて、聯隊旗手先づ斃れ、下士も斃れ、護衞の兵士も殆んど斃れ、唯だ旗竿のみ戰線に直立して、

大いに士氣を振はした事もある、斯かる有樣になつても、此聯隊旗は一度も敵の手に觸れず、旅順陷落後は更に沙河奉天の大會戰に參加して、此處にても拔群の武功を奏したので、前後四回まで軍司令官の感狀を得たが、其時は何時も聯隊長が戰死を遂げて居るので、此聯隊旗が聯隊長及び聯隊を代表して感狀を受領したと云ふ事である、實に萬世不滅の名譽を有する聯隊旗と云はねばならぬ。

◎嗚呼軍神橘中佐

陸軍步兵中佐橘周太氏は、日頃から日本武士の典型と云はれ、死しては「軍神」と謳はれた名譽の軍人である。

時は明治三十七年八月三十日、遼陽大戰の最中である、實に遼陽大戰は、帝國興廢の分るゝ一大決戰と云つても可い、橘中佐は左翼軍右縱隊に屬し、部下の勇士を率ゐて、敵の首力陣地なる首山堡の堅壘に押寄せた、此處を拔かれては敵軍壞敗する他は無いので、露兵もなか〳〵頑强に低抗し、砲聲轟々、爆彈縱橫に飛び、勝敗何時決すべしとも見えなかつたので、我兵も少なからず苦戰の極、遂に一大夜襲を決行する事になつた、其時先登部隊の隊長となつたのは、實に橘中佐である。



戰死橘中佐

今は眞夜半の二時過ぎ、殘月青く光つて、物凄き夜景何んと云はん方も無い、中佐の一隊は鳴音を潛めて敵壘に近づくや、忽ち突貫の聲雷の如く、眞一文字に敵壘に肉薄したけれど敵壘は高く、塹壕は深く、加ふるに待設けたる敵兵は、

『それ、日本兵が來りしぞ。』と、大砲小銃を列べて擊放す我兵如何に勇と雖も、此堅固なる防備に會つては容易に進む事が出來ず、暫時打惱まされて居ると、斯くと見るより橘中佐は、憤然として身を躍らせ、

『堅壘塹壕何かあらん、日本男兒の前に敵やあるべき。』と、大刀提げて塹壕內に飛込み、手向ふ敵を斬ること瞬間に三四人、突擊猛進して遂に敵壘を陷れた、其勇ましき振舞は、殆んど人間業とは見えなかつた。

中佐は威風凛々として壘を守つて居る。然し此時敵は大勢、味方は少數、兎角する間に露將は、數千の大兵を提げて、雲霞の如く逆襲して來た、

『物々しき敵の振舞!』と、中佐は部下を指揮して必死と防戰したが、何を云ふにも敵は我に數十倍し、彈丸の來る事雨よりも激しく、我軍は全く死地に落ち、中佐は見る間

に五個の彈丸を受けた、けれど中佐は少しも屈せず、怒髮天を衝き、勵聲叱咤して、

『退くな〳〵、一步を退くな。』と號令する內、猶も飛來る彈丸は劍を折り、軍服を裂き、全身完膚もなき有樣となつた。

之れを見て驅けつて來たのは、日頃から中佐を慈母の如く慕へる內田軍曹である、中佐の腕に縋つて、

『大隊長殿、どうか暫時彈丸をお避け下さい。』と、中佐の身を思ふて願つたが、中佐は儼然として動かず、

『オ、內田軍曹か、此期に臨んでは唯だ潔く討死するのみ、今日は八月三十日、畏多くも東宮殿下御生誕の日である、此慶日に當り、余は不肖にして部下の大半を殺した殿下に對しても實に恐懼の至りである、且つ一旦部下の忠勇なる手により占領せし砲壘を、再び敵手に奪はれては、何んの面目あつて生きて居る事が出來やう、內田軍曹!余は深く足下の忠誠に感ずる、然し此塲に臨んでは他に道なし、潔く余と枕を並べて死んで吳れよ。』と、斯く云ひつつ、中佐は立つて一聲高く、

『天皇陛下萬歲!帝國陸軍萬歲!』と叫びし時、又もや



小原少將

一彈は風を切つて飛來り、中佐の胸部を貫いて中佐は地に倒れた、

內田軍曹は背後より抱起し、

『大隊長殿!大隊長殿!』と呼べば、中佐は微かに眼を見開き、

『あゝ今日は八月三十日、東宮殿下の御誕生日、余は此處に潔く討死する、本懷である、本懷である、何うか余の顏を東の方に向けよ――。』と、言も終らず一彈は中佐の身邊に破裂し、中佐と軍曹とは枕を並べて討死したのである。

嗚呼軍神橘中佐は遂に戰死した、之れを聞く我勇士は一人として惜まぬ者はなく、中佐の部下は一時恰も喪心せる如く、中佐の名を繰返して慟哭したのである。

◎武運强き一兵士

第二師團の一等卒に、曾田榮十郎氏と云ふ勇士がある、瞬間に敵兵十六人を斬倒して、雷名を天下に轟かした、彼の吉井少尉の部下であるが、摩天嶺逆襲の時、曾田一等卒は恰度哨兵に出て居つた、時は明治三十七年七月四日、霧一面に立こめて居る午前三時頃の事だ、曾田氏は敵陣に近く、摩

天嶺の中腹に前哨を張つて居ると、忽ち一隊の敵兵が逆襲して來た。

暗さは暗し、霧が一面に閉ざして居るので、何れが敵やら味方やら分らず樣子を窺つて居ると、不意に左右から斬掛つて來た二名の露兵がある、心得たりと銃劍を揮つて渡り合ひ、見る間に其二人を突倒したが、續いて押寄せ來つた十四五名の露兵に取圍まれ、暫し必死と闘つて居る内に、横合から來た一人の露兵は、エイと叫んで鋭き刄を、曾田氏の咽喉から肩へと突刺した、之には流石の曾田氏も叶はず『無念！』と叫んで、口から血を吐いて其場に倒れた斯くと見るより露兵共は、最う全く死んだ者と思ひ、曾田氏の銃劍を奪つてスタ〳〵何處かへ行つて仕舞つた。

實際曾田氏は一時絶息したのだが、それから暫くして正氣に復つて見ると、自分は草原の上に横はつて居る、ハテ何うした事かとムク〳〵起上ると、此時又た二人の露兵がやつて來たので、直ちに闘ふ積りで銃劍を搜したが、銃劍は既に露兵に持去られたので其邊には無い、仕方が無いから再び草原の上に倒れて死んだ眞似をして居ると、其處へ驅つて來た二人の露兵は、曾田氏の樣子を見何か大聲に罵り叫びながら、無法にも長い劍を以て股を突刺し、痛さに堪らず曾田氏の飛起きた處を捕虜とした。



內山少將

曾田氏は無念で堪らぬが、手には武器なく、其上重傷を負て居るから仕方が無い、彼等の爲すが儘に引立てられ行くと、摩天嶺の彼方の麓に近着いた頃、不意に又た側面から猛烈な射撃が起り、日本兵が押寄せて來た樣子なので、露兵共はコリヤ堪らぬと曾田氏を路傍に打捨て、散り〳〵ばら〳〵に逃げ失せた。

曾田氏は援兵の來る事を待て居つたが、數度の射撃の聽えた後は何んの物音もなく、再び遠方からは露兵の來さうな樣子なので此上又た敵に捕へられて憂目を見るよりは寧そ潔く死んだ方が宜いと思ひ、地上を這つて唯ある河岸まで來り、濁流目懸けて身を投げた。

然るに濁流は案外水が淺いので死ぬ事が出來ず、サテ何うしたものかと惘然河水に立つて居ると、其内に夜がほのぼのと明けて來た、夜が明けて東の空を望むと、又た氣が變つて來て、獨り心に思ふやう、二度迄で敵に突かれても死なず、河中に身を投げても未だ生きて居るのは、よく〳〵武運の強い爲だらう、よし然らば助かる丈け助かつて見やうと、それより河を這ひ上り、全身の痛みを怺へて、或は這ひ、或は轉び、小高い丘を二つ迄で越え、その三つ目の丘の麓まで來た時、忽ち背後に銃聲が聽えて、又た〳〵一隊の露兵が追うて來たので、彼は最う身體の痛みも何も忘れ、此上捕へられては堪るものかと、一目散に丘の頂に驅上つて見ると、此丘と相對せる彼方の丘の頂に、忽然として現はれた一個の將校がある、双眼鏡を眼に當てゝ此方を眺めて居るので、

『サア又た露兵だ、最う運の盡き——。』と曾田氏は力を落すと共に氣が遠くなつて地上に倒れた。

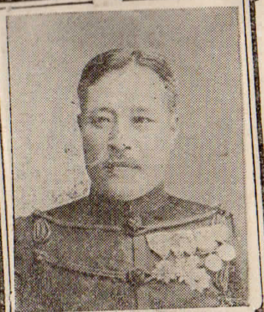
暫くすると何人か背後から抱き起し、

『コラ、曾田、しつかりせんか。』と云ふ聲が耳に入つたので、ハツと氣付いて眼を開けると、自分を抱き起して居るのは隊長吉井少尉であつた曾田氏は思はず躍上り、

『最う大丈夫だ、小隊長殿、萬歳々々。』

◎烈火の如き氣概

四門子方面で、我が騎兵斥候が敵の襲撃を受けた時、彈丸の爲に乘馬を斃され、其身も重傷を負ふて、騎兵伍長坂井五郎七氏は敵に捕へられた。



東條少將

其時伍長は氣絶して居つたが、漸く正氣に復つて見ると、其身は露國野戰病院の一室に横はり、側には露軍の一軍醫が居つて、今將に手當を施さうとする處なのだ。

見るより伍長は憤然として、

『止めて呉れ、止めて呉れ、俺は日本軍人だ、潔く戰死する事は知つて居るが、見苦しく捕虜となつて、敵の情を受ける事は知らん、此上は戰場で受けた傷により、此處で死ぬのを待て居るばかりだ。』と、何うしても治療を受ける事を承知せぬ。

軍醫は仕方が無いから、一時は其儘にして、やがて彼の寢入つた隙を窺ひ、知らぬ間にすつかり手當をした。

スルト程經て伍長は眼を醒ましたが、何時の間にか自分の身體に繃帶の卷いてあるのを見るより、火の如く怒つて寢臺の上に立上り、

『無禮者奴！ 日本男兒は、敵の情けを受けるものか。』體に卷かれたる繃帶をズタ〳〵に引裂き、近寄る軍醫や護卒を叱咤して、それより後は決して寢ねず、又た藥もまず飯も喰はず、泰然自若として寢臺の上に坐したまゝ、遂に其三日目に死んで仕舞つた相である。

今日文明の戰爭に於ては、重傷を負ふて敵の捕虜となり、赤十字旗の下に於て治療を受けるのは左程恥辱とするには足らぬ伍長は少し頑固に過ぎて居つた、然し其烈々たる氣慨は、眞に日本武士の鑑とすべきである。

◎致命傷を負ふて誰何す

徐家窩棚附近攻撃の時である、歩兵軍曹田邊久六氏は第三大隊副官及び書記の負傷した爲、書記代理となつて副官代理に隨ひ、砲火を冒してます〳〵猛進したが、彈丸の來る事雨の如く、一彈は副官代理の前頭部に破裂し、一隊殆んど斃れて、田邊軍曹亦た頭部及び胸部に重傷を受け、前後不覺の有樣となつた。處へ馬を飛ばして來つたのは、一傳令兵で、元來副官代理の圖嚢には重要書類の入つて居る爲め、大隊長の命令で其れを收拾に來たのである、傳令兵は馬を下つて、地上に倒れたる副官代理の腰から、將に圖嚢を取つて去らうとする。スルト其側に横はれる田邊軍曹は、今迄で全く死人の如く見えたのであるが、忽ちムクと起上り、一聲高く、『誰だッ。』と誰何した。



神尾少將

傳令兵は驚きながらも、『大隊長の命令で來た。』と告げると、軍曹は、『あゝ爾か。』と云つたが、此一言を名殘りとして、遂に他界の人となつたのである。

◎乃木少尉の形見の名刀

歩兵少尉渡邊信と云ふ人は、旅順攻圍軍の勇士である、海鼠山攻撃の時身に七彈を受けたが、武運芽出度く全治して其後似島俘虜收容所の委員となつた。然るに明治三十八年二月、旅順の降將フォーク及びニキーケン兩將軍を受取つて、似島收容所に向ひ護送中フォーク將軍は渡邊少尉に向ひ、痛く乃木大將の武勇を賞讃した後、『聞けば乃木大將には、今回の戰爭で二愛兒を喪はれた由、如何に武勇の大將と雖も、多少悲愛の感に打たれて居らる事であらう。』と云ふと、渡邊少尉は此一言に、思はず往時を回想して、兩將軍に向ひ次の如き壯烈なる談話を爲した。

去年五月二十七日、南山激戰の翌日である、僕は戰友乃木

勝典君が重傷を負ふたと聞き、直ちに馳せて野戰病院に赴いて見ると、昨日迄で荒駒の如く元氣よかりし乃木少尉も、重き負傷の爲に身體衰弱し、最早此世の人とは見えぬので、僕は一目見るより胸は一杯になり、湧き出づる涙を漸う押拭ひ、

『乃木君、乃木君、君との面會も最う今日限りかも知れんぞ、何か遺言があるなら聽いて置かう。』と云ふと、乃木少尉は忽ち眼を見開いて大喝一聲、

『馬鹿、何を云ふか、軍人が戰死するのは當然だ、今更何んの遺言があるものか。』と蒼白き顔に活氣を帶びて罵倒された、此罵倒を聽いて僕は更に胸が迫り、

『如何にも戰死は軍人の常である、然し軍人と雖も豈に木石ならんや、君には父母あり令弟あり、今此世を去るに臨み、何か言ひ遺す事は無いか。』と云ふと、流石の乃木少尉も默つて居つたが、やがて言葉靜にに、

『あゝ渡邊君、君の友情に向つては深く感謝を表する、然し僕は今更言ひ遺すべき事は更に無い、唯だ此場に臨んで遺憾に堪えぬのは、僕が出征の途に就く時、父上は僕に別盃を賜はつた上、此處にある此名刀を授けられ、勝典汝は此刀の折れるまで國敵と戰はねばならぬぞと云はれた、然るに僕は戰場に臨んで、未だ一敵兵も斬らぬ内に此重傷を負ふた、此儘死ぬのかと思ふと之が何より殘念である。』と、斯く云ひつゝ兩眼に熱涙を浮べ、

『渡邊君、然し今更何んと云つても仕方が無い、此刀は謹んで君に贈る、何うか君は僕に代つて、此刀で敵を斬つて斬つて斬り捲つて呉れよ。』と、此一言の終ると共に、勝典君は微笑を浮べて瞑目したのである。



依田少將

僕は勝典君の死體を脊負ひ、遥かに旅順方面を見渡す南山の絶頂に、その死體をば假りに埋葬したのである。

其後僕は勝典君の形見の名刀を腰に帶び、彼の海鼠山占領の時は敵中に斬つて入り、せめては勝典君の遺志を全うせんと、當るを幸ひ薙倒したので、遂に敵兵二名を斬伏せる事が出來た、僕は思はず叫んだ、

『實によく斬れる、よく斬れる、勝典君の英魂が此刀に宿つて居るのであらう。』と、斯く叫びつゝ猶も敵壘の方に突進せんとする時、續け樣に來る敵の七彈を受けて倒れた。數日間は無我夢中であつたが、漸く正氣に復つて見ると、僕は野戰病院の一室に收容されて居る、處へ訪ねて來たの

は、勝典君の令弟保典君であつた、嗚呼前には僕が勝典君の最後の床を訪づれ、今は其令弟に戰傷の慰問を受く、武士の運命ほど不思議なものは無い。

僕は保典君に會つて實に嬉しかつた、其處で令兄戰死の有樣から、其形見の名刀を與へられた事まで委しく語ると、保典君は感涙を浮べて聽いて居つたが、熱心に僕の手を握つて、

『渡邊君、君はよく兄の形見の名刀を以て敵を斬殺して下すつた、僕は地下の兄に代つて深く感謝します、僕も兄と同じく父上より授けられた名刀を帶びて居るから、及ばずながら生命のある限り國敵を斬倒す覺悟です。』と、それより種々の話をして別れたが、此別れこそ最後の別れとなつたので、保典君は其後間もなく二〇三高地の攻撃に名譽の戰死を遂げられた、僕は初めて此悲報に接した時、思はず胸を打つた、

『嗚呼保典君も亦た名譽の戰死を遂げられた、國家の爲とは云ひながら、二人の愛兒を喪つた乃木大將の心の中は如何ばかりであらう。』と、然るに其後大將が此悲報に接しながら、泰然自若として一絲亂れぬ態度を聞き、僕は更に胸を打たれ、泣かぬは泣くに勝ると云ふ、武士の辛い處を深く悟つたです。

以上語り終つて、捕虜二將軍の顔を見れば、フォーク將軍とニキーチン將軍とは、暗涙を浮べて眼と眼を見合せて居つた。


兒玉少將

◎涙をふるつて愛馬と別る

大孤山上陸軍の小隊長中尉浮須要氏は、斥候の重任を帶びて愛馬「橋立」に跨り、下士數名を率ゐて諸所を偵察し、任務を遂げて將に歸らうとすると、忽ち敵兵の襲撃を受け、中尉は左足を射られ、馬は腹部に彈丸を受けて進退谷まつた止む事を得ず馬を其處に殘し、這ふ樣にして本隊の方に歸らうとすると、馬は悲鳴を揚げて追ふて來る、畜生と雖も主人と別れるのを悲むかと、中尉は思はず胸迫つて立止まると、馬は直ぐ傍までやつて來てバッタリと倒れ、主人の顔を見上げては微かに嘶くのである。

中尉は哀れを催して其鬣を撫でゝ遣り、

『コレ橋立、別れが辛いか、然し其傷では最う歩く事は出來まい、俺は重大な任務を帶びて居るので、涙をふるつてお前に別れるぞ。』と、斯く云つて倒れし馬を見返り〳〵數町退却したが、何分もに足の痛みが激しいので、暫時木立の中に入つて姿を隠し、最う敵の追ふて來る樣子が無いから再び木立を出ると、愛馬「橋立」は何時の間にか又た中尉を追ふて來て、其姿を見るや嬉し相に嘶いて身を摺り寄せ、どうあつても別れまじき樣子を示すので、中尉は最早堪らず兩眼に涙を浮べ、

『オ、橋立、其樣に俺が懐かしいか、どうせ助からぬ命だが、そんなら本隊まで連れて歸つて遣らう。』と、親切にも轡を取つて本隊の方に向つたが、其途中又も、敵兵の襲撃を受け、愛馬は頭部を打貫かれて斃れ、中尉は漸く身を以て本隊に歸る事が出來たのである。

◎巨砲に跨つて死ず

旅順攻圍軍中に樫原十太郎氏と云ふ猛烈な伍長があつた、日頃から部下に向つて云ふに。

『乃公の戰死する時を見ろ、屹度大砲に跨つて死んで見せる。』と、聽く部下の兵士等は、まさか其樣な事が出來るものかと云つて居つた。


豐島少將

然るに東鷄冠山突撃の時だ、伍長は先頭偵察分隊長となつて撰拔兵十五名を率ゐ、頑強なる敵砲火を冒して壘上に迫り。

『サア此勢で砲臺内に斬込むのだ。』と勇んだが流石の精兵も之れには較や躊躇の色が見えたので、彼は大喝叱咤し。

『ヤイ、其樣な事で何うなるか、我に續け！』とばかり、疾風の如く敵砲臺内に突入し、殘兵三十六名ばかり斬つて斬掀り、一時此處を占領したので、彼は忽ち巨砲の砲身に跨り。

『萬歳！萬歳！』と大呼して居つたが、後續部隊盡く斃れて援助が全く絶えたので、間もなく敵の逆襲に遭ひ、砲身に跨つたまま彈丸を受けて死んだのである。

◎山本少將の戰死

日露戰爭中、日本將官にして戰死したのは、陸軍少將山本信行氏一人である、少將は實に驍勇武烈の人である、海鼠山奪取の時だ、少將は此方面攻撃の重任に當り、副官を隨へて戰線に現はれ、自ら眞先に立つて指揮して居る、彈丸はどん〳〵飛んで來るので、一大隊長少將の身の上を案じ。

『閣下、危險です、何うか最う少し後方へ。』と云へば、少將は微笑を浮べて、『何、出て居つても引込んで居つても、彈丸に中る時は中るものだ。』と、平然として猶も前進せんとする折から、忽ち一彈は少將の傍なる副官を斃した、少將は振返つて、『ア、殺られたか、殘念な事をした。』と云つたが、それでも臆する色はなく、其日一日戰線に身を現はして、夕刻幕營に歸つて來られた少將は、膝の下から鮮血が滴つて居る見るより大隊長は驚いて、『閣下、到頭負傷をなすつたぢやありませんか。』と云ふに少將は冷かに笑つて、『何、擦傷ぢや〳〵。』と云はれたが、其實彈丸は膝の下を貫通して居つたのである。斯く勇猛な將軍なので、負傷しても決して戰線を退かず、海鼠山を奪取した後は二百三高地の攻擊に着手し、『何んでも早くあの要害を落さねばならぬ。』と云ふので、自ら海鼠山の絶頂に突立ち、頻りに二百三高地の方を觀測して居つたが、遂に敵に狙擊され、其場に戰死されたのは實に殘念な事であつた。



落合少將

◎圖らず愛弟の墓に會す

栃木城戰爭の時だ、歩兵少尉矢田全勇氏は、太平嶺附近にて敵の逆襲に會ひ、奮闘力戰して敵兵數名を斃したが、遂に自分も其場に戰死したので、少尉の居ざる隊は、直ちに少尉の屍體を火葬にして其處に葬り、一尺ばかりの木の枝の半面を削り『陸軍歩兵少尉正八位矢田全勇之墓』と記して地の上に立て、其隊は猶も前進したのである。

處へ其後より來つた一砲兵小隊がある之れを率ゐて居るのは矢田砲兵少尉とて、前日此所に戰死せし全勇氏の令兄だ。矢田砲兵少尉は斯かる事とは知らず、受持の砲車を墓の直ぐ側に据え、其夜は何事も知らずに眠つたが、さて夜が明けて見ると、何か墓らしい物が立つて居るので、何人の墓かと近づいて見れば、其墓標には矢田全勇と知してある、此處で初めて令弟の戰死を知り、圖らずも其墓の前に立つた少尉の心の中は如何ばかりであつたらう、少尉は思はず暗涙を浮べ、『あゝ弟！お前も到頭戰死したのか。』と、携えたる水筒の水を墓に手向け、暫時は顏を上げ得なかつたので、之れを

見たる他の將校は不思議に思ひ、二三人は其側に寄つて來て、『コレ矢田少尉、何うしたのか。』と問ふと、少尉は涙を拂つて顏を上げ、『之れは弟の墓ぢや、弟は何時の間にか戰死して仕舞つた然し俺は最う泣かぬぞ、屹度此讐は取つて遣る。』と、憤然腕を扼して北方を睨んだ時には、其勇氣に感じて墓標も動く樣に見えた相だ。

◎私は此處で死にます

歩兵上等兵島田好太郎氏は、容貌婦女子の如き美男子であるが、事に當つて沈着勇敢、常に一隊の模範となつて居つた。許家臺から徐家窩棚の敵を攻擊する時であつた、味方は敵砲の集團射擊を受け、前進頗る困難の有樣となり、一隊の兵士は續々と倒れる、島田上等兵も亦た頭部及び胸部に數彈を受け、氣は勇めど最早動く事は出來なくなつたので、小隊長は彼の戰友に命じ、『早く島田に繃帶して遣れ。』と云ふ、戰友は命に從つて走つて來た、スルト上等兵は苦痛を忍んで半身を擡げ、『止めよ〳〵、致命傷だ、繃帶したとて癒るものか、それより今が大事な場合だぞ、俺なんか此儘にして、早く突擊しろ、早く突擊しろ。』と、時に小隊長は一隊を率ゐ、疾風の如く其前を過ぎんとす。見るより上等兵は血汐の流れ入る眼を見開き、一聲高く小隊長を呼んで、『小隊長殿、私は此處で死にます、之れが一生のお別れです、何うか大勝利を、大勝利を——。』と。小隊長は振返り、『島田、屹度勝つて見せる、安心せい。』と。この一言を聽くや上等兵は莞爾と笑ひ、靜かに地上に横はつて死んだのである。

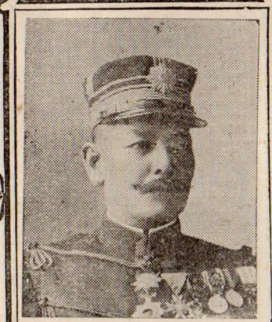


福島少將

◎地雷火探檢の決死隊

南山攻擊の時である、敵は鐵條網を張り、地雷火を諸所に設け、防御の準備おさ〳〵怠りも無い、この防御には味方も隨分惱まされ、南山を攻陷するには、是非とも鐵條網を切り破り、地雷火を踏み碎かねばならぬと云ふので、松村旅團長は牛島聯隊長と相談の上、先づ地雷火探檢の決死隊を出す事になり、新に戰地に來りし第三中隊と第十二中隊とを整列せしめ、大隊長は勵然として一同に向ひ、『隊中決死の覺悟を以て、地雷火を踏み碎きに行かうと思ふ者は、各々速かに劒を擧げい！』と。

スルト驚くべし、全隊の兵士は皆一度に劍を擧げて、我先に決死隊に加はらん事を願ひ出た、之れ實に日本軍人の特色で、斯かる場合に唯一人として死を恐るゝ者は無い。この殊勝なる振舞には、旅團長をはじめ思はず感激の涙を浮べたが、元より全隊を送る必要が無いので、其中より白井軍曹以下二十六名の勇士を撰拔し、虎穴に入るよりも猶ほ恐ろしき地雷火探檢に向はせた、彼等は笑つて死地に入つた、爾してそれから數日の間に、八方に地雷火の爆發する音を聽いた、之れ云ふ迄もなく彼等が地雷火を蹈み碎いたのである無論決死隊は一人も歸つて來なかつた、其代り南山の險壘は、我等が豫期したよりも早く落ちたのである。


秋山少將

◎愛馬『小菊』勇士を救ふ

塞馬集斥候戰の時ば、我が騎兵斥候は重大な任務を帶びて居るので、敵を見捨てゝ一齊に退却したが、其殿騎となつたのは小山田上等兵である、敵は追擊甚しく、上等兵は唯ある森の邊迄で來かゝつた時、忽ち一丸に左肩を貫かれ、ドツと馬から落ちて一事は人事不省となつた。暫くして何んだか頻りに自分をズル〲と曳く者があるので、漸く我に歸つて眼を見開くと、自分を曳いて居るのは他にあらず愛馬「小菊」で、軍服の端を嚙で草原の中に隱す樣にする、ハテ變な事をすると思ひ馬の手首を叩いて、『コレ小菊！　何うするのだ。』と云へば、馬は主人の正氣に復つたのを見て如何にも嬉し相に、首を垂れ頰を擦り付けて微かに嘶いた。

時に一隊の敵騎は砂塵を立てゝ此附近を飛去つたが、上等兵は草原の中に隱されて居るので彼等は少しも氣が付かず其のまゝ遠く彼方へ走り去つた。

その影が見えなくなると、馬は再び微かに嘶いたのである、その嘶は恰度、『最う大丈夫です。』と喜ぶ樣に聽える、上等兵は傷所を押へて起上り、兩眼に涙を浮べて愛馬の手首を撫でながら、『コレ小菊！　お前はよく俺を助けて呉れた、俺の傷は幸ひ深く無いから、本隊に歸つたら又たお前に跨つて勇ましく戰はうぜ。』

◎復讐は何うした

たとへ如何なる遺恨ありとも、弱い者を苦しめぬは日本武士の魂である、茲に一等卒杉澤喜之助氏は、露軍が我が兵士を鏖すや、屢ば眼を抉り腹を裂き、死骸に向つて甚しき無禮を加へるのを常に憤慨して、何時か復讐して遣らうと公言して居つた。

然るに楡樹林子激戰の時である、杉澤一等卒は血刀提げて敵兵を追掛けて居つたが、フト見ると路傍には、一露兵が全身朱に染まり、氣息掩々として橫はつて居る、見るより杉澤氏は惻隱の情迫り、思はず件の露兵を抱起し、水筒の水を飲ませて寶丹など與へて介抱して居ると、處へ通りかゝつたのは一下士で、此樣を打眺め杉澤氏に向ひ、

『オ、杉澤、復讐は何うした、復讐は何うした。』

此聲に杉澤氏は振返て下士の顏を眺めたが『此樣な死にかけて居る者に、何うして復讐が出來ませう。』と、猶も手厚き介抱を敵に加へたのである、嗚呼血あり涙ある好箇の武士、眞に日本軍人の花と云ふべきだ。

◎斷崖絕頂の組打ち

木越支隊の工兵小隊が、大甸子附近に防禦工事をした時の事だ、一等卒橋本喜代治氏は平川軍曹等と共工事の掩護をして居ると、忽ち敵騎五十ばかり驀進して來たので、其動靜を探らうと、橋本氏は平川軍曹と共に地罅の中に身を潛めて居つた、スルト又た橫合から數百の敵兵が來襲し、二人の潛める附近を全く包圍する樣子なので、今は是れ迄なりと地罅を跳り出で歸途に就かうとしたが、忽ち敵の一齊射擊を受けて、不幸にも平川軍曹は其場に戰死した、最う危險は眼の前に迫つて居る、然し勇敢なる橋本一等卒は、上官の死骸を敵手に渡すに忍びず、雨と降り來る彈丸の中に立つて、素速く軍曹の死骸を肩に引掛け、削れる如き斷崖を攀ぢて、本隊の方へ向つたが、敵の追擊は甚しく、二名の露兵は馬を飛下り、同じく斷崖を攀ぢて追ふて來た、肩には上官の死骸あり、敵の劍は電光の如く左右に閃き、今は武器を用ゆる遑も無い、彼はエイと叫んで、近付き來つた一名の露兵を右足で蹴上げた、蹴れた露兵はタヂ〲と蹌踉めつたが、足踏み滑らして十數丈の絕壁から谷底へ眞逆樣に落ちた、スルト殘る一名の露兵は、

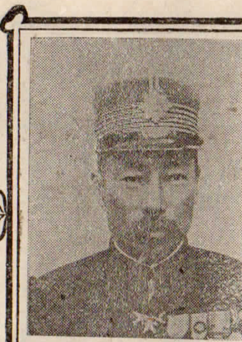
『この日本兵何をする。』と組付いて來る、大兵肥滿な男でなか〲腕力もある、橋本氏も臆せず死骸を地上に置いてガシツと組付き、エイヤ〲と揉合つたが、斷崖の絕頂で


竹内少將

組合つて居る事とて、二人は押しつ押されつする內に、足踏み滑らして組合つたまゝ谷底に落ちた、然るに橋本氏の武運の强かつたので、露兵は落つる拍子に下になつて、したたかに脊骨を巖角に打當て絕息した、橋本氏は無事である、ムツクリ飛起き、再び斷崖を攀ぢて軍曹の死骸を肩に負、全身朱に染みながらも遂に本隊に歸つたのである。

◎死して生るに似たり

奉天會戰の時、島村少將の率ゆる中央部隊が、長北山東方の敵壘に向つて猛烈なる攻擊を始めると、敵も亦た之れに應じ、二十餘門の大砲を列べてドン〳〵擊ちかける其爲め我が野戰砲兵聯隊は非常な苦戰をしたが、時に砲兵中隊長大尉白石七郎氏は、炸烈落下する敵彈を事ともせず、小高き丘の上に仁王の如く突立ち、頻りに大喝號令して居ると、轟然一發流星の如く飛び來りし曳火彈は、忽ち大尉の頭上に爆裂して、一時其邊は硝烟の爲に眞暗になつた、暫時して烟が散じたので、兵士等は、『あゝ大尉も微塵になつて戰死を遂げられた事であらう。』と、眼を押拭つて其處を眺めると、不思議や大尉は依然として仁王の如く突立つて居る、



梅澤少將

『オヤ、大尉は生きて御座るぞ。』と、ドヤ〳〵と走寄つた兵士等は更に驚いた、よく見れば大尉は矢張り死で居る、猛烈なる爆彈の爲めに頭部は何處へ飛去つたか痕もなく、唯だ軍帽の二つに裂けて數間彼方に落ちて居るのみ、然し大尉は此樣な有樣になつても決して倒れず、右手に双眼鏡を握り、直立不動の姿勢で敵軍の方に向つて居る姿は、まるで生けるが如くであつたとの事である。

◎武勇の三人砲兵

細河沿攻擊の時である、紅廟子西方に布ける我が砲列は、敵彈集中の的となつたが、我も劣らず猛烈なる射擊をする、砲聲天に轟き、礮烟地を蔽ひ、其光景物凄しとも何とも云はん方が無い。

其時軍曹古賀幸太郎氏は、彈藥小隊長として戰列に居つたが、中隊長の命を受け、各砲車の發射彈數を調査する爲め、第一砲車から順々に進んで、第五砲車を檢し終り、將に六砲車を檢せんとする時、敵の曳火彈は轟然其前に爆發して、古賀軍曹は致命傷を負ふて地上に倒れた、血は滾々と流れて見る間に全身を蔽ふた、けれど剛氣の軍曹チツトも屈せす、一聲高く

『中隊長殿！ 中隊長殿！』と叫んで、砲車の發射彈數を報告し、安らかに眼を閉ぢて此世を去つたのである。

スルト途端もあらせず、又た一彈は破裂して、其彈丸は伍長河野羊次郎氏の右肩に當つた、然し河野は古賀軍曹初め戰友の續々斃れるので、傷を包む遑もなく、迸る鮮血を浴びつゝ戰鬪を續け、砲車後座の屢ば覆らんとするのを、必死と獨力で、支へて居ると、又た一彈丸は飛來つて右大腿骨を打つたが、之れにも屈せず、『何、糞ッ。』と、猶も轉把を握つて照準を定め、今や將に一發を放たんとする折から、轟然一發の敵彈は眼前に爆發し、彼は『無命！』と叫んで其場に戰死したのである。

之れと殆んど同時だ、伍長秋吉作郎氏は、一彈片を胸部に受け、小隊長の爲に無理に後送せしめられたが、その途中自分の猶だ双眼鏡を手にせる事に心付き、自分を送れる一砲車を見送り、『之れは敵軍視察に大事な品だ、早く砲車の側へ持つて歸れ。』と、此言も終らず、凄まじき曳火彈は頭上に爆裂して伍長の身體は肉片も留めずなつたのである。

◎重傷を秘して戰ふ



島村少將

禁衛步兵隊の上等兵古澤直吉氏は、甛水站の南梨花嶺に前哨を張つて居つたが、急に隣接中隊と連絡を保つべき命令を受け、單身危地を冐し、首尾よく其任務を遂げ、再び以前の場所に歸らんと走つて來ると、忽ち我が中隊の側面に激烈なる銃聲を聽いたので、さては敵襲と急ぎ其場に驅着け、折から激戰中なりし中隊に加はりて奮戰したが、敵彈の來る事雨よりも甚しく、彼は遂に一彈に腹部を貫通され、鮮血瀧の如く流れて見る間に腰部以下を眞朱に染め、其苦痛は實に堪えられぬ程であつたが、彼は激戰中戰友の意氣を沮喪させてはならぬと思ひ、其負傷を秘して猶も射擊を續けて居つたが、我軍遂に打勝つて、敵兵潰亂し始めるや、彼は遂に昏倒した、けれど直ぐ又た半身を起して戰友を呼び、『俺は到頭殺られたよ、未だ腰には澤山彈丸がある、此彈丸で敵を擊つて吳れ。』と云ひ終り、莞爾と笑つて戰死したのである。

◎使命を果さずんば死せず

楡樹林子戰激の最中である、步兵上等兵脇濱福松氏は、中隊長から他中隊に向つて命令傳達の任務を受け、單身險を

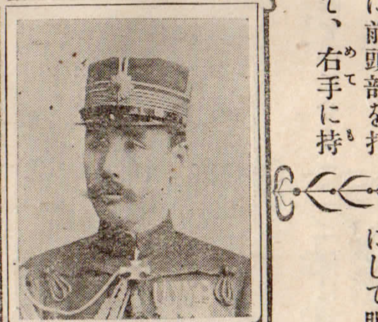
冒して枕山の鞍部まで進だが、戰鬪は益々激くなつて、彈丸の飛ヿ雨依も激い此塲合迂路を取れば安全に目的地に達する事が出來るのであるが、斯ては時機を失する惧があるので、彼は忽ち意を決し、右手に傳達すべき紙片を握りつめ、彈雨を冒して奔馬の如く走り出たが、早や其目的地に達せんとする一刹那、ヒューと飛來りし彈丸の爲に前頭部を打貫かれ、アット叫んで倒れたが直ぐ跳ね起きて、右手に持てる傳達の紙片を高く上て左右に打振り、

『誰か來い、誰か來い、命令傳達だ、命令傳達だ。』と叫び、彼方の中隊より一兵士が走せ來つて、

『ヨシ、確かに受取つた。』と云ふや否や、其手に凭れかゝつて戰死した。

◎福島中尉部下に遺言す

福島少將の次男步兵中尉福島次郎氏は、徐家溝の戰鬪で重傷を受け、野戰病院に收容されて一時昏睡の有樣であつたが、暫くして漸く正氣に復ると、自ら其負傷を見て、最早命の旦夕に迫れる事を知り、折から慰問に來りし小原聯隊長や病院長に永別を告げ、從容として左右を打眺め、自分の部下にして同時に負傷入院せし者に打向ひ、



松川少將

『俺は武運つたなく、戰爭半ばにして此世を去る樣になつた、實に遺憾千萬な事であるが、之れも天命だから仕方が無い、見れば汝等は皆幸に傷が輕い樣だ、よく養生して早く舊の身體となり、生命のある限り國家の爲に盡さねばならぬぞ。』と、此壯烈沈着なる遺言を終つて後、約二十分にして眠るが如く此世を去つたのである。

◎彈丸雨飛中に日記を書く

步兵少佐佐藤義雄氏は、容貌堂々たる軍人で、膽力も實によく据つて居る、燒達勾攻擊の時である、敵もなか〳〵頑强に抵抗して、彈丸は霰の如くビユ〳〵飛んで來る、之れには我が將卒も大いに苦んで居ると、佐藤少佐は彈丸のドン〳〵飛んで來る草原の上にドカと腰を下して片頰に微笑を浮べて、

『マア其樣に急ぐな〳〵、今に敵奴は逃げ出すだらう、どれ日記でも付けて置かうか。』と、矢立と手帖とを取出し、悠々として日記を記し終り、

『サア、又た一つ大奮發をするかな。』と、猛烈なる攻擊を爲して、遂に燒達勾の敵兵を擊攘したのである、其沈勇に

は全軍誰一人として感服せぬ者は無かつたが、惜哉老君容附近の高地を夜襲した時、少佐は眞先に敵壘に突貫し、大喝一聲塹壕を跳り踰えた瞬間、敵の爆彈に中つて名譽の戰死を遂げて仕舞つた。

◎伍長敵將を組伏す

葛布街附近戰鬪の時だ、新發田聯隊の伍長鹿島峰作氏は奮鬪力戰、銃劍を揮つて敵中に斬込むと、敵中よりは雲突く如き一將校、シヤア物々しき日本兵の振舞かなと、白刄を閃めかして斬つて掛かる、心得たりと鹿島伍長は渡り合ひ、二人暫時は他を交へず斬結んだが、何時迄で經つても果しが無いので、伍長は銃劍投げ捨て、エイ面倒なりと彼方に組付き、互に必死と揉合ふ事十分ばかり、伍長の力量が勝つて居つたので、遂に敵を組伏せ、傍に落ちたる白刄を取上げて、今や留めを刺さんとする一刹那、一彈は飛來つて伍長の肩間に中つた、

『あゝ殘念!』と一聲、伍長は敵將の咽笛に喰付き、彼我共に悲壯なる最後を遂げたのである。



渡邊少將

◎彈丸は表門から裏門へ

後創は日本武士の大禁物である、栫木城戰鬪の時だ、步兵少尉遠藤董義氏は、腹部より臀部に貫通する重傷を負ふて倒れ、人事不省の有樣となつて野戰病院に送られた。暫くして正氣に復ると少尉は直ちに問ふた、

『傷は何處だ、傷は何處だ。』

看護長は氣の毒に、

『臀部です。』と、蓋し腹部の創には、餘り小さいので眼に入らなかつたのである。

聽くより少尉は猛然と立上り、

『何、臀部だと、後創か、馬鹿な、其樣な事があるものかよく見て呉れ、よく見て呉れ。』

處へ軍醫は來り、少尉の怒り叫ぶ聲を聽いて、よく全身を檢べて見ると、果して創は腹部から臀部へ貫通して居るので、軍醫は微笑を浮べ、

『安心なさい、彈丸は表門から裏門へ拔けたのです、然しながら、輕い傷ではありませんぞ。』

云はれて少尉は手を拍つて小躍りし、

『爾だらう、爾うだらう、乃公が後創なんか受ける氣遣は

無いのだ、何に創なんか重くつても構はん、あゝ之れで漸と安心した。』と、斯かる元氣なので、さしもの重傷も意外に早く癒り、少尉は再び戰線に立つ事が出來る樣になつた。

◎此劍で切腹するのみ

馬塘方面戰爭の時だ、歩兵一等卒五十嵐彌五八氏は、右足を撃たれてドッと倒れ、暫くは起上る事も出來なかつた。之れを見たる熊倉特務曹長は近付き來つて、

『オイ、五十嵐どうした。』

『足を撃たれて歩けません。』

『何、足を撃たれたと、そんなら膝で歩け。』

『ハイ。』と、五十嵐一等卒は膝で歩き出したが、見れば其手には拔劔を引摺つて居る、特務曹長は怪訝な顏をして、

『五十嵐、その劔は何うする積りだ。』

一等卒は面を上げ、

『私は足を撃たれて、進む事も退く事も意の如くなりません、萬一敵に捕へられる樣な場合に迫つたら、直ちに此劔で切腹する積りです、御安心下さい、それで身體の自由を失つても、決して敵の耻辱を受けません。』



澁谷少將

◎生意氣めイ

首山堡攻擊の時だ、當時の第三師團長小川大將は、大趙家附近の民家に在り、轟々たる砲聲と、物凄く飛んで來る彈丸を物ともせず、靜かに地圖を開いて熟視して居ると、其時一彈は此民家の附近に爆發し、一彈片は室内に飛込んで來て、小川大將の顎部に當り、鮮血サッと迸つた、けれど大將はビクともせず、床に落ちたる彈片を冷然と見て

『生意氣めイ。』

◎大いに笑へ！

小阪中尉は敵情偵察の爲め、騎兵十餘騎を率ゐて定州に向つたが、唯見る城門の方に、二名の敵兵が現はれたので、直ちに狙を定めて一發ズドンと射斃すと、途端城門はサッと開いて、數百の敵騎兵は雲霞の如く現はれて來たので、中尉は思はず『しまつた』と叫んだが、忽ちカラ〳〵と笑ひ出し、

『何構ふもんか、サア皆討死するのだ、此世の名殘に笑へ笑へ！大いに笑へ！

日露戰爭

美談と奇談

◎黑木大將の剛膽

黑木大將の沈勇剛膽は何人も知つて居るが、左の逸話の如き宛然古英雄の面影がある。

黑英臺激戰の時だ、敵軍は比較的優勢にして、我軍は屢ば危地に落ち、參謀長初め一同安き心も無い、スルト今迄で双眼鏡を手にして、熱心に前線の戰況を眺めて居つた黑木大將は、何時の間に何處へ行つたものか、急に姿が見えなくなつた。

『ヤア、司令官は何處へ行かれたのであらう。』と、一同は驚いて其邊を搜し廻はると、大將は燒くが如き炎熱を高粱畑の中に避けて、早や鼾聲雷の如く晝寢をして居る、大砲の音ドン〳〵、鼾の音ゴー〳〵、實に奇妙な對照である。

此有樣を見た人々は皆大將の剛膽に舌を卷いたが、中にも觀戰の爲に來つた英國のハミルトン中將は、

『これは——。』と云はつた限り、暫時は開いた口も塞がらず、やゝあつて側の藤井參謀長に向ひ

『黑木大將の剛膽は豫て聞いて居つたが、斯く迄でとは思はなかつた、然し大將にはあの雷の如き砲聲が邪魔にならぬのでせうか。』と。

斯かる問答を知るや知らずや、暫くして大將はムックリ起上り、

『何うだ、最う戰爭は勝つて居るだらう。』

と、果して此時は最う味方は必勝の地位に立つて居つたのだ。



山口少將

◎一郎左衞門なる名

橘中佐には幾多の美談逸事のある中に、左の一話の如きは永く傳ふべきものであらう。

中佐に一人の遺子がある、其名を一郎左衞門と云ふ一寸聞けば如何にも奇妙な名と思はれるが、之れには深い意味があるものである。

中佐が曾て東宮武官であつた時、令息出生の事が東宮殿下の御耳に達したので、殿下は中佐の顏を御覽になると、

『今度一子が生れた相だが、名は何んと命ずるか。』とお問ひになつた、中佐は一寸考へて、

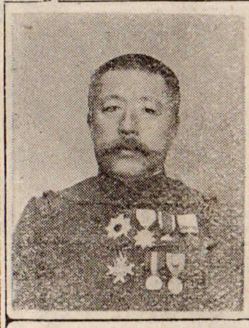
『ハイ、一郎左衞門とでも命ずる積りで御座ります。』と即答申上げた。

處が家に歸つて考へて見ると、一郎左衞門とはサテ〳〵妙な名を言上したものかなと思つたが、既に殿下の御耳に達した上は、今更變更するは殿下を欺き奉るに同じと、元來義に堅き中佐の事とて、遂に其愛子を一郎左衞門と呼ぶ樣になつた。

すると其後殿下は、中佐が伺候すると屡ば、『一郎左衞門は何うして居る。』と御尋ねがあるので、中佐は其度每に殿下の思召の厚きに感泣して居つたと云ふ。

◎睨合の的は一羽の雁

旅順で敵味方睨合ひの最中だ、處は九十三高地の附近、或日夕暮の事である、一群の雁が敵味方中間の空中を、ギヤアギヤ鳴き乍ら飛んで來る、それと見るより高地敵砲壘では、あれを射落して今夜の御馳走にせんと、鐵砲を數挺並べてドン〳〵狙擊したが、あまりお手際が巧くないのでなか〳〵中らぬ、之れを見たる日本軍の方では、



山田少將

『ヤイ〳〵、態見ろう、露助さんの彈丸が中るものか。』と、手を拍つてワイ〳〵囃し立てると、露兵の方でも口惜しく思つたのだらう、一時に十數挺鐵砲を並べて盛んに彈丸を飛ばしたので、遂に其一羽に命中し、射られた雁はクル〳〵舞はつて空中から落ちて來た、其落ちた場所は恰度敵味方の中間だ、スルト二人の露兵ヒラリと壘壁から飛下り、其雁を拾はうと走つて來るので、

『あれ默つて拾はせてなるものか。』と、我兵は狙ひを定めてドン〳〵二發放つと、見る間に件の露兵は射倒されて死んだ、拾ひに出れば射殺されるので、露兵の方では、雁は欲しゝ生命は惜しゝ、口々に何か分らぬ事を罵り叫びながら、怨めし相に此方を睨んで居る、スルト我兵の方では、

『ヤア、露助さんは最う雁が入らぬと見える、そんなら此方で頂戴しろ。』と、二三人はバラ〳〵と其處に走つて行くと、今度はドン〳〵〳〵と、忽ち彼方に殺られて仕舞つた。

此方が出れば彼方から射られる、彼方が出れば此方から射る、双方出る事が出來ず、雁を中に置いて睨合つて居ると、忽ち見る彼方の空より、一羽の巨大なる鷹が現はれて、あれよ〳〵と云ふ間に雁を引摑んだ、

『おのれ、鷹などに獲物を取られてなるものか。』と、双方云ひ合はさぬが滅茶討に鷹を目懸けて發射したが、何う云ふものか少しも中らぬ、其内に鷹は鋭き爪に雁を引掛けて、左樣ならとも何とも云はず虛空遙かに飛去つた、日本兵も露兵も開いた口が塞がらず、鷹の消去る空を仰いで

『オヤ〳〵。』

◎鷲を擊ちし歌

第二回旅順背面總攻擊の時、九十三高地附近で激烈な砲戰が始まると、處へ何處から飛んで來たものか、一羽の大鷲が我兵の銃丸に中つて空中から落ちて來たので、牛島大佐は之れを拾つて、師團長松村中將の許に送つて來ると、鬼の如き松村中將も思はず含笑まれて、即座に一首の歌を作られた。

大柿を得しふることも偲ばれて
　あすの戰の瑞祥とする
　　　　陸軍中將松村務本

中將は此歌を添へて、件の大鷲を軍司令官乃木大將の許に送られると、大將も大いに喜んで、

思ひきや十とせの昔龍を斬り
　今またこゝに鷲を擊つとはと
　　　　陸軍大將乃木希典

と詠まれたのである。すると之れを聽いて、風流士官伊豆中佐と鈴木少佐とは、左の二首を作つて大將に呈した。

龍を斬る大和男兒のかい子もて
　など荒鷲の擊ち得ざるべき
　　　　步兵中佐伊豆凡夫

時ぞ來ぬ天翔りつるをほこりも
　我が御軍の手に落つるべき
　　　　步兵少佐鈴木朝資



木村少將

◎乃木大將とステッセル

旅順開城後、乃木大將が敵將ステッセルと水師營で會見した時、ステッセルは今回の戰爭に、乃木大將が二人の愛兒を喪つたと聞いては流石に暗涙を浮べ、西洋流に丁寧なる悔みを述べると、乃木大將は儼然として、

『イヤ、お悔みを受けるには及ばない、我子が國家の爲に戰死したのは當然の事で、是れ父としても、又た一個の武士として本懷の至りである。』と答へたので、ステッセルは思はず頭を垂れて、

『嗚呼この武士的精神があればこそ、日本軍はあの樣に强いので、難攻不落と誇る旅順要塞も遂に陷落する樣になつ

たのだ。』と、深く感激したとの事である。

あゝ乃木大將は單に戰爭に强きばかりでは無く、何事にも强き人である、根本より精神を鍛練した人でなければ、迚も大將の如くなる事は出來ぬのである。

大將が旅順攻圍中、最も困難なる時に當りて、悠然として作つた二首の詩がある、實によく大將の心事を現はして居るので左に掲げる。

◎金州城

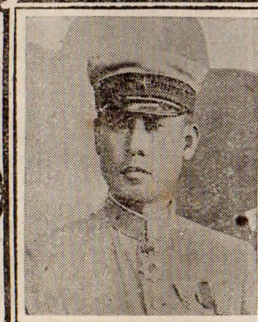
山川草木轉荒凉　十里風腥新戰塲
征馬不レ前人不レ語　金州城外立二斜陽一

◎爾靈山

爾靈山險豈難レ攀　男子誠忠耐二百難一
鐵血覆レ山山骨露　萬人齊仰爾靈山

◎鳥目一等卒の剛情

一等卒本間長太郎氏は、元來鳥目に罹つて居つたのだが、戰爭が始まると頻りに治療し、少しよくなつたので漸く出征する事が出來た。



小泉少將

然るに戰地に行つて燒くが如き炎熱に射られ、食物も不自由な上に過度の勞働をしたので、病氣が再び發して來て、夜になると殆んど物が見えなくなつた、小隊長を初め戰友は痛く氣の毒に思ひ、

一時戰線を退いて療治をしたら宜からうと云つたが、彼は首を左右に振つて何うしても聽かぬ、

『何、鳥目だつて戰爭の出來ぬ事があるものか。』と、猶も進軍を續けて居つたが、樣子嶺に近づいた時である、夜になつて最う何も見えぬ、之れには流石の勇士もほと〳〵弱つたが、元來非常に剛情な男なので、困つたなどゝは一言も云はず、石に跌き切株に足を掬はれながら、蹌踉めき蹌踉めき進んで行つたが、其内に夜がほの〴〵と明けて來ると、彼の眼も明かになつて勇氣百倍、

『サア、之れから俺の世界だぞ、突貫々々、早く突貫が始まればよいなア。』

彼は斯かる元氣者で、夜になると隨分苦しむが何の樣な場合でも他に負けて居らず或夜の如き、盲目滅法界に猛進した爲め、敵は却つて驚いて逃げた事もあつた相だ、此樣な男こそ命知らずと云ふものだらう。

陣中の風流

◎箱入娘　　森軍醫官作

鷗外漁史森林太郎氏は、醫學博士で軍醫監で、又た文壇第一流の名家である、旅順陷落の即夜興に乘じ、「箱入娘」と題し左の如き軍歌を作つた、譜は「雪の進軍」に據る者で、面白い文句である。

(一)西施揚妃姫生せた親の
自慢娘の旅順じやけれど
昔口說たらツイ落たのを
イツカ忘て養女にいつて
今じや露西亞の箱入娘
落ちぬ噂が世界に高い

(二)鐵條網の八重の關する　掩蓋深く姿も見せず
水門口から忍んで行けば　探海燈の目でおどしつけ
今じや露西亞の箱入娘　落ちぬ噂が世界に高い

(三)勸降書と云ふ附文見ても　けんもほろゝのすげない返事
賴み賴むだ白だすきさへ　途中まで往て追還された
今じや露西亞の箱入娘　落ちぬ噂が世界に高い
は無いか。



平佐少將

(四)今じや露西亞の箱入娘　落ちぬ噂がよい高いとて
昔落した馴染じやものを　今度落さにや男が立たぬ
落ちぬなびかぬ名代の娘　日本男子が落して見せよ

(五)戀の邪魔する黑鳩公が
沙河の向ふで躊躇する中
此方やお先えモーお正月
屠蘇の機嫌で口說て見たら
落ちぬ靡かぬ名代の娘が
又もころりと遂落された
鷗外漁史の箱入娘は、何んと面白い娘御で

◎九連城占領　　西陸軍大將

鎖されし堅き關の門打破り
屍の中に駒勇むなり
鴨綠の河うち越えて唐土の
たかねにひゞくかちどきの聲

◎陣中ビール瓶に花を挿みて　岡崎陸軍少將作

つはもの〻手折てさせし桃櫻
心の花も匂ふなりけり

◎鴨綠江の中洲にて　同人

武士の鋒を枕の假寢にも
朧月夜はのどけかりけり

◎露征日記　中島軍曹作

明治三十七の年
共に譽れを競はんと
頭は彌生の花さかり
花の都を後に見て
品川ステンション乘出し
我世田ヶ谷の砲兵は
精鋭無比の有坂砲
數年鍛へし此の身をば
今や滿洲シベリヤに

暫時しの別を汽車の窓
西の都や淀の水
豐公榮花の跡過ぎて
早や山陽の要地たる
廣島城にぞ着きにける
やがて船出は宇品港
さして行衞は知らねども


岡崎中將

其の腕前を試さんと
戰の門出勇ましく
萬歳の聲諸共に
烟の中に消えて行く
名殘を惜まぬ敷島の
大和男子の心情は
朝日に匂ふ山ざくら
色も美し香も清し
逆捲く浪を押分けて
迎ふ芙蓉や送る琵琶
向ふ心の一とすじに
之れ千歳の我友よ
馴れぬ波路も何のその
敵きの領海我がものよ
我が日の本の大丈夫が
國の譽れと戰いて
骨を埋め血を流し
恨みをこめしから土の
山に三五の月冴へて
過ぎし昔しぞしのばる〻

寄する汀に敵拂らひ
旭の御旗を押立てん
馬關の港もいつか過ぎ
壹岐や對馬もほの見へつ
亦も隱れつ玄海の
浪より外に影もなし
大空續く海原の
大陸近く押寄せて
今や乘り入る大同江
到れば露兵の影もなし
思へば神功皇后や
豐太閤の昔より

戰地滑稽談

◎ブランデー君萬歳!

大隊長堀少佐は極く磊落な人で、酒顚童子と異名されて居る程酒好きだ、で、常にアルミニユーム製の小壜にブランデーを入れ、內衣袋の中に携えて、何處へ行つても放さず、暇さへあるとコツソリと取出し、チビリ〱と飲ッては樂んで居る。處が楡樹林子激戰の時だ、少佐は陣頭に立つて號令して居ると、忽ち一丸は飛來つて胸に中つた、

『しまつた!』と少佐は叫んだのである、胸を擊たれては助かる筈が無いと、最う覺悟を定めて突立つて居つたが、何時迄で經つても痛みを感せず、血も出なければ倒れる樣子も無い、

『ハテ變な事だぞ。』と、そつと手を差入れ、其處を撫でゝ見るに、其處にはブランデーの小壜が少し凹げて居つたのみ、彈丸は小壜に留つて幸に心臟貫通を免がれたのである。


兒島大佐

斯くと知るより少佐は、小壜を取出して高〱差上げ、『ブランデー君萬歳!　ブランデー君萬歳!。』と、其序でに又た一口やつたのである。

◎露探を喰はんか

露軍は屢ば獵犬を使用して偵察を試みる事があつた、此時よりぞ探偵の事を犬と呼ぶ樣になつたか何うかは知らぬが、玆に旅順攻圍軍中に白石大尉と云ふ磊落な士官があつた、或日松樹山B砲臺附近を偵察して居ると忽ち物陰から一頭の眞黑な巨犬が現れて、大尉を見るや消魂しく吠立て彼方に逃去らうとするので、見るより大尉は、

『おのれ露探め、逃げやうとて逃がすものか。』と、銃取直して一發ズドンと放つと、見事に中つて犬はコロリと倒れた、

『占た〱、今夜は諸兵に御馳走して遣るのだ。』と、折から銃聲を聽いて露兵の追ふて來るのを尻目にかけ、巨犬を

提げてスタ〳〵と陣中に歸り、早速兵に料理させて大鍋でグツ〳〵と羹、大尉は陣中を布れ廻つて叫ぶ、

『何うだ、露探を喰はんか〳〵、旨いぞ〳〵、舌も拔ける程旨いぞ。』

◎白馬の大將軍

上等兵青木留吉は、吉井鬼少尉の部下だけに、なか〳〵慓悍な男である、摩天嶺逆襲の時、敵の追擊甚だ急だが、彼は少しも恐れず殿軍して居ると、背後で大聲を放つ者がある、振返つて見ると、敵の先頭に立つて白馬に跨り、喚き叫んで來る一人の露將、容貌堂々として、一見大將軍と見えるので、青木は彼奴射落して吳れんと銃取直し、ズドンと一發火蓋を切ると、今迄で非常な勢で追ふて來た白馬將軍、周章狼狽馬首を回らして一目散に逃去つた、サテ〳〵弱い大將軍もあつたものだと思つたが、何しろ其風采が餘り立派なので、青木は隊に歸つて後も切齒をして、

『あゝ殘念な事をした、あの大將軍を射落したら、確かに金鵄勳章の値はあつたのだが。』と、頻りに愚痴を溢して居つたが、後でよく調べて見ると、例の白馬先生は大將軍と思ひの外、露軍の喇叭手が支那馬に跨つて來たものと知れ、青木上等兵は塞いた口も閉がらず、

『何んだ、喇叭手なんか射落したつて仕方があるものか、俺は甚く買被つた、アハヽヽヽ。』



石原少將

◉此奴石頭だな

歩兵一等卒藤原峯藏は、極く性急短慮な男である、摩天嶺で敵兵が逆襲して來た時、早や夜明けに近いが、四方は未だ薄暗いので、何が何やらよくは分らん、藤原一等卒は無二無三に敵兵を斬りまくり、單身逃ぐるを追ふて唯ある林中に入つたが、フト見れば前方には、大兵肥滿の一露兵が折敷に構えて、今にも此方に向つて火蓋を切らうとして居る、見るより藤原は大喝一聲、

『此奴、俺を擊たうとて擊たせるものか。』と、飛鳥の如く跳りかゝつて眞向切下げると、ザクッと斬れると思ひの外、ガチツと音して刀は跳返つた、

『此奴、石頭だな。』と、藤原は刀を取直してよく見ると、露兵と見えたは大木の切株であつたので、藤原は可笑しくもあり腹立たしくもあり、

『此奴が、此奴が、此奴が、ウフヽヽヽ。』

◎妙計を以て臭氣を拂ふ

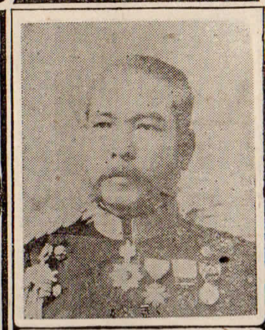
沙河滯陣中の事である、我が禁衞隊は馬圈子山附近に陣取つて居つたが、夜が明けると日沒迄の間絕えず斥候を出す、スルト敵は日沒から夜明け迄の間斥候を出す、爾うして敵味方の中間に頗る居心の好い芝原があるので、彼我斥候は云ひ合はさぬが、自然と其處に息ふ事になつて居つた。

然るに我斥候が或日其處へ行つて見ると、奇麗な芝原の上に人糞が一面に放り散かされ、其臭い事は鼻も曲り相だ、云ふ迄もない此樣な臭い糞を放るのは露兵である、コリヤ堪らぬと我兵は鼻を摘んで歸つたが、其次の日も其處へ行つて見ると、矢張り新しい糞が放つてある、露兵は每晩此處へ來て、一寸一休みの間に放り散かすものと見える、之れには我兵もほと〳〵弱り、誰も其處へ行くのを好まぬ樣になつたので、前哨小隊長は笑ひながら、

『其樣に糞が恐ろしいか、ヨシ俺が妙計を以て、露助に糞の除掃をさせて見せやう。』と、早速洋紙とペンとを取出し、巧みな英文でさら〳〵と、

露兵君！　未だ拜顏の榮を得ぬが、每夜御紀念物により、拜嗅ならぬ臭氣を拜嗅仕つて居る、餘程結搆な臭氣で、何を召上つて居るかと云ふ事もチヤンと分る。

と、斯く記して此書面を糞の上へ載せて置いた處、其次の日行つて見ると、糞は一夜の中に奇麗に掃除され其後は此邊全く臭氣は絕えたと云ふ事である。



友安少將

◎變な爆發藥

日本爆發藥の威力には、敵も餘程恐れて居つたものと見える。

唐家屯接戰の後だ、双方の死體が壘々と橫はつて居るので、敵味方は互に約束を定め時間を期して各自屍體を收容する事にした我が一將校は一隊の部員を引連れ、先に突擊を行つた敵壘の前に至り、頻りに我が戰死者を收容して居ると、敵の將校も亦た多くの部員を引連れて其側に來り、矢張り自國兵の屍體を收容して居つたが、暫く經つと彼等は何か非常に驚つた樣子で、

『日本爆發藥！　日本爆發藥！』と叫ぶ、何事かと振返つて見ると、露國將校は鬚を慄はして地上を指して居る、其

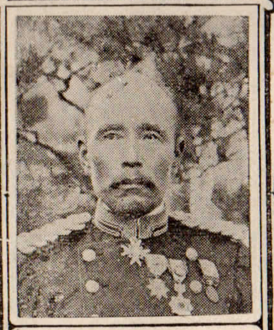
處には日本恤兵品の懷爐灰が落ちて居つたのだ、懷爐灰とは知らず彼等はます〱叫ぶ

『危いぞ、觸るな〱、日本爆發藥！　日本爆發藥！』

◎開けて口惜しき玉手箱

戰地に居ると何んな女でも美人に見える相だ、『あゝ女の香氣を嗅ぎたいなア。』と云ふ者があれば、驢馬の聲を女の聲と間違へて戸外へ飛出し、『何んだ馬鹿々々しい。』と頭を搔いて歸つて來るもあり、美人の繪葉書など人目に付く所へ置かうものなら、一寸小便に立つた間に、早や行衞不明になつて仕舞ふ相である。

斯かる次第なので、內地から慰問袋でも着かうものなら、何うか俺に女の慰問袋が渡る樣にと、互に競爭して籤を引くもあり、うまく當籤して女名前の慰問袋でも取らうものなら、恰も鬼の首でも取つた樣に鼻を高くし、たとへ手拭一筋に向つても厚き禮狀を出す、中には餘ほど艶な事を書いて出す向もあつた相な、之れも其一人であらう、第二軍の或る少尉殿、陣中で一個の慰問袋を受取つて見ると、差出人は筆蹟頗る麗はしき女名前なので、少尉殿は頗る得意になり、早速禮狀を認めて送ると返事が來た、四度五度と手紙の往復をして居る內に、未だ互に顏は知らぬがだん〱親密になり、少尉殿は最う懷かしさに堪らなくなつたのであらう、遂に意を決して一書を送つた、その文面は、



吉田少將

『萬一恙なく凱旋する事もあつたら、貴女は何うか私の妻となつて下さい、私は未だ貴女を知らず、又た遠く離れて居つても、日夜に貴女の美はしき姿が見える樣です。』と、其他猶ほいろ〱と艶な事を云つて遣り、色よき返事を今日か明日かと待つて居ると、それから一ヶ月程經て、例の女から返書が來たので、少尉は胸を跳らし面を赤らめ、取る手遲しと披いて見ると、其書面は何時に變らず筆蹟麗はしきが、少尉の厚情を深く謝した後、中に左の如き文句があつた。

『――折角の思召に候へども、妾は當年六十八歲の婆に御座候、御想像遊ばす如き美はしき姿御座なく候、梅干婆の顏一目御覽に相成候はゞ、二度と親切なる御手紙を下され候氣遣は無之候――』と、少尉は呆氣に取られ、開いた口も塞がらざる事約三十分、思はず呟いて曰く、

『開けて口惜しい玉手箱であつた哩。』

◎天罰だ〱

滿洲の河水には種々の毒分子が含んで居る、如何に渴しても其儘飮んではならぬと、之れ上官が常に部下に向つて命ずる處である、然るに關步兵上等兵は、樣子嶺戰爭の時燒くが如き炎熱に射られ、咽が焦付く程渴を覺えたので、上官の命令を忘れた譯では無いが、何一度ぐらゐ飮んでも構ふまいと、前後左右を見廻して上官の居らぬに氣を許し、蘭河の水流に下つて水呑器を取出し、河水を酌取つて將に口元に持つて來やうとすると、その途端シューと一發の彈丸は飛來り、手に持てる水呑器にガチッと中つて跳飛ばした、關上等兵は吃驚仰天し、

『ヒヤア、危ふかつた、上官の命令に背いた天罰で、最う少しで生命を取られる處だつた。』と、それから後は再び河水を飮まうとしなかつた相である。

◎駄目だ〱夏に限る

近衞步兵一等卒山田宗平氏が、歪頭山東南方面斥候の任に當つて居ると、山の彼方から一敵斥候が現はれて來たので狙ひを定めて一發ドンと放つと、うまく敵に命中してドッと倒れたから、

『占たり、彼の鐵砲を分捕りして呉れん。』と一散に走つて其傍に近づき、身を屈めて將に鐵砲を取上げやうとすると、今迄で死を裝つて居つた敵兵は忽ちムックリ起上り、物をも云はず宗平氏に組付いて來た、



大谷少將

『此奴未だ生きて居つたか。』と、宗平氏は驚きながら敢て周章てず、敵を咽輪攻めに攻め立てたが、彼もなか〱の剛の者、いきなり引外して宗平氏の頰に嚙付いた、

『ア痛た、、、、嚙むとは卑怯だ。』と叫んだが、何さま痛くて堪らぬので、遂に敵に組伏せられ、此塲で生命を取られるかと思の外、敵は何思つたか我を捨てゝ一目散に逃出したので、宗平氏は素速く跳起き、地上に落ちたる鐵砲取るより早く射放せば、今度こそ巧く敵を擊留め、鼻高々と本隊へ歸つて此事を語れば、

『然し組伏せられた時、何故敵の睾丸を握つて遣なかた。』

と云ふと、宗平氏は手を振つて、

『駄目だ〱、防寒服の上から睾丸を握つたつて利くものか、睾丸を握潰すのは夏に限るさ、アハ、、、、、。』

凱旋観兵式盛観

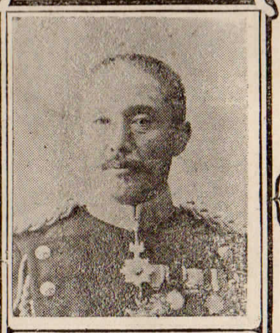
一記者

◎空前の盛典

花は既に地に委して、また陽春の嬌態を止めないが、都門の綠將に濃かならんとして、萬物の生氣今や旺盛を極むるの時である。

大元帥陛下駕を城西青山の原に廻らし玉ひ、親しく五萬の兵を閲はし玉ふ。噫、空前の盛儀、空前の觀兵式は茲に芽出度く擧げられたのである。

曰く凱旋觀兵式！　觀兵式の三字既に人をして限りなき壯嚴を想はしむるに、今回の觀兵式には殊に凱旋の二字を冠せられた。之を空前の盛儀と謂はずして何ぞ。茲に更めて記す迄もなく、我が帝國は他邦と戰つて常に勝利を得た國ではあるが、露の如き大敵を相手として、幾十次の大戰小鬪に一度の敗をも取らなかつたのは、單り我が史上に先例のないばかりでなく、斯の如きは實に世界の史上に於ても、千古を空ふするものである。由來觀兵式は治に居て亂を忘れざるの用意を實にした


佐々木少將

る國家の典例、此の空前の大捷の後を承けて、此の空前の盛儀を擧げらるゝのは、實に欣賀に堪へない所である。記者は不取敢當日の盛觀と、市中賑閙の概況を叙して、讀者諸君が此の盛典を、他日に紀念するの便としやう。

◎御道筋の混雜

御出門は午前八時半、殊に今回は特例を以て、國母陛下にも聖上陛下と駕を倶にし玉ひ、此の盛典に臨御あらせ玉ふので、途に行幸の鹵簿を拜して寶壽の萬々歳を祝し奉り、また凱旋兵の行軍を迎へて其の軍功を讃へんとするのは、實に國民の至情である。去れば東京市内の在住者は勿論、地方の軍人遺族を始めとして、幾萬の國民は、行幸の御道筋に押寄せた。然しながら街道の面積には限りがある。之に限りなき拜觀者が詰め懸けたのであるから、雜閙を極めたのは云ふ迄もなく、拜觀者の多數は未明より御道筋へ集り來り、中には夜半から御通輦を待つて居たものも少くない。六時前後には早〱も沿道は山

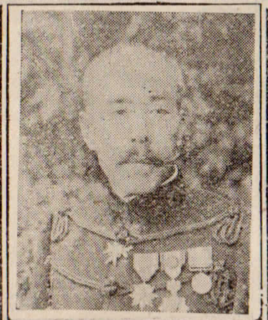
の如き人垣を以て埋められた。然るに此の大混雜の間に於ても、憲兵と警官との取締が能く行き届いて左したる不都合もなかつたのは幸であつた。殊に同情すべき遺族に對しては、馬場先凱旋大道前の商業會議所脇から中山侯爵邸迄の三菱原の空地と、日比谷公園有樂門前の濠端一帶から第一中學前の凱旋大道を特に其の拜觀場所と定めて、遺憾なく龍顏を拜することを得せしめたのは、寔に難有きことであつた。又在郷下士卒は司法省、裁判所、法相官邸の前全部に整列して、拜觀したのである。

◎萬歳！　萬歳！

斯くて時刻は漸く移つて、御出門間近となるや、左しも大混雜を極めた拜觀者は、遉に何れも襟を正すのである。

脫帽！　脫帽！　先づ見えるのは先驅の警視、續いては近衞騎兵の一隊。金色眩き天皇旗は、大なる威嚴を示しつつ進む。萬歳！　萬歳！　萬歳！　我等が身命を捧げ奉る陛下は、今我等の前を過ぎ玉ふのである。

鹵簿は第一公式、此の日は特に拜觀者の爲めに御馬車の幌を撤せられた。大元帥の御制裝嚴めしく內外の大勳章を佩


門司少將

び玉ふ、威風堂々たる大軍人は、實に國民が大なる慈父と仰ぐ我が　天皇陛下である。而して咽喉も裂けよと萬歳を唱へて、兩　陛下を歡呼する堵の如き拜觀者は、實に陛下の赤子である。噫絶好絶美の對照！　恐多くはあるが、是等國民の歡呼を親しく御耳にし玉ふ兩　陛下の御胸の內想へば唯感極まつて泣くの外はない。昔は將軍家の通過をも、仰ぎ見ることを許されなかつた。我等照代の民の幸福さよ。

御順路沿道の大歡呼、我が　陛下には、此の萬歳聲裡に青山の式場に入らせられた。

◎盛觀！　盛觀！

今回の盛儀に參列する軍人軍屬は將に五萬陪觀者は約三萬と注せられた。去れば多數の陪觀者は午前五時から同八時迄の定時間に陸續青山の式場に向ひ、棧敷を始め設けの席は、何れも早朝人を以て滿たされた。

各軍隊は午前八時前に式場に着して豫定の位置に整列する空前の盛典たる凱旋觀兵式は今數刻の後を以て擧行せられるのである。彼のカーキー色の軍裝した幾萬の將士の、眉宇に漲る得意の色を見ずや。斯くて　陛下には是等の將士

を閲はすべく、鹵簿肅々として着御あらせ給ふ。近衞師團、第一師團、其他各師團の代表隊は、豫定の如く式場に整列して　陛下の御親閲を待ち奉る。陛下には着御の後ち玉座に於て御少憩を取らせ玉ひ。斯くて大觀兵式は始められた。

陛下に隨從するものは、佐久間臺灣總督、大島關東總督長谷川駐韓軍司令官を始めとして各將官、及び同盟國の代表軍人たる英國大使館武官で、順次諸兵を閲兵あらせ玉ふ。

陛下の御親閲終つて大山元帥の指揮の下に分列式を行はれる。彼の幾多の彈痕を止め、色褪せたる百餘旒の軍旗は、曩に滿洲の野に飜りたる軍旗ではないか。彼の喨々たる喇叭の聲は、曾て滿洲の野に響いた聲ではないか。其の總指揮官、其の參謀長、其の將校其の兵士、何れも滿洲の野に軍旅の辛酸を嘗めた人々である。噫光榮ある分列式よ。

分列式の終ると共に　陛下には諸兵指揮官以下臺灣關東兩總督、駐韓軍、樺太駐剳軍兩司令官、各師團長等を玉座の前に召させられ、優渥なる勅答を下し玉ふ、諸兵指揮官は參謀長を隨へて奉答し、茲に未曾有の盛儀は終りを告げ、

陛下には龍顏麗はしく、拜觀者歡呼の内に還幸あらせられた。


稅所少將

想ふに空前の觀兵式が與へた深き記憶は、蓋し永久に消ゆるものではない。實は歴史は最良の教科書である。神功皇后の三韓征討を始め元冠の役、豐公の外征、近くは日清役、北清事件。何れも武勇の國としての日本の名を發揚せしめたと共に、其歴史は毎に偉大なる教訓を遺しつゝあるのだ。噫日露戰史の終を飾る此觀兵式如何ばかり將來の國民が、此大紀念に依て誨へらるゝであらう。

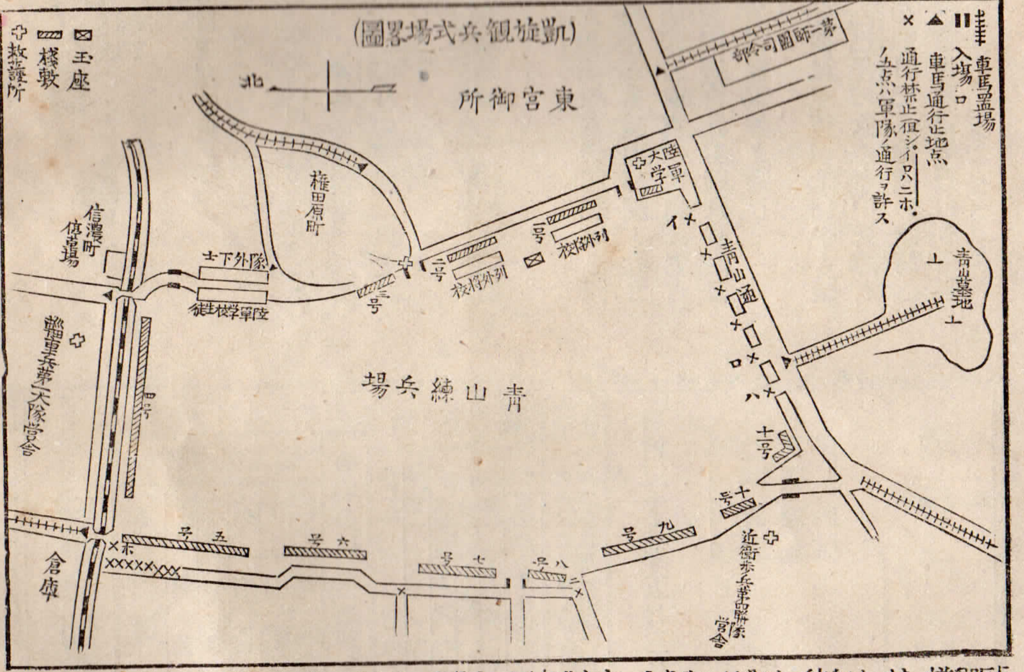
◎凱旋行軍

大觀兵式の芽出度く終了を告げてから、大山元帥の指揮の下に凱旋行軍を行はれた。國民は鳳駕の通御に際して、あらん限りの聲を擧げ萬歲を連呼したが、今亦名譽ある凱旋軍隊が、肅々として行進する光景を見ては、滿身の血悉く湧かんばかりに狂して、帽を振りハンカチーフを振り、此の忠勇なる將士を歡呼したのである。戰爭の終了後、凱旋行軍は數次東京市中に行はれたが、未だ曾て是程盛大な行軍はなかつた。又其の兵數も極めて多數であるから、先頭部隊が終點たる日比谷公園に達した頃にも、未だ殿軍は青山の式場を出切らなかつた。

◎市中の賑

觀兵式も行軍も終つてから、拜觀の人々は何れも散解するのであつたが、それでも物珍らしき地方人は、宮城前に行つて、新らしく据付けられた大砲、或は山の如く積み上げられた砲彈のケース、洋刀の垣等を觀るものもあれば、靖國神社の境内に小銃塔を觀るものもあり、其他市内見物の地方人は三々五々隊を爲して、往交ふばかりでなく、市民も亦二重橋外乃至は九段へ出懸けるもの中々に多く、東京は此の雜閙の間に日は暮れたが、然かも其の雜閙は夜に入つてから更に一層の雜閙を加へたやうに想はれた。

今當日市中の各區に就て其の概況を記して見ると先振出しの日本橋は、旅店の多い所で從て地方人の宿泊するもの中々に多く、殊に目抜の場所であるから常にも增した



賑かさであつた京橋區も日本橋同樣で麴町區の丸之内から九段へ懸けての賑ひは云ふ迄もない赤坂區は當日式場の所在地であるから、彼の邊の雜閙は織るが如く麻布區は一體が靜かな所であるが、此の日ばかりは軍帽やらシルクハットやらで、常の俤を止めず芝區は增上寺へ出懸ける地方の人少なからず、愛宕山から市中各所の彩旗を眺める人も大分あつた四谷區牛込區は軍人の多い所で、終日カーキ色の往來絶えず神田區小石川區本郷區は別段記す程の事もないがそれでも常に似ぬ賑さであつたのは勿論である下谷區は上野公園のある所で淺草區はお馴染の觀音樣のまします所であるから、何かに付けて雜閙するのは例の如く、殊に淺草公園は非常の人出で、花屋敷の象君、猿君、熊君など、時ならぬ御馳走の多いのに終日ホク〳〵ものであつた本所區深川區は是亦別段記す迄の事もない。

見よ五月八日の寫眞畫報

美絶快絶を以て大好評の本誌次卷目次左の如し。

◉光澤寫眞版　竹田宮朝香宮。△北白川宮妃殿下。△九條公爵夫人。△來朝の伊太利皇族。△來朝の蒙古王。△震災十日前の桑港。△伊太利噴火山。△新任の要職（以上二色刷）

◉彩色石版と三色版　招魂祭御魂移し△慘絶凄絶桑港大悲劇△相撲八狂△少女と藤花

◉美麗寫眞版　大觀兵式盛觀△招魂祭△伊藤統監と園遊會△桑港日本領事館△嗚呼米國桑港△常陸山部屋と七力士△東方部屋と七力士△獨帝の銀婚式△南都の古刹△妻吉の浦里△一妾三態△新築の博文館と園遊會餘興踊及び假裝行列△其他美人山水時事奇風等の寫眞艶又妙を極む

◉面白く有益なる記事　人物評は兒玉源太郎子と豪傑常陸山△時事漫評△珍紛漢紛記△巴里の女△奇中奇譚△落語藝者の進化△豫傑奇人談△春の旅日記△倫敦の暗面△大阪珍聞△滑稽ばなし△其他時事漫畫滑稽畫等面白き事限なし。

◎前金冊數割引及郵稅表

▲正價一冊　金貳拾錢　郵稅　金貳錢

冊數	前金	郵稅	合計
三冊	五拾七錢	六錢	六拾參錢
六冊	壹圓拾錢	拾貳錢	壹圓廿貳錢
十二冊	貳圓拾五錢	貳拾四錢	貳圓卅九錢
二十四冊	四圓拾錢	四拾八錢	四圓六拾八錢

每月一回八日發行　寫眞畫報定價

●右の外機に應し『臨時增刊』發行すべし

廣告料

五號十九字詰	一行	一段（三十八行）	半頁	二段（七十六行）	一頁（百十四行）
特等	………	二十七圓	四十一圓	五十三圓五十錢	八十圓
一等	五十六錢	二十一圓	三十一圓	四十一圓	六十圓
二等	四十五錢	十七圓	二十五圓	三十三圓	四十八圓
三等	三十七錢	十四圓	二十一圓	二十七圓	四十圓

◎尙委細の事は博文館廣告部へ御問合あるべし

註文略規

▲御註文は總て前金の事、前金相切れ候節は送本停止す
▲郵券代用一割增、目錄及註文規定書御入用は往復葉書

明治三十九年五月三日發行（寫眞畫報第壹卷第七編）

編輯兼發行人　押川方存
印刷人　山田英二
印刷所　東京市小石川區久堅町百八番地　博文館印刷所

不許複製

發行所　東京日本橋區本町三丁目　博文館

佐藤陸軍少將題字　井上文學博士序文
秋山梧庵君編纂

再版

現代大家 武士道叢論

全一册　洋装大判紙數五百餘頁　正價五拾錢　郵税拾錢

○日本魂	黒川文學博士
○武士道を論ず	井上文學博士
○武士道は物部大伴二氏に興る	重野文學博士
○武士道	細川文學博士
○武士道と將來の道德	井上文學博士
○勅語と武士道	松本文學博士
○武士道論	三好退藏君
○武家時代の法律に現はれたる道德主義	三上文學博士
○武士道の批判	小林文學士
○武士道の話	渡邊子爵
○時局より見たる武士道	井上文學博士
○武士道と今後の教育	戸水法學博士
○大に士氣を振作せよ	佐藤陸軍少將
○學者の邪說を破す	同
○浮田佐藤兩氏の論爭に就て	井上文學博士
○文學博士井上哲次郎君の批評に答ふ	浮田和民君
○再び浮田氏の辯論に就て	佐藤陸軍少將
○浮田氏の答辯を讀む	井上文學博士

外現代大家の講話三十八を輯錄せられしもの著者の意蓋し將來國民教育に資する所あらんとてなり愛讀を請ふ

警視總監　安樂兼道君題字
警視廳警視　内務省書記官　文學士　松井茂君著

警察の本領　一名公衆と警察

全一册　洋装菊半截版　紙數約二百三十頁　正價貳拾五錢　郵税六錢

警察の語の世人に誤解せられしや久し矣、否唯に世人のみならず、當路の人と雖も亦其眞の意義を誤るもの少からざりしが如し、或は以て濫に人民を虐ぐるものと爲し或は又以て政府者流の爪牙と爲す然れども警察豈斯の如きものならんや、警視廳主事松井茂君深く之を慨し、本館に囑して此書を公にせらる、記する所は警察教育の普及、公德と警察等よりして助長的警察と警察行路に及びて公衆と警察との關係を説くと最も詳細悃切を極む、君は警視廳内に於て要位を占むること甚だ久しく、嘗て主事の顯職に在り、又曩には職務を以て遠く歐洲に遊び、彼地警察の制度に通ずること深きを以て知らる、其觀察の明にして其説く所の正しき架説を須ゐざるなり、職に警察に在る者は之を以て執務の指針と爲すべく又其保護の下に生息する所の人民は、之れに因りて以て警察の本義を知了其煩をなさゞるの注意を取らば、蓋し彼我兩者の幸福のみにあらざるなり、敢て之を薦む。

發兌元　東京日本橋區本町三丁目　博文館

東京美術學校教授　白井雨山君閲
森田洪君　鈴木古拙君　牧野等君共著

應用家庭美術

全一册

(新刊發賣)

洋装四六判美本　紙數三百四十頁　正價金四拾錢　郵税八錢

▲口繪!! 鮮魚之圖(三色版) 石膏型像(寫眞銅版) 磁器花瓶圖(石版彩色刷)

本書概目

發兌元　東京市日本橋區本町三丁目　博文館

博文館編輯局編纂

太陽臨時增刊 新法令 附第二十二帝國議會史

四月廿日發行

第二十二回帝國議會は戰後の經營に任ぜる第一次の議會にして之を前の諸議會に比ずるに、其重要の點に於て幾と比儔を見ず議する所の法案は、其數甚だ多からずと雖も、之を大にしては有名なる鐵道國有法あり、市制町村制改正案あり、輸出羽二重練業法あり、韓國に於ける裁判事務に關する法律あり、韓國統監の職權に關する法律あり、廢兵院法あり、醫師法あり、其他規則の改正變更等、重要なる法律は決して尠しと爲さず、之れに加ふるに、過去一年間に發布せられたる諸種の法令を以てして、太陽臨時增刊『新法令』を發刊せんとす、編纂、例によりて整然、校正又嚴密なり、而して末尾に附する所の『第二十二議會史』は春汀鳥谷部氏の筆に成りて叙事簡明、九十日間の經過は卷を開ひて即ち之を知るを得べし、また是れ座右の寶典、國民必讀の好書なり、敢て之を薦む、

洋裝大判二百五十頁
口繪寫眞銅版十六葉
正價金參拾錢
郵稅參錢

發兌元 東京市日本橋區本町三丁目 博文館

…君著

明治三十九年 袖珍世界年鑑

◉全一冊 洋裝菊版半截縱五寸二分横三寸八分總布金文字入 約六百頁 ◉五月上旬發行

▲正價金七拾五錢
▲郵稅八錢

◉特價＝明治三十九年五月二十日迄の御注文に限り金六拾五錢（外に要送料）

日本の部

帝室、政體及政治、面積及人口、宗教、教育、裁判及犯罪、救恤、財政、國防、産業、商業、船舶及水運、内國交通、外交等に分ち本邦の進運を表章する最新の統計事實を摘錄す

各國の部

海外各國を一國毎に日本の部と同一の科目に分ち五大洲中人口多寡の順序に依り排列し、且つ輓近數年間の事實を連接し、以て各國現時の趨勢を詳かにす

世界の部

世界の水陸面積人口を始めとし略ぼ前掲の科目順に一表毎に各國を比較對照し以て世界の何れの國が何の點に於て優り且つ劣れるかを示す、特に今回の内外各國海軍戰闘力比較の記事は最近の調査を掲げ大方の淸覽を待つ。

實用の部

度量衡、和漢年代記事參照、利子計算早見等其他實用に供すべき諸種の統計事實より日常必須の重要諸規則類を掲載す。

本書は四大部に分ち著者の心血を濺ぎたる世界年鑑の内容に倣ひ更に其粹を抜き精を萃め重きを新事實の報道に措き記事の簡潔と携帯の便とを以て刻下の需用に供せんとするものなり著者の統計學に篤き世既に定評あり本館曩に著者と相謀り明治卅七年世界年鑑を發刊したるに大方の高需を蒙り殊に著者伊東君の客歳十月擧行臨時臺灣戸口調查事務視察の爲め渡臺の折は同地官私の世界年鑑需用高實に三百部を超へ同君往返の途次に於ける各府縣の購需亦豫想以上に達し發兌以來數月を出でずして豫約注文の外諸方よりの淸需に應ずる能はざるに至れり。即ち著者の臺灣より歸るや時偶々歳尾に瀕し明治卅八年世界年鑑の再版に暇なく遂に同君と謀り其勵精に依りて急劇斯巻を出だすこととせり本書素と袖珍書なれば常にポケットに挿入して一たび繙かば宇内の大勢を窺ふに足るべし氏が大書冊の編纂に長ぜるのみにあらず即ち本館從前政敎、地理、文化等に關する編修を詳むる毎に同氏の統計表を載錄し來り殊に客年末刊行の當用日記及懷中日記も仰ぐに同君が統計の正確至便なるを以てしたるに我國戰後の需用頓に進みたるものか無慮百萬部を賣盡したるが如き私かに本館の誇りとする所併せて本書内容の簡にして要を逸せざるを知るに難からず。思ふに戰捷の國民は遂に世界を知らざるべからず一部倭小の冊子能く精を悉すとのみ言はず然れども廣汎の記事細大の事跡之を索むるに舊來の世界年鑑あり今本書を發行する所以抑も期する所なくんばあらず乃ち本書も又た逐年發刊の期を過たず世界年鑑に先んじて恒に新事實の報道を任とせば庶幾くは江湖需用の在る所に適ひ以て國勢の隆運に副ふを得ん哉敢て大方諸賢の座右に一本を薦む

發兌元 東京市日本橋區本町三丁目 博文館

(明治 五 月 三

●定價金貳拾錢

(博文館印刷所印行)